

川柳端



No. 891

麻生路郎・葭乃句碑建立記念川柳大会特集

八月号

第7回 川柳塔まつり

＜同人総会＞

と き 10月7日(日) 午前10時～11時半

ところ ホテル・アウィーナ大阪 3F 生駒

(近鉄上本町・地下鉄谷町9丁目下車・TEL06・6772・1441)

議 事 平成12年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告
平成13年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

＜各賞表彰式・記念句会＞

と き 同 日 午前11時開場・午後1時開会

ところ ホテル・アウィーナ大阪 4F 金剛 中・西

表彰式 路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・茴香の花賞・一路賞
各地柳壇賞の表彰式を午後1時から行います。

おはなし 「続・うがちからうがちへ」 橋 高 薫 風
兼 題 「深 い」 (横 浜) 清 水 潮 華 選
「い つ も」 (出 雲) 竹 治 ちかし 選
「予 感」 (米 子) 政 岡 日枝子 選
「見 る」 (鳥 取) 土 橋 螢 選
「う ど ん」 (堺) 板 尾 岳 人 選
「燃 え る」(事前投句・9月10日締切) 河 内 天 笑 選

◎各題2句・欠席投句拝辞

出句締切正午 午後4時半終了予定

会 費 2000円(記念品呈)当日いただきます

＜懇親宴＞

と き 同 日 午後5時～7時半

ところ ホテル・アウィーナ大阪 3F 葛城

会 費 7000円(会席料理)

宿 泊 ホテル・アウィーナ大阪 8000円(朝食付)

○事前投句および懇親宴・宿泊の申込みは本誌同封のハガキに明記の上、9月10日(月)までに本社事務所宛お願いします。

○懇親宴・宿泊のご送金(句会費をのぞく)は同封の払込用紙でお願い致します。

○記念句会・懇親宴には同人・誌友にかかわりなく、一人でも多くの方々の御参加をお待ち申し上げます。

主 催 川 柳 塔 社

比翼句碑の除幕

河内天笑

千光寺山荘の窓の満月は明日の除幕式の晴天を約束するように、赤く大きく坂の町を照らしていました。そして七月七日の朝が明けて、「どうだ」と言わんばかりに尾道は晴れ渡りました。エピソードに聞く晴れ男、麻生路郎を立証するのに十分なすばらしい除幕式日和となりました。七月五日の予報では六日と七日の四国・中国地方は大雨と聞いて居りましたので雨は覚悟の上の事でしたが、万が一にも除幕式の間だけ雨が止んでほしいと願っていました。その万が一がいまま晴れ渡っているのです。私のみならずこんな晴天に恵まれるとは誰が想像出来たでしょうか。

除幕式ははじまる五分前に、大阪からのバスの一行四十人が到着。総勢約八十名ほどで紅白の幕がましき式場志賀直哉旧居前文学公園は、溢れんばかりに賑やか

に除幕式がはじまりました。

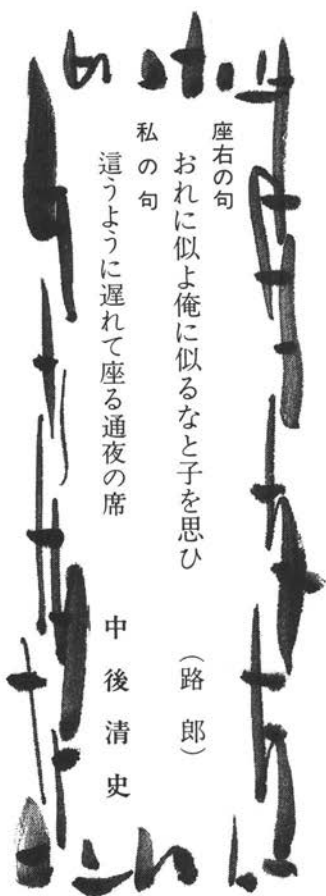
亀田良一尾道市長、島本実夫氏の代理人畠中美恵子さん、西村梨里さん、そして橘高薫風名誉主幹の手により、平成十三年七月七日朝十一時五分に麻生路郎・葭乃両先生の比翼の句碑がこゝ尾道に誕生しました。熱い思いが胸にこみ上がりました。たくさんの人達の熱意の結集で今があること、そしてこの晴天。思わず万歳を叫びたくなる衝動に駆られました。

尾道市長へ句碑贈呈の目録を、そして市長からその感謝状を受けとり、セレモニーはスムーズに進み、梨里さんの感動的な謝辞のあと、地元の銘酒「酔心」をたっぷり句碑に吸っていただいて、大きな拍手の中で除幕式はおそかに終了致しました。東洋石材さんが選んでくれた句碑の石は「万成」（まんなり）と言いますが、別名「赤御影」とも言われ、地酒をたっぷり吸った句碑はいい色合にほんのり染まり、にんまりと笑ってくれているようでした。式終了後、尾道市役所の公会堂別館で記念川柳大会が開かれ、百八十名の出席者を

得て大盛会になりました。地元竹原川柳会のスタッフの皆様にはいろいろご苦労様でした。特に小島蘭幸氏のご息女史子さんの司会進行ぶりは実に見事で、大会に花を添えて下さいました。また西岡部長はじめ市役所の皆様にも感謝あるのみです。

前日の六日朝、車で雨の泉佐野港を出て淡路島を経由、鳴門大橋を渡って香川県白鳥町へ。木村あきら氏ほか五名の柳友に迎えられて、栗、薫風両氏などの待望の句碑めぐりをしました。この地でも恵まれたことに到着直後に雨が止み、名物の讃岐うどんをご馳走になったりしたのしいひとときを過しました。そして多度津港から再びフェリーで福山港へ。瀬戸内海の小さな島々を縫って鏡の様な夕刻の海を、ロマンチックムードに浸りながらの船旅も味わうことが出来ました。

尾道での川柳大会終了後、一行七名をのせたワゴン車は翌八日に開催される第四回鳥取県川柳文芸大会に赴くべく、次の宿泊地である大原町武蔵の里へと向かったのです。



座右の句

おれに似よ俺に似るなと子を思ひ

(路郎)

私の句

這うように遅れて座る通夜の席

中後清史

川柳塔 八月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 比翼句碑の除幕

「司会は喋るな」

河内天笑……(1)

西田柳宏子……(2)

川柳塔(同人吟)

河内天笑……(4)

自選集

水煙抄

板尾岳人選……(57)

愛染帖

波多野五楽庵選……(83)

川柳の群像

(做)東野大八……(86)

誹風柳多留二四篇研究

西出楓楽選……(90)

茴香の花

岩佐ダン吉……(92)

秀句鑑賞

瀨戸まさよ……(98)

同人吟
水煙抄

路郎先生の遺訓

「司会は喋るな」

西田柳宏子



この度、川柳塔社川柳の始祖麻生路郎先生、並びに夫人麻生霞乃先生の句碑が先生の御出身地である文学の香も高き尾道の、数々ある句碑や記念碑、顕彰碑に仲間入りして、七月七日建立除幕式の盛典を迎えたことは大変嬉しいことであります。

路郎先生のご息女西村梨里様、並びに川柳塔社名誉主幹橋高薫風先生のご努力とご熱意により立派に出来たもので、数少ない路郎門下生たる不朽洞会員の末席を汚す私にとって本当に嬉しい限りである。

不勉強で折角不朽洞会員でありながら同人吟を出すでもなく、先生のご指導を受け止められなかった自分が恥かしい。

然しながら私が直接先生から教えて頂いた唯一私が肝に銘じていることがある。それが「司会は喋るな」の一言だった。私が始めて句会の司会を仰せつかり、菊田いさむ氏のあ

「墓」	岩切康子選	(94)
一路集「ドラマ」	石倉芙佐子選	(94)
「街」	内海幸生選	(95)
初歩教室「困る」	吐田公一	(96)
■エッセー 海ゆかば	西山 幸	(99)
麻生路郎・葭乃句碑建立記念川柳大会		(100)
七月本社句会	石原伯峯・新家完司・小島蘭幸	(118)
各地柳壇(佳句地十選/羽津川公乃)		(125)
柳界展望		(141)
八月各地句会案内		(144)
■編集後記	楓楽・義子	(146)

座右の句

飲んで欲しやめてもほしい酒をつぎ

(葭 乃)

私の句

冬帽子温い話を聞きたがる

奥谷 彩子

とを享け継いだ時だった。

先生に呼ばれ「柳宏子、司会をするそうだな」「ハイよろしく願います」「司会は喋るな!」「?」いぶかる私に追討ちのように「司会者の話を聞きに来ている者は居ない、来ている人は講師の話や、選者の披露を聞きに来ている。司会はスケジュールに従い、時間通りにプログラムを進行して、時間通りに閉会すれば、司会者はよかったと言えよう?」折角の司会の大役に意気込んでいた私はすっかり固くなり、何を喋ったかも判らぬ程夢中で閉会宣言して先生に挨拶すると、先生は笑顔で「うん、よしよし」と言われホッとしたのを今更のように覚えていた。

先輩の菊田いさむ氏の司会を振り返る時、確かに物静かに要点だけ喋って居られたのが輝いているように思い出された。

時移り句会も増え、立派な司会の方々も増えて来たが、次第に司会者もプロ的な喋りを取り入れ、司会が笑いを得ているのを拝見することが多くなっている。是非は別として目立ちすぎ、喋りすぎる司会には苦笑を禁じ得ない。一時期「司会は柳宏子」と言われたことも、先生の遺訓「司会は喋るな」を常に心がけた賜と感謝している。

句碑除幕には体調、時間的理由で参加出来なかったのが残念でならない。



河内天笑選

堺市和田つづや

真つすぐな道は無視する癖がある

殴られて嬉しかったよお父さん

血縁という暗黙の手を繋ぐ

親父より妻に鼻根は許されよ

二階から紙飛行機を投げて鬱

有難い事に眠れる食べられる

寝屋川市岸野あやめ

ときどきはガス抜きをする電話料

寡婦五年陽の照る方を見てくらす

ドクターと阿吽の呼吸で話し合う

ロボ犬も可愛がらねば懐かない

胸に傷なくてよく寝るよく食べる

親よりも友が恋しい夏休み

竹原市小島蘭幸

句碑除幕旧居が光りだしてきた

師の句碑よ妻と私の真ん中に

絆とや夫婦の句碑は美しい

ふるさとの山に抱かれて句碑眠る

ボクがいらないと心身症になる犬だ

犬の歯を磨く厳しい妻である

倉敷市井上富子

シンブルイズベストでござる塩胡椒

手作りの旅は気ままな予定表

肉体と心の歳がずれている

ガーデニング中毒になる花シャベル

心の窓に楽しい雲が湧いてくる

友達になりたくなつた食べっぷり

川崎市 和泉 あかり

万緑の中で炎えてる朱の鳥居
その中のただ一本が枯れている
グループにはぐれて花の息にふれ
寺めぐり百の迷いをひきつれる
電話より笑顔が読める手紙待つ
玉子割るひとりぼっちも悪くない

尼崎市 田辺 鹿太

地味なだけ父に似ている茄子の花
歳時記に背いて咲かす恋の花
冗談も過ぎるとにごる夏の河
やりくりは任せる妻はプロだから
頼り甲斐ある男には瘤がある
ハッケヨイ残った命とおしむ

河内長野市 加島 由一

種仕掛け少しあります夫婦仲
添いとげる覚悟ほかには何もない
旅慣れた客だチップを先に出す
国会が漫才よりも面白い

数字には出ないあなたのいいところ
押し売りが来たけど今日は妻がいる

鳥取県 新家 完司

猫ツバメ蜂と出会った散歩道
さけのみは突然来てもウエルカム
大臣も議員も名札つけない

嘘がうまい人は川柳もうまい
京都駅まさしく未来ステーション
我が影もピサの斜塔となりにけり

北九州市 梅田 宣司

梅雨晴間おんな一気に大ジョッキ
バリウムが俺の前科を写し出す
病む妻に花を買い足す市場籠
ホラ吹きが揃い絵になる屋台酒
成り行きに腹の太さを見せて去に
よく聞けば日本語でした娘の言葉

三田市 北野 哲男

ハイ毎度 大阪環状料金所
一平米 百万円の並木道
身に沁みる今ポリーナスを出す立場
粒揃いいえ団栗の背比べ
大一番凌いだ口はリズムミカル
助手席に座ると回り拭き始め

岡山県 大石 あすなろ

この出会いビタミン剤になりました
鞆から出ようとしないう旅の風
三姉妹 花弁の芯に母がいる
目も耳もやせて口だけよう肥り
ふつくらと御飯を炊いて客に出す
賞味期限切れてのこった人間味

鳥取市 植田 一京

期待した誘い来ぬまま日曜日
赤ちゃんと意味不明だが会話でき

兄弟も絆とききたしあめる
母ゆずり健康体をありがとう
果せない夢は素敵なまま胸に
ごめんネと言われコックリ赦しちゃう

鳥取市 福田 登美

自尊心冷めて静かに歳をとる
心の彩他人の視線に磨かれる
振り向かぬ意地をほんとは悔いている
まだ燃える命に紅をさしておく
おしゃれして少し気どつて試着室
筋書きになかった介護長い旅

鳥取市 夏目 健一

一歩でも踏み出すことが冒険だ
人間の証セクハラしてしまう
どうしても飯を食わぬと落ちつかぬ
ぼろぼろになつて田舎に帰る風
どん底を這った力がバネになる
隔離とは外が受け入れないからよ(ハンセン病患者)

鳥取市 岸 本宏章

ボランティアいなけりや棚田生きられぬ
成績のいい子が塾へ行っている
太鼓判押されて肩が力みだす

カルチャーへ翔んでいるのはおばあちゃん
学生の薄い鞆に見る未来
冷やかしの客もにつこり送り出す

鳥取県 石谷 美恵子

太陽が治してくれた軽いウツ
目のやり場ないがしっかりと見てました
新緑の野点 贅沢なひととき

ひとときの我慢逃げたいひととき
ウツプンをはらす三枚皿割つて
どこで描いても母の絵は丸くなり

米子市 鷺見 正子

年金を掛けてるうちが華かしら
いざの時考えている縄梯子
身の内の敵を消毒する酒だ
群れている方が弱いと限らない
変身へ試す百円化粧品
賞味期限切れて夫婦に味が出る

松江市 銭山 昌枝

めでたい日どこを切つても笑い声
仏壇が祭りのような年金日
一端の文士気取りになれる部屋
宇宙旅行どころか温泉にも行けぬ
少子化を笑い五人目産むと言う
十分に暇はあるのに金が無い

竹原市 三宅 不朽

紫陽花の翳はれればと雨に和す
熟年のもういいでしょう付け睫
犬と散歩が似合う乳房の高からず
美人といても美人と思うだけになり
漫才師笑い疲れてみたかろう
縄でくくれる豆腐に出合う島の葬

岡山県 矢内 寿恵子

ひと呼吸おいて拳を開かせる
傾いた世相に巣立っていく未来
夢塚に葬るものが増えてくる
番傘も蛇の目も知らぬ雨の街
スイッチオン指先だけで足る文化
失言と騒ぐな真実言っただけ

香川県 神保 坊太郎

灼きついた残像八月のきのこ雲
理想高くと言われつづけて未だ一人
さわやかなエッセイ高木美保を読む
遺産分け介護せぬのが取り仕切り
ステテコの羅漢が好きな熱いお茶
お仕置ではいった蔵が好きになり

香川県 川崎 ひかり

優しさに触れてあふれる涙ッポ
どの女も泣いて絵になる訳じゃない
ライバルの背中がやけに光ってる

逢いにゆく心を映す水鏡
恋人を幾度殺した胸の内
極楽は好きな男のうで枕

松山市 宮尾 みのり

年の功上手に霞む癖がつき
タカラヅカみんな少女の顔ばかり
ベルばらへあのドキドキがよみがえる
バアサンと言われシヨックが隠せない
想い出に温度差のあるめぐり逢い
ばらばらになろうよ自立するために

吹田市 山本 希久子

滑走路風に異国の匂いあり(イタリアの旅)
ローマに通ず道は迷路で凹凸で
南下するほどに陽気なイタリア人
スタミナの配分をする二十四時
許すこと赦せないこと雨季になる
紙袋と帰る平凡な一日

大阪市 町田 達子

ミュージアムで時代追うてる人形展(与 勇輝展)
丁重に夕べの祈り走馬灯
暑いけれど明日は菖蒲の笑顔見に
恐いニユース暫し忘れて花と居る
ひらひらと風 水色に番蝶
肋骨のヒビが時どき痛む梅雨

高石市 浅野 房子

繕えぬほころび抱いて生きている

先方にいつも合わせている都合

了承もせぬのに引いてある介護

すぐ信じすぐ裏切られすぐ悔いる

べらべらと喋り品格下げている

梅雨明けを猫も私も待っている

枚方市 寺川 弘一

無視されぬよう時々撫でる妻の猫

人間にミクロンまでを刻める手

午後十時今日をまとめる時間です

母のお出かけ一から十のメモがある

恋人は仕事女房は戦友だ

遺言状の想練る楽しみある余生

八尾市 生嶋 ますみ

人様から見れば不足のない夫

遊びぐせなかった母がよく遊び

どこどかと税金がくる候になり

ふとある日易者の前に座ってた

貧乏も金持ちもない冷や奴

サラ金がどうぞどうぞとティッシュくれ

松原市 小池 しげお

切り札があると歩幅が広くなる

イロハ順で先に呼ばれている男

仏さまも一つ嘘をつきました

天ぶら屋の腕見てもらう長い箸

隣には箱の大きな土産買う

立小便みんな一緒の顔になる

羽曳野市 徳山 みつこ

激辛のメニューがにおう総理シエフ

テレパシーかしら遠い子夢に来る

なめくじを箸でつまんで動中静

目と鼻の先へごぶさたしてしまい

神様がつくくと喧嘩がやめられず

胃袋はまだ覚えてる敗戦日

藤井寺市 太田 扶美代

やさしさへ男の頑固あつけない

お見舞というより気合入れに行く

どの言葉も今日のわたしを傷つける

六十の思慮がまたまたヘマをする

シナリオと全く違ってきた余生

柔らかいお菓子で慰めてあげる

富田林市 片岡 智恵子

真つ青に彩塗り替える古希の空

モノクロの名画と逢えた雨の午後

梅雨明けを待つて告白するつもり

青リング太陽に背を向けたまま

食べることに好きだった團伊玖磨

結局は自分で探す青い鳥

河内長野市 水谷 正子

安心が窮屈つれて来る同居
大仕事終えて仲間とのむビール
振り向けば桐が咲いてる母恋し
地球儀の太平洋を横断す
留守電がお帰らない言うてくれ
同窓会 杖が三人増えました

岸和田市 原 さよ子

発つ日までわくわく燃えるバスポート
シルバーの集いと言えどおしやれして
不意の客即座の料理お手のもの
筆勢の凄さに酔うた書道展
腹立ちをふっける凄雨
なにげないその一言に救われる

岸和田市 高須賀 金太

借金がないから物が言いやすい
気がつけば妻の後ろをゆく私
漬物になって輝く間引き菜よ
無になんかなれる訳ない座禅組む
軸足がぶれて的はずれな答え
新庄も中継してやNHK

横浜市 菱田 満秋

行きつけの蕎麦屋の額がまだ読めぬ
友の訃が続いて速い走馬灯
病室は峠を越えた鳥が啼き

せせらぎが枕の下で眠らせぬ
退院を待っていたのは枯れた鉢
ご遠慮も知らず着メロ派手に鳴り

さいたま市 八田 敏

田面吹く風に誘われ万歩計
垣もぐり来た竹の子のお裾分け
ペランダは出入り禁止の小鳥の巣
子育てのドラマを見せて雛巢立つ
国会のテレビこの頃婆が見る
カード持ち老いに気楽な無駄遣い

愛知県 早川 盛夫

人間が好き笑顔ならもつと好き
そんな筈ないと病院変えてみる
若返りには丁度いいカタカナ語
ジョギングの道で出合ったお大様
もう少し子供でいたい漫画本
する事がいっぱいあつて何もせず

黒石市 相馬 一花

太ももを美味しく食わずレストラン
助平は長生きすると言う名医
嫌われていると知らずにやるチップ
震度六扁平足は倒れない
責任を取れとしつこい岩田帯
母親のようなお酌に酔いも醒め

海南市 三宅保州

もう走るなと大病をくれた神

僕の椅子明日もあるとは限らない

定年後やつと尻尾がとれました

急いだら終着駅が近くなる

つまらないものも入っている金庫

古里を変えてしまった村おこし

和歌山市 西山 幸

曇り空 雑事雑念溜めている

梅の実を干し歳時記は続くなり

ひとりへの挑戦がある万歩計

敗者復活戦へジョークを蓄える

いっぱいの見栄さむざむと花の壺

生ビール深傷浅傷が喋り出す

和歌山市 田中みね

私の全裸に脅えている鏡

三段腹の団体様で湯に浸る (中学の同窓会 2句)

同窓会みんな十五の顔となる

夫婦合作見てよ見事な茄子胡瓜

気前いい財布ご案じ申し上げ

負け惜しみそこまで言うと言劇だな

自立したらしいがんばれちぎれ雲

ボツリひとこと精一杯の抗議なり

モゴモゴと言葉にならぬ言い訳も

和歌山市 山根めぐみ

姑のキムチみたいなお説教

大芝居打ってあの世へお旅立ち

舐め合うて癒える傷ではなさそうだ

尼崎市 内田美也子

童謡を唄うと風がタクト振る

どちらが姉いもうとかしら老姉妹

心経の息も揃って遍路杖

雨遍路お大師さまに励まされ

どんな人住んでいるのか薦の家

みつめ合うと恋になりそうお月様

西宮市 門谷たず子

焼け跡の闇に包帯白く浮く (友の出生)

生きてゆくのに辛いこの世の老いと知る

生かされた友にもろ手を差し延べる

この世のことはこの世で終わる火事見舞

一病をおそれ守りてふたり旅

祈ることばかりがふえる仏の灯

西宮市 山本義子

タンポポの落ちつくところ棚田なり

青い空 心配ごとを洗いあげ

オトコでもオンナでもないヒトがいる

かまぼこが板から落ちて溺れてる

立板に水のおひとを立てておく

ファックスよ よろよろ迷うではないぞ

可児市 板山 まみ子

雨降りはいやでも水は欲しい梅雨

水芭蕉求める尾瀬の人の波

温泉に疲れを流す山歩き

カラオケの腕もさぞかし僧の喉

苗五本植えて豊作待つオクラ

富士宮市 渥美 弧 秀

省略の言葉に慣れて老夫婦

老衰の胃腸は酒の薬漬け

回り道した人生に詩が生き

東海道視野一ぱいの富士の旅

太陽の恵み老夫婦で深呼吸

静岡県 藺田 獏 杏

武者人形古び子供も変声期

よく通る声で我が家の雨蛙

七つの子からすも昔愛された

鳥帰る育った沼を自慢気に

前例が無いと役所がはね返す

富山市 舟渡 杏花

ボーカーフェイス見事揉めごとクリアする

複眼レンズおやおや鬼が泣いている

定年や残りのいのち磨ぎ直す

バランスを保つ大きな深呼吸

曲り角般若心経口をつく

富山市 島 ひかる

野を渡る風と遊んだのは綿毛

ストレス解消山に心を遊ばせる

リーダーに指名疲れたなど言えぬ

先人と同じ歎喜の山に佇つ

二度の職終えて夫婦の旅日記

富山県 増田 紗弓

ドクターの風邪を気遣う受診券

迂回路になにげなくある助け舟

ユニークと言われようと母の顔

くノ一の術を侮ってはならぬ

坂道の途中で霧が晴れてくる

弘前市 高橋 岳水

自販機に囲まれ育つ依存心

哲学を書き溜めている庭の石

午後五時の顔に生気が舞い戻る

読書して脳の隙間を埋めんとす

パソコンを叩いて老いを追いかえす

弘前市 相馬 銀波

拙速と昼の素顔を裁かれる

無党派の皿にあふれる自己主張

脇役の汗の手拭乾かない

この壁の厚さに思い改める

ねぶたままであれもこれもスケジュール

弘前市 高瀬霜石

居酒屋に群れるトカゲの尻尾たち

四コマに今日のわたしを閉じ込める

長靴を履く雨の日も晴れの日も

脱サラの屋台に並ぶ白髪首

若過ぎる遺影にふと見とれて

弘前市 宮崎ヒサ子

妹の忌明けも近く郭公鳴く

さり気なく論じてくれてじんとくる

植物園見て目も胸も洗われる

納戸の隅に思い出箱を置いている

気が付けば小さな庭は花盛り

弘前市 岡本花匠

ボランテニア程よい汗の余生道

大様に草取り元気母卒寿

ふと闇に沈み落ちする立ち眩み

お盆前 農地すつきり草刈機

ねぶた馬鹿一氣に燃えて秋の風

弘前市 小寺花峯

人間とは弱きものなり酒を乞う

振り返る過去には酒の数ばかり

夢はみな無口になって同化する

明日散る花にもあつた笑い顔

県名が浮かんでこない住所録

弘前市 須郷井蛙

嫁の荷へ堪忍袋詰めてやる

日の丸を出せば右側かと言われ

センターで父が大きく守備をする

特ダネがあるから参加クラス会

弁当に今日のハートが詰めてある

弘前市 櫻庭順風

栗師の墓碑には墓碑の花菖蒲

お線香栗御殿に奉る

栗師の句碑のあたりの揚雲雀

溢れ出る湯殿を覗く朝日影

水中歩行歯をかみしめて噛み締めて

弘前市 今愁女

朝の床でカッコー聞いている平和

蟪蛄の小さいながら斧をふり

平穏な暮しに慣れて胡瓜もむ

サルビアを素通り蝶にも好き嫌い

青葉風 城のめぐりも衣替え

弘前市 蒔苗果林

友の掘る土 陽炎を燃やしてる

陽炎に亡妻が隠れて見てるかも

澱みない鍬も蚯蚓に立往生

葉桜に老いもプランコ漕いでみる

公園の絵を描く人と歳比べ

十和田市 阿部 進

孫くる日妻が朝からはしゃいでる
結ばれて貴男好みの色になる
いい話横どりされて座が白け
情の花かわく心に咲かせたい
手間暇をたっぷりかけた母の味

砂川市 大橋 政良

野菜たち生まれたとこの泥をつけ
散骨はよそう泳げぬ僕だから
全身で喋る話術に縛られる
言い勝って疲れが舌の根にのこる
難聴の耳にもラッパ勇ましい

東京都 播本 充子

憧れの舞台だのびのびとやろう
頑張って下さいという嫉妬心
肩組んだ日をなつかしむバツシング
ジーンズカン野菜ばかりを追加する
アトリエの友は格闘家の風情

東京都 後藤 早智

紫陽殿あじさい寺のいわく知る (名月院 4句)
色押えひたすら雨を待つ紫陽花
参道の鎌倉石が深く減り
明月院やぐらに仏達の浮く
一日の初め終りのEメール

横浜市 清水 潮華

晩節へブレイキかかる夏帽子
やんわりと核心を衝く自衛策
何処にでも有るから迷う旅土産
義理果たす土産バッグを重くする
ほどほどの誇りで旨いカップ麺

横浜市 保田 絹子

籤運は無いが若しにも賭けてみる
引力に逆らえば腰痛めそう
聴診器あてれば患者捌けない
首の皺かくせば残る笑いじわ
新鮮さだけは負けないへば胡瓜

横浜市 小野 句多留

一同を集めた母の軽い怪我
平凡が好きと外へは出たがらぬ
会えるかもしれぬチャンスに紅をひく
自己中といわれ落ち込む自己嫌悪
新妻がカレーの味で試される

横浜市 菊地 政勝

分煙の部屋に安堵の喫煙者
言い訳は聞かぬぞ鉢の根切虫
ご馳走になつて無心を切り出せず
進水の船へお酒をぶつつける
江ノ島の小魚夏は沖へ逃げ

横浜市 田中笑子

良い事があると口元しまらない
度忘れをした時だけは歳のせい
聞き入って眠気遠のく深夜便
クーラーに上着一枚持たされる
目測を誤る歳が忍び寄る

横浜市 山下省子

終りまでノート埋まりバンザーイ
貸した金とてもほの戻らない
やさしさは優柔不断にも通じ
人生の賞味期限におまける
ストレート打ってごらんと啖呵切る

高知市 北川竹萌

対面のアメリカ芙蓉明日開花
梅雨の花 悲喜こもごもに日がつづく
あげつらう言葉己に負けている
速いもの早夏休み曾孫来る
赤く炎ゆカンナの窓に母の居ず

高知県 赤川菊野

虚と実の谷間で終わりになきドラマ
生き様を仏間の夫にのぞかれる
繊細で陽気な性は土佐育ち
カリスマと言われる人のかわいた目
肉じゃがを煮る母さんのやさしい瞳

香川県 清川玲子

サンポートさぬきに出来た夢の駅
追う夢を獺に食われてばかりいる
顔見せるだけで喜ぶ里の母
迷路にもすかしてみればある出口
指切りの指に残っている未練

香川県 池内かおり

空腹に勝るグルメは無いと知る
睡蓮と蓮の違いをとくとくと
江ノ島で壺焼きつつく缶ビール
朝食の窓から拝む富士の山
三十円安い薬局へ足が向く

香川県 成重放任

熟睡をしても疲れが取れぬ歳
ダイエットする人ねたむ瘦せ蛙
ひとときの幸せ浸る水入らず
貴乃花 神が宿った力水
緑濃い野菜見ただけ旨そうだ

香川県 瀧井勝

過疎の村棚田に水が通わない
田において子の住む街へ行けようか
長丁場急いては息が続かない
どん底を生きた自信が背にある
まだ翔べる自信新たな地図を買う

松山市 丹下 美津子

昔とった杵柄六法手放せず

俺が死んだら猫に小判のこの蔵書

毎日が日曜だから困る妻

横綱の地位を守って手負い獅子

あの広い空で衝突とは思議

愛媛県 中居 善信

物陰で監視されてる気がするの

ユニクロの服で元氣な孫たちだ

血栓の予防にらつきよ食うている

竹の子の旬に竹の子食いすぎる

食通に媚は売らないトマト旬

熊本市 永田 俊子

今日の風つかみそこねた猫じゃらし

馬鈴薯が土間で芽を吹く反抗期

こだわりを持ち続けてる振じり花

他人さまを憎めないから胃をこわす

ふり返るわが人生の薄い色

熊本県 高野 宵草

ゴミほどの地球で競う私利私欲

うれしげな蝶の楽園無農薬

箒目にやすらぐ落葉二三枚

鮮やかなルージュ バクバク責めてきた

亀の足休まずローンの家に住む

熊本県 岩切 康子

気が付けば記念日ひとり旅の宿

幸せの黄のハンカチに肖るか

内緒買ひ夫の外出待っている

どくだみ茶あとひと干しにチン使う

土除けて根切り虫を探し当て

唐津市 市丸 晴翠

らつきよむく英五のCD聴きながら

梅干しもらつきよも漬けて腰伸ばす

息抜きに畑の土と語り合う

回り道したぶん艶の出る老後

さ迷わぬように冥土の地図持たせ

唐津市 山口 高明

列島の護りは錢で他国軍

桑の実に口元染めた下校の子

ヘソの緒のお守り持った施設の子

目的地真つ直ぐ行けぬ坂の街

飢えている国へ贈れば余剰米

唐津市 宗 水笑

年頭の所感忘れて暮らしてる

洋間では疲れのとれぬフルムーン

吊り橋を渡ってからは太い声

わが子でも厄介者になる不倫

ラブレター推敲しないEメール

唐津市 仁部 四郎

代筆で代読弔辞やはり要る
世の中に少ない美人うちに居る
五尺なら甲だと国に奪われた
草の根を踏みつけ巨悪逃げて行く
相棒になろう草の根民主主義

唐津市 久保 正 剣

金属音一声高く鶴の恋
大変だナースシューズが音を立て
金があればと思うチャンスがたまにある
セクシーと言えぬ女の鼻柱
円稼ぐ観光ビザの赤い靴

唐津市 井上 勝 視

立ちつくした戦後の悪夢巡る月
禁煙を齡計算して止める
柩用の遍路衣装は纏めてる
二度三度初恋出来るのもおんな
お返しの高価に見栄を見てしまう

唐津市 山門 幸 夫

けたたまし鶴巢立つ裏の山
お父さん朝餉のレタス採って来て
贈られた歩行器嬉し散歩道
青空をすつきり割った飛行雲
気の早い露をくれてと草の虫

唐津市 山門 タミ

新しいドラマ始まるウエディング
紫陽花は梅雨に恋して彩をかえ
花は皆緑の服がよく似合う
二人居て晴れのち曇り俄雨
大空の心持つてる幼児の眼

岡山市 井上 柳五郎

再会へ先ず祝盃を献げよう
再会のきょうをビデオに撮り収め
記念写真上や下横向くもいる
満開のさつきわが家の庭飾り
万緑のきらめきひ孫誕生日

岡山市 小林 妻子

ゴルフバッグ君に付き合う暇がない
人並に倒産なんかせぬように
土臭い汗と一番風呂に入る
老人会に行かぬ缶拾いはいやだ
パソコンで作る川柳なら止めな

岡山市 福原 悦子

お粗末な机で書いた立志伝
パソコンの指で草刈り鎌握る
嘘 本音 上手にまげて介護する
ふる里の心の奥にいる蜚
晴れやかに余生磨いて翔んでいる

岡山県 萩野 鮫虎狼

立ち直る息子は親を捨てたがる
雨蛙 梅雨の晴れ間は寝て暮らし
好い天気今日も畑の草が伸び
自販機の缶が冷え切る無人駅
ローカルのレールが春の音をたて

岡山県 山本 玉恵

気晴らしに来てはと山の湯が招く
この想い言い出せぬまま雨あがる
片想い太鼓をひとつ強く打つ
母の味が恋しい飽食の舌
すり切れた量に残る私小説

美祿市 安平次 弘道

裏切りにあうとは知らぬ芥子の花
鍵穴に昨夜の憂さが埋めてある
引き潮へ女は舟を出したが
コミカルな男が夢をくれました
七彩の風が織りなす私小説

宇部市 平田 実男

卒業はない人生も川柳も
過労死をさせて高額納税者
借金も財産のうちローン組む
子にかわり孫へかじらす古希の脛
国連に平和好まぬ鳩もいる

竹原市 森井 菁居

不思議にも追い込まれると出る力
さわやかな感動ビシッと叱られる
パートナー次第で逃げる運もある
落とし穴が待ってる融資可能額
良く流行る健康ランド湯が汚れ

竹原市 岩本 笑子

只今へ猫だけ返事してくれる
ダンスしながら棚田の雨は降るらしく
バラの匂いの中で考えるのはおよし
下界には下界の生活花を植え
奥様は魔女です十万バツと出し

竹原市 石原 淑子

明日咲くその日のための花暦
大宇宙ナスの花見にてんとう虫
そうめんにキュウリの花も添えて出す
宅配とデイサービスで独り居り
梅干の漬け方こまごまベッドから

竹原市 古谷 節夫

暮らし向きグラフが右下がり出す
良い本と出合った町だ君を待つ
昭和史の真ん中へんが花だった
決断を切り取り線に促され
利き腕の生命線が切れている

広島市 森田 文

落胆は無用神さま見てござる

連峰に緑のこだま山開き

老いの坂おいおいクリアしてゆこう

髪の毛一本ほどの迷いで領けぬ

縋りたい胸にベースメーカーあり

広島県 藤解 静風

控訴断念 総理打率をまたあげる

余震しきり風の音にも身構える

四つ角で女の足を待つてやる

縄梯子 最後に降りるのは父だ

ジューンブライド君はまぶしい花になる (姪への祝吟)

出雲市 園山 多賀子

夫唱婦随古い掟のままの終

梅雨の鬱ほのぼの源氏読んでいる

イメージが表現となり昇華する

我儘の言える卒寿の座が温い

人嫌い人恋い卒寿生き残る

出雲市 吉岡 きみえ

キリストを品のいい人売りにくる

せんべいを昔貰った恩がある

負けて勝つ猫背ますますまるくなる

ベッドのくばみへひなびた乳うめる

静かだなあ仏の寝息きこえそう

出雲市 板垣 草丘

五月十五日晴れご懐妊発表

八年目皇統つなぐ妊婦帯

雷が術後の腹で鳴っている

年金十年その出どころに感謝する

草刈機の音を残して逝った友

出雲市 竹治 ちかし

早生 晩生 みんな立派に実を付ける

死んで良い歳などないよ九十二

コーヒーの中で揺れてるシャンデリア

フルムーンとうとう空気になりました

良いリズム出てきた頃に終る旅

出雲市 岸 桂子

ふいの喪に手元狂った今日が暮れ

蛇行しながら小さな夢を追っている

五月風 女の五感弾けそう

忍の文字時々開く亡母の辞書

昭和史に青春残すクラス会

出雲市 岡 あきら

暖房具一つ素直に片付かぬ

年金の痛みを知るや生命線

天晴れのない毎日が忙しい

風采を見ていなされるショッピン

懐も背も冷えこんではしり梅雨

出雲市 城 多喜

空想で始まるわたくしのドラマ
五月病引きずったまま梅雨に入る
アイロンの穴から洩れる溜息よ
癒えぬ傷亡母にした事言つた事
退屈をさせない友のキヤラクター

出雲市 青山 久子

青い空心さらさら泳がせる
衣がえ雲の流れにせかされる
いばら道通つて花の里につく
土曜日は気ままな風になるわたし
水色の余韻で去つてゆく月日

出雲市 小玉 満江

肩も手も足も痛くて梅雨ごもり
おしゃべりなカラスが今日も窓のぞく
人形は指定席から動かない
妻の留守おかまいなしで吸う煙草
眉寄せてメガネずらして本を読む

出雲市 久谷 まこと

あたたかい土が育む四季の味
人柄を表している句箋の字
本性は研ぎ澄まされた猫の爪
一步退くそこでグループ和が保て
鈍行はまた対向車待たされる

出雲市 佐藤 治代

喧嘩して悔しいけれど従いて行く
夫の秘密知らない振りをしてあげる
楽なことばかり選んで惚けそうだ
愛と憎 夫婦を試す風が吹く
使うことないよう祈る介護保険

島根県 堀江 正朗

師の声の懐かし静寂胸つつむ (葉先生)
目があるといいな話題を拾われて
食欲は皿かき回す箸の先
見えた日があつて夢抱く白い杖
耳鳴りに横取りされて聞き逃し

島根県 堀江 芳子

見えた日の夢うたた寝の夫に来よ
すまぬなあ言いつつ怒鳴る夫いとし
他愛ないことで無言の夫婦箸
流れ雲映し斐伊川語りかけ
鶯にひととき和む過疎のよさ

島根県 伊藤 寿美

過去みんな許し合つてる日向はこ
無料券バス乗り継いで行く温泉
爺ちゃんの内緒を孫がリークする
菜園の旬が老父の句読点
定年になつて元気な夫の鉤

島根県 森 茂 美

鈍行の車窓に映える築地松
試着室夫の意見もそつと聴き
墨汁で封印された汚職欄
核の傘雨の漏らないはずはない
子供部屋これが吾が家の伏魔殿

松江市 津 川 紫 晃

食卓を囲む家族にある序列
ライバルと視線が合つて生あくび
恋ひとつ未完のままの夏帽子
にわか雨相合傘も久しぶり
ねむそうな地蔵をおこすつばめ二羽

松江市 小 川 注 湖

滑らかな口調の裏を覗き見る
故郷に凍み豆腐ある温かさ
カラコロと連れの下駄聞く露天風呂
全没も自慢している皆勤賞
一病を持つて長生きしています

松江市 川 本 畔

ごみの仲間と只今バスで旅行中
ごみ箱の中だ安心して眠る
勇気要る隣のごみを拾うとき
世の中のごみにならないよう生きる
眼裏のごみ一点が拭えない

松江市 安 食 友 子

裏表紙けなげ定価が訴える
コート着て滝を見ている恋心
蜂の巣が高い所でハハ暢気
胸の底甘く蕩かすメル友よ
ええじゃないかああ言えばこう言う余暇も

松江市 佐野 木 み え

流星の滝を見上げる一人旅
滝しぶき浴びて悩みを消してゆく
マンモスの骨にそつと触れてみる
骨のある一言素直に受け止める
紫陽花寺一万本の中にいる

鳥取市 春 木 圭 一 郎

有料の水は飲まない主義主張
水入らず親子麻雀罪はない
旨い水飲むため今日も二日酔い
言いがかり水に流せぬこともある
ふる里の美味しい水が変わらない

鳥取市 上 田 宣 子

雨あがり庭が宝石箱になる
シューゲームしてる頭をダイエツト
変換キー叩いてくれる深みどり
小太鼓に卑弥呼パワーが押してくる
わたくしを洗い直している下絵

鳥取市 美田 旋風

妻の愚痴じつくり聞ける歳になる

僕に似た子の欠点へ目をつぶる

婆さんがつぎつぎ増える隣組

パンジーのおもしろい顔へこんにちは

ブライドは人間様の命です

鳥取市 杉本 孝男

アクセルやブレーキ踏んで共白髪

背かれた自信は音をたて崩れ

薬漬け嫌でお医者を手こずらせ

白髪染めする程髪のない気楽

情報の洪水僕は不感症

鳥取市 岩原 喬水

トラブルの時だけ仏拝まれる

若返り無理は承知の女に惚れ

恍惚の母で錯覚叱れない

どうしても酒とタバコが止められぬ

掃除して万円札がポロリ出た

鳥取市 倉益 一瑤

老母を抱く湯舟哀しい子守唄

薄情になれたらきつと楽だろう

一瞬の迷い いいえを言いそこね

台風の予感に非常口さがす

コンバクトわたしの毒を塗り潰す

鳥取市 武田 帆雀

どうもしやせんとかげの子よおいで

依怙鼻肩 菊ばつかりに水をやる

美容体操出掛ける嫁の白い靴

負けて勝つそんなゆつくりしとれない

皆様のお陰と言える口になる

鳥取市 岸本 孝子

大学へ行つてと親にたのまれる

高ければいいかと売れる化粧品

高飛車に出られ反発したくなる

飲み仲間誘い天下を取る話

トリックにかかったような低金利

鳥取市 山本 益子

それぞれの主張を盛った絆です

古稀を機に今頂点の岐路に立つ

うっかりと口出しすると落とし穴

半分は信じたい嘘受け入れる

時々三面鏡に愚痴こぼす

鳥取市 徳田 ひろこ

高い樹の上をひらひら天女たち

おおらかな河口に群れている小魚

母になる踏ん切りつけている河口

陽炎の向こうたしかに鶴がいる

合併にはじきだされたのが尻尾

実を結ぶ花嫁修業古くない

倉吉市 山中 康子

足り過ぎて昔のロマンそばだてる
嫁という好ライバルと張り合える
試練ですじわじわよせる老いの波
唐突に命を奪うやみの鬼

倉吉市 猪川 由美子

裏腹をわざと言つては腹さぐる
言い訳の秘書が秘書がは聴き飽きた
延命より安楽死権使いたい
ポイ捨てに鳴き砂鳴くに泣けません
物言わぬ地球は哭いて膿を出す

倉吉市 最上 和枝

頑固者白いカラスを見たと言う
無農薬ねじれきゅうりの味のよさ
挨拶を褒められ走るランドセル
二日酔 朝は茶粥で胃を馴らす
パソコンは受付けしない化石です

倉吉市 牧野 芳光

目指すもの掴み淋しくなってくる
転び傷より慢心の足嘆く
台湾も不況檳榔樹が伸びる(台湾旅行)
免税店売り子淋しい目をしてる
パイパイが無造作に植えられている

プライドの割には影のうすいひと

倉吉市 松本 よしえ

連休の遊び疲れが熱を出す
休みでも外を見ている父の靴
真夜中にコトン風では無いような
腹の皮プヨプヨうすい養殖魚

倉吉市 淡路 ゆり子

湯の華を入れて夜毎の温泉めぐり
気がかりな事は忘れて楽になる
狙い目は極楽行きの切符です
薬草に身を委ねてる夜明け待つ
体調不良激しくなつて梅雨に入る

倉吉市 米田 幸子

腹の中全部吐いたら楽になり
丸儲けどっこいそれは泡銭
お手つきをしてから運に見放され
私も薨も青い空が好き
私の目指す土俵は五七五

倉吉市 野口 節子

譜面通り踊る私は劣等生
系図なぞ無いが大きな床柱
このままで居させて欲しい腕の中
欠け茶わん並べゆっくりお茶をつぐ
太陽に我武者羅背く反抗期

米子市 林 瑞 枝

螺子巻いて大正遺産の音を聴く
山彦をヤッホーと呼べばいい返事
低血圧のペンは月夜によく走る
夏の海少女も陽灼け止めを塗り
ノルウェーの塩鯖買うてくる不思議

米子市 木 村 富美子

車中独演 相槌を打つ美少年
一瞬も休まぬ川に生かされる
無願の日一日神も休ませる
情熱が進め進めと老いさせぬ
樹になると信じ手塩にかけている

米子市 青 戸 田 鶴

これからを試す一步を踏み出した
昔も今も銀座の柳愛される
神風はとうとう吹かず敗戦記
遠雷やみんな向うにかくれんぼ
やせこけても印度の牛は神さまだ

米子市 田 中 亜 弥

飯よりも踊りの好きなおばあさん
晩酌の相手は妻ときめている
プラス思考いつも踊りの輪の中へ
晩酌の膳にドラマを積んでゆく
そりの合わぬ母に指先までも似る

米子市 白 根 ふ み

菖蒲湯にいのちを天下一品だ
しつとりと呪文をかけて雨期に入る
新キャベツ雨期でもやたらしやりしやりと
こだわりを流して余波がたたかい
清流をたどると森は手付かずだ

米子市 光 井 玲 子

這いつくばってびくともしない草の意地
曲りなりにも節目節目の峠越え
いい知らせ早速筆を走らせる
乗り越えた壁によりやく最敬礼
こぼれ種庭の隅から顔を出す

米子市 中 村 金 祥

流れ星この世の悪を消してくれ
あどけない七つの子等の星を追う
機密費にふたをするのは許せない
セクハラかいや赤い糸探してる
思い出をじっくり融かす火にあたる

米子市 神 庭 詩 郎

役人が机上で決めて下達する
嫁が来て姑と違った味になり
目的は言わず出掛けるカタツムリ
代議士が来て式典の順狂い
納得が行かぬに決まった多数決

米子市 本 吉 宗 光

日本の影 外相は言い切れず

ご大切 日米安保読み直す

改革に民はどれほど耐えられる

娘のくれた米十か月胃を満たす

孤老われせめてカラオケラブソング

米子市 野 坂 な み

ジャンプして鮎は明日を見通した

ブレイキのきかぬゆたかさ何処へゆく

似た色に染まり仲間にしてもらう

踊らぬとなおさら攻めてくる暦

差し向かいの晩酌味を深くする

米子市 中 井 ゆ き

沙羅双樹やつとつばみの形みせ

花園を雑草園にした腰痛

人間の百態つかれ草むしる

パッションのかけらでもいいほしくなる

お隣も花好き種がゆきさする

米子市 澤 田 千 春

ジャンケンに寄せてほしいなミケとポチ

母の服飾りボタンで生きかえる

森の樹の一つ一つに物語

首のない仏が並ぶ念仏寺

いい夢の種なら蒔こう遅くない

米子市 政 岡 日 枝 子

上品に揉めてて外に判らない

豊かさの芯がめまぐるしく変わる

夢語る少し大きくしてもいい

満身創痍たたかってきた地図だろう

初夏の彩足して自画像欲が出る

鳥取県 西 原 艶 子

夫病んで犬も小鳥もお留守番

やつれゆく姿を見せぬ髭を剃り

もう一度食べさせたいなゆで卵

合成の薬 体に染み透り

ぐっすりと眠りこけてる生きている

鳥取県 土 橋 睦 子

幸せがこぼれる今をよしとする

修羅抜ける涙いっぱいこぼしたら

ただ今と一番先にみる金魚

老いふたり安心させる小さな嘘

水底にひとつ沈めた鍵がある

鳥取県 権 代 康 女

妻木晩田 弥生の風につつまれる

王の墓下界見おろす峰にあり

沙汰をわび暑中御見舞申し上げ

なくさめる言葉出てこぬ突然死

薄味を夫は仲々受け入れず

鳥取県 乾 喜代志

一族を守った閻魔さんは父
米寿から自転車おりて杖になる
コップ一杯あゝ生きている飲んで
職離れしてから歌が好きになり
敬老会となりは七つ八つ若い

鳥取県 羽津川 公乃

日本海の魚は酒を選ばない
思うこと溢れてペンが蛇行する
柿 蜜柑 梅もナツメも庭の主
借り物の方言でよし郷に溶け
悪妻も超が付いたら本物だ

鳥取県 太田 幸枝

満ちたりて愛の心を忘れてる
そのまままで時よ止つてほしい夜
道楽の果てに羅漢になつて
一線を越えた恋でも浮気する
独居老 気の合う友と盛り上る

鳥取県 山本 正光

僕の四季 花回廊も大山も
退屈が無くてあしたを疑わず
呆ける暇なくて余生にネジを巻く
めぐる忌や妻に詫びたいことばかり
ご懐妊日の丸揚げるときを待つ

鳥取県 奥谷 彩子

夫婦で茶番つづけて古希の門くぐる
主義主張打たれる釘と覚悟して
病む友の悲しい嘘を持ち帰る
渾名で呼びあだ名で呼ばれ古希の友
いい汗を流して若さ取り戻す

鳥取県 橋本 多哥由

身内では駄目な男にされている
正直に怒りが顔に出て困る
追い風にのつて押すのはよしておく
追伸に要点だけは言い添える
浮き草の伸びる力を見習おう

鳥取県 黒田 くに子

時どきは過去ふり返る古日記
折り紙のうまい婆ちゃん要介護
こぼれ種の方が元気に芽を伸ばす
幸せのドラマも終の港まで
立候補うすい絆もたぐりよせ

鳥取県 国森 武子

太陽を拝む古老を忘れない
式典はとかく静かをよしとする
才と金どちらもなくて淡々と
私と病氣ほどよくつき合つて
七十歳老人医療使い初め

鳥取県 土橋 はるお

叩かれる前から痛いなど悟る
わたしの太陽は道草を食っている
父さんの顔は怖いけ話されぬ
釣れた魚を仏前に連れて来た
へそくりが見つかり痛いことをした

鳥取県 岩崎 みさ江

永代供養ふたりの娘嫁がせて
木の葉舟 時代の波に呑みこまれ
崖つぶちに追いつめられてから恐い
先送りした償いが待っていた
夜が明けたらきつと何かが変わるだろう

鳥取県 林 露 杖

朝日射す青田を渡る風は夏
剪定のさつきに暫し黒揚羽
さつき展濃茶一服振舞われ
二昼夜の体温催芽胡瓜蒔く
脚手腰痛みと妥協してくらす

鳥取県 西川 和子

少しずつ筆筒の奥で殖えている
愛情が過ぎて逃げ場の無いペット
イベントへ子供の声を期待する
お詫びして訂正します軽い口
苦情聞く時はしびれを我慢する

鳥取県 石尾 かつ乃

太陽を浴びて笑顔になる布団
哀しみを消そうか赤い花を買う
平凡な暮しも粗末には出来ぬ
来客へ取りつく孫の大人ぶり
反省と明日の計画仕舞風呂

鳥取県 田村 きみ子

聞き上手忘れ上手で雑魚の群
姑として泳ぐ日課もあり楽し
座りだこ何を目指したのか無口
言い過ぎた言葉を詫びているお風呂
幸せという字を書いて昼寝する

鳥取県 上田 俊路

三億円よこの指とまれ夢を買う
丸くなり過ぎて転げる老いの坂
転ぶたび人の温みに触れている
ワイドショー化の政治中身を信じたい
梅雨に濡れデパート消えた街に行く

鳥取県 ささえき やえ

つゆ空謳歌千本咲かす花しようぶ
トタン屋根きようはよさこい節の雨
安全に子供あずける場所がない
低い鼻がとても好きだといった人
変人にあらずいたみの分かる総理です

京都府 都倉求芽

晩酌は一本バブルでもデフレでも

もう泣いて梅雨のはしりのような女

新刊書たまには脳の衣替え

割引券の魔力にまんまと引っかかり

家庭菜園 妻の指図がよく実る

京都府 高島啓子

迎え討つ気分ですごく嫁の盆

仲たがいで見て見ずじまい大文字

最後には噂で終る立ち話

カメオ半額デフレって悪くない

公私とも女性で苦勞する首相

京都府 小西未佐子

コンサート枕の中にまだ余韻

長年の友情繋ぐ嘘一つ

ばあさまの網にかかって話聞く

若き日の胸マネキンに見る売場

おすそわけ一に近くの他人さま

京都府 稲葉冬葉

春の風邪引きずり友が来てくれる

一途なご縁で別れが早くなり

ライバルの視野にわたしの影がない

部屋探すわけではないが間取りよし

休耕の土 人間臭さ消えている

京都府 丹後屋 肇

消灯後ナースリレーのペンライト

野良犬にエサを与えるホームレス

セクハラを懐かしがっている老女

プラトニックラブ後味がいい余生

腰痛を納得させる梅雨しとど

亀岡市 井上 森生

携帯の手ほどき見事孫娘

和のころ辿れば古き佇まい

夫婦とて未だに見えぬ神の意図

やってみよう もつともーつと慈しみ

日本の夏は耐えるに良いチャンス

奈良市 米田 恭昌

一筋の道瘦軀に賭ける師の木杯 (薫風先生受章)

ハンセン訴訟やつと人間取り戻す

青雲の大志抱いてフリーター

学舎の血の惨劇よ日本にも (校内殺人事件)

男おしんのホツとしたよなデスマスク (親友逝去)

奈良市 天正 千梢

雨さえもやさしく感ず伊予の路

信濃路や出合い尊し道祖神

遍路みち接待受けるありがたさ

アルプスは銀に輝き風薫る

穂高駅に立てばおん前槍ヶ岳

大和高田市 岸 本 豊平次

松の芽が伸びて針金買う五月

マンガ雑誌束ねて捨てて子が巢立ち

玄関に片足残し長話

定退がたまのネクタイ肩凝らし

プラス志向一病息災坂登る

香芝市 大内 朝子

産んどいてほんとよかったカーネーション

走馬灯僻地保育に燃えた頃

日々好日貧乏神に励まされ

毒のある言葉を呑んだ後遺症

融通のきかぬ理性が逃がす恋

大和郡山市 坊 農 柳 弘

紫陽花の恋褪せさせて梅雨明け

介護する私も試す紙おむつ

山鉾巡行京の五条のかき氷

夫唱婦随妻に傾くやじろべえ

孫の画くばあちゃん何時もいい笑顔

橿原市 居 谷 真理子

五月晴れ雛人形は闇の中

全快の日まで溜息断ちをする

ふわふわと一合分の無重力

どちらまで ちよつとそこまで鬱捨てに

みずからは光らぬ月に癒される

奈良県 渡 辺 富子

Eメール恋に加速度ついてくる

耳よりな話へ揺れるイヤリング

虹追って少年一途ベダル踏む

喜怒哀楽ぶつける君の広い胸

診断書小さじの塩へ待ったかけ

神戸市 山 口 美穂

旅のこと犬に話せば横をむき

梅雨晴れの今日忙しい梅ラッキョ

雨が降る今日はお休み万歩計

グーチョキパーどれを出しても負ける運

日本丸はどこへどうゆく不況風

尼崎市 春 城 武庫坊

暑くなるときつと戦野の夢を見る

捕虜から解放五十五年がたちました

悪魔踊るニュースが走る梅雨曇り

二人で守る週一日の休肝日

酸欠の金魚大きな欠伸する

尼崎市 春 城 年代

与勇輝の古き良き風物詩

前触れなしに前歯抜けては困るのだ

苺の匂をいつだったかとふと迷う

極悪人にもつく弁護士があるんだな

住む人の変ったあとの泰山木

尼崎市 奥山美智子

コウノトリ東宮御所に飛んできた
おめでとう国中わかし雅子さま
病院の美食で肌が若返り
まだ迷う明日があるさと言うけれど
カロリーを計算したら食べにくい

尼崎市 松下比ろ志

生年月日書く度昭和遠くなり
清貧を照らす心の螢火よ
愛よ恋よと男心に星数多
ひまわりよいつまで空と向かい合う
マンシヨンは若い二人の小宇宙

尼崎市 長浜澄子

三角に四角 味あるクラス会
豆大福 人にも裏と表あり
断われぬ神さまからと言う試練
雨足にいいところだけ掻き消され
蓮池のメダカ追う目が澄んでいる

西宮市 奥田みつ子

木杯に路郎と語る美酒溢れ (祝 薫風先生)
残り少ない刻を分け合う白い部屋
おもむろに覚悟とやらを迫る日日
穏やかなベッドと今日も暮れてゆく
雨細し命の糸のなほ細し

西宮市 西口いわゑ

なきひとの句集開けばバツと笑顔
眼をつむるわたしひとりの海がある
今日のこと今日すっきりと納めたし
紫陽花の呪文にかかり動けない
爪研いでみても相手が強すぎる

西宮市 牧 潤 富喜子

リラの花ようやく塀を越せそうだ
この街に若さが戻る乳母車
あなたはえらい さし穂しつかり立ち上る
この国の深いところが病んでいる
句読点打ってひと息ついている

西宮市 緒方 美津子

呼鈴に緊張します老い二人
友病んで匂い袋をはなさない
屋上に土の詩ありプチトマト
実らずに胸なでおろす恋もある
まっすぐな人ばかりいて束ねられ

西宮市 菊池 トミエ

豆ごはんふくら炊いて姉と居る
玉ねぎの芽がむくむくと反抗期
ルイヴィトン質屋で買った格安品
朝シャンのすっきり香る御出勤
衣更え気ままに生きる余生なり

西宮市 秋元 てる

モテてると錯覚 組し易いだけ
忠言のつもり逆鱗に触れていた
つい手折る花盗人に目を外らす
老母をホームへ赴任地に発つ人の背
二十年の仲だ二槽式洗濯機

西宮市 亀岡 哲子

大福帳に家賃貳圓と祖父の筆
樟薫るボチを埋めた白い闇
育ち過ぎてもう座敷では飼えぬ犬
久々に揺り鉢を出す木の芽和え
鉢ごとの花盗人は許されぬ

宝塚市 嵯峨野 保子

あちこちでロザンナと逢うイタリア行 イタリア旅
皐月雛罌粟 晶子の花が咲いている
タンポポの旅とベニスで夕暮れる
天の川落ちた子つばめ死にました
本降りへ男の傘をさして出る

伊丹市 小熊 江美

びつたりと盲導犬が居る強み
天国へ行く支度なら出来ている
枝下ろしされて会社を首にされ
頼られて嫌とも言えず見栄を張る
句会旅天の橋立雨もよう

伊丹市 山崎 君子

旅ロマン カバンにそつと持ち帰る
立ち読みに夢を充たすか小さい顔
途中から事務的になり電話される
初生ビワ蟻も初見えとなりから
原爆忌平和の重さ鐘にのる

芦屋市 黒田 能子

風少し吹くとシナリオ変り出す
一病も癒えて五月の風の中
関西弁の他は何語もしゃべれない
独り言淋しい人になり始め
七光せつかくだから利用する

姫路市 古川 奮水

決断をした剪定に初夏萌える
袖引かれ浮いた室津の路地がない
阿修羅の目徹夜もパイがよく跳ねる
くしゃみなどせずかと連れが寄ってくる
止り木に足が馴染めん歳になる

相生市 中塚 礎石

思うこと一瞬経を口ごもり
信心も格好だけは堂に入り
道草をさせよと矢印立ててある
味噌汁の味が違ふと嫁の愚痴
湿っぽい空気老舗の土間に垂れ

川西市 西内朋月

氏神へ三年ぶりの暇潰し

飲みながら句集を開くそとは雨

金額をそのたび悩む御香典

被害者の人権だれが見てくれる

はちばちと昭和ひと桁消えていき

川西市 松本 ただし

都塵から離れて窓を開けておく

便利さも程々が良いスイツチオン

免罪符一升瓶を下げてゆく

サイタ散った春から夏へ移る庭

ワープロの変換字引で確かめる

川西市 米原雪子

問いたくて笑顔ジェスチャー惜しまない

万物の霊長だわねよく笑う

世渡りは下手だが夫婦睦まじい

人間の弱さ知ってる仕掛人

古希過ぎて数多感じる有り難さ

兵庫県 大谷 幸次郎

反論は一息入れた後にする

終章はやすみ休みをモットーに

廃校に子等の歌声空耳か

リハビリで辿った廊下懐かしい

難しい顔緩ませる嫁ばなし

和歌山市 牛尾 緑良

天井は白 病院の昼休み

闇ある日無限の孤独連れてくる

鈍行で銀河の旅を予約する

年金で暮らし引き算上手くなる

青春よ錆びたナイフを掘り起こす

和歌山市 川上 大輪

知らん顔して一日が過ぎてゆく

笑い疲れて一人で食べるカップ麺

種明かししてから誰も寄りつかぬ

グーチョコキバーだから私情は挟めない

貝になることを覚えてよく眠れ

和歌山市 木本 朱夏

風の島の羅漢ちいさく蹲る(清州島の旅)

人生の午後 公園の哲学者

猫の子も暑い夏だと覚悟する

帳尻は合わず耳鳴りまだ続く

ノラの持つ携帯電話から微熱

和歌山市 福井 桂香

百均に追われて消えた荒物屋

ランチにもランチにも合う小ジョッキ

お手本になれぬぐうたらママである

体内を蛇行している我が血潮

オルゴールは愛の賛歌と決めている

和歌山市 桜井千秀

お歳より若く見えると女店員

三ヶ国語ペラペラ孫は国際派

ターゲット絞って攻めてくる味方

目の敵にされてまだまだ粘り甲斐

歯に衣着せると言えてくるお世辞

和歌山市 福本英子

肩の力抜けと言われて抜けたまま

年下が叱ってくれるから凭れ

時に修正しながら歩く人の道

暑さ寒さ雨にも止まる万歩計

梅雨晴れ間他所の猫にも機嫌とる

和歌山市 古久保和子

雨漏りの染みがじわじわ攻めてくる

すし食いねえ回転ずしで切る啖呵

チリ紙交換のテープの声も擦り切れる

見晴らしは良いが風当たりも強い

おふくろの味をグラムで聞かれても

和歌山市 楠見章子

青が好きマチスに任す肖像画

焼き立てのクロワッサンに雨の音

おそろしや芳香剤が効いている

ケータイに括られている二十五時

同世代と違う話の面白さ

和歌山市 玉置当代

重ね塗る嘘がボロリと剥けてゆく

明日の風吹くと笑うて無一文

無菌室へ逃げて行きたいほどショック

生かされて生きて悔いなく米を研ぐ

記憶喪失なんてわたしの悪い癖

和歌山市 榎原公子

ソーメンの腰も達者に夏が来る

夏野菜植えて農婦の顔をする

訃報くる有無を言わせぬ鳴り方で

雨期乾期男はさびしがりやです

母はもういません叱ってくれませんか

和歌山市 青枝鉄治

どん底を妻の笑顔に支えられ

ピンチにも笑って耐える余裕もつ

選挙区へ見せる笑顔は別に持つ

通夜の席笑い上戸のいる不安

七癖を笑う男にある八癖

和歌山市 山口三千子

あなた任せで来た人生の落し穴

視力落ちうつかりおとす花の首

赤信号ついても止めぬ酒の量

人生の棚卸する時期になる

遣る瀬ない時は花木の手入れする

和歌山市 松原寿子

立ちはだかつてくる感情の壁がある

儂い望み抱いて女は翔んでいる

微笑という彩 自画像に塗ってみる

泣き言は底に沈めて抱く望み

わたくし流のメールへ一句添えておく

和歌山市 吉村さち子

係わった人みな優し古日記

自分には見えぬ背中に歳がある

履き馴れた靴にととうとう穴があく

豚まんを怖怖食べている深夜

手塩にかけた二十歳の孫の恋をさく

海南市 谷口義男

訃報欄自分の歳と比較する

子の為に流した汗を流さぬ子

あちら立てればこちらが立たぬまとめ役

五十年続いた日記箔が出る

スピーチに一句を添える披露宴

和歌山県 中後清史

疎まれていると知らずに参加する

恋文でお茶が沸いたと祖父の法螺

古疵へ時効がほしい長い枷

病院の窓口ようこそとは言わず

くすり飲むようにちびりの独り酒

箕面市 岩津ようじ

袈裟脱いで住職も食う生き作り

腐ってやることも出来ない冷凍魚

終戦を喜んだ僕泣いた友

職安で仲良くなつて縄のれん

水際でメダカの私語を聞いてます

箕面市 出口セツ子

罪隠すようにドレスで身を包む

メル友は逢わず仮想の恋をする

心にも情にも湿り気が不足

同情に自己優越が混ざり込む

子の心 眼鏡を拭いて受け止める

池田市 岡本吉太郎

お互いに胸を開けばすぐ和解

子供の頃大人びた友先に逝く

余りにも熱中しすぎ怖い人

少な目の香典包みしまったと

小泉さん大胆な政策諸手あげ

池田市 栗田久子

戦時下の苦もほろにがく懐かしく

陽光の中でゴッホの花に逢う

空は画布ダイナミックな火の饗宴

罪悪も空へと返す五山の火

夕闇に盆灯籠の灯が揺らぐ

豊中市 井上直次

事もなく大きくなったように言い

四十九日灯明ともすもうまくなり

人生の耳学問に湧く興味

世渡りの嘘も傘寿に大目なり

汗くさい匂いしみこむ万歩計

豊中市 松岡久留美

何気ない上手な嘘で人助け

思ひ出が孤独を救う老いの日々

様々な落し穴待つ夜の街

物言わぬ犬に語ってうさ晴らす

我を折って八方無事に納めよう

豊中市 田中正坊

落城の哀史知つてる追手門(会津)

鶴ヶ城滅びるものは美しき

林間に老鷲を聞くスニーカー(尾瀬)

きそうよう湿原に咲く水芭蕉

尾瀬守る長蔵小屋は凜と立つ

豊中市 湯浅馬洗

一人暮し半煮え料理目をつぶり

イチロー 新庄 身近になった大リーグ

朝の庭背すじ伸ばせとクレマチス

差別と隔離ハンセン病の苦悩託び

自動殺傷ここにもあった危機管理

豊中市 江見見清

祝いよりお悔やみふえる仲間たち

不揃いの野菜頑張る朝の市

戻される筈の辞表が受理される

坂道は今日の元気の測定器

無罪とは信じたくない無罪あり

豊中市 岸田知香子

良識があっても所詮男女仲

貧乏性指貫老いの手を飾る

ピリオドを打って入籍晴れやかに

おだてられOB OG幹事役

自家菜園豆攻めに合う出来の良さ

豊中市 安藤寿美子

母校一〇〇年そのうち五年を知っている

クラス会みんな賢く老いている

しょうむない人生を来て喜寿という

くちなしの香りに悲しみ増幅する

椎茸もタコも国産ではないぞ

豊中市 吉田あずき

個性派が揃い見ごたえあるドラマ

結論の出ぬまま重い靴をはく

ライバルと差がつく手抜きしたところ

敗因をさぐるお酒を一人酌む

からみつく命の汚れ落す旅

吹田市 石原靖巳

カルテ書く医者 of 仕種に胸さわぎ
雑草も名を知つてからいとおしい
長雨へ日毎につのる自己嫌悪
気の利かぬ話へわさび擦りおろす
世界でも響いて欲しい真紀子節

吹田市 穴吹尚士

毎日が休日だけ金がない
追いかけてまた逃げられた福の神
見えすいたお世辞は軽く受け流し
逃げ口上ばかり渦巻く町内会
栄転のライバル握手しておこう

吹田市 大谷篤子

風薫る真ん中にいのち置く
生きている雨を見ている窓の位置
胸の底深いところの水の音
孫五人育つて老いを納得す
だあれにも見せず素顔の日曜日

吹田市 早川棲世

国病んで衆愚を叱る首相ほし
凜として父権ありし日兵強し
ベッドまで新婦運べずいたわられ
経あげるうしろで後妻子を叱る
死を望む国の栄光失せぬ間に

茨木市 堀良江

輝いて風薫らせて柿若葉
薫風に朝のおつとめ若き僧
似顔絵に探し出された真犯人
やあと手を上げて座ればビール来る
ごめんねと一声かけて百合を切る

茨木市 島元ふみ

無理きかぬ歳を自分に言い聞かせ
薬漬け不安ながらも飲む命
のんびりと終着までの老いの詩
少々外でもても老妻の待つわが家
あんな日もあったと子連れ夫婦見て

茨木市 藤井正雄

激励と苦言恩師の酌貰う
独り酒つき合いの良い柿の種
風光る信号待ちのハイヒール
新社員歩に向く顔と向かぬ顔
USJ妻と腕組む風薫る

高槻市 傍島克治

劣勢を酒の力で跳ね返す
見納めと口癖のよう老いの旅
漫才師古傷ネタに笑いとる
捏造と知らず古代史塗り替える
晴れマーク見事に変えた雨男

高槻市 江原秀夫

雨雨雨 無聊をいやす墨を磨る
なれなれしい顔でやつてくるデビル
背中には仏背負っている頑固
はしやぎすぎ背中の鬼がくしやみする
花時は妻がやたらに世話をやく

高槻市 井上照子

長命の講話拝聴守らねば
踏み出した一歩退けない意地がある
化粧して年齢には勝てぬ宥めてる
ショーウインドー吾れ老いにけり背のあたり
蟪蛄の食われる覚悟愛強し

寝屋川市 坂上高栄

豊満な胸の膨らみ誰のもの
豊かさに慣れて足る事わきまえず
青梅が転がつている雨しとど
日章旗仰ぐ気分は誇らしい
胸の火をお尻で燃やす恋螢

寝屋川市 太田とし子

清水の舞台とび降り茶碗買う
錦市場歩いてあるいてお漬物
賽銭箱やつとふくらむ花の寺
弘法のガラクタ市で時代買う
梅雨空に優雅にかけた渡月橋

寝屋川市 江口度

百合の花かくしマイクに気をつける
靖国詣で外野の国が騒がしい
流れゆく水の青さに詩が生まれ
風向きに合わず隣へ言葉選る
毒舌もやわらぎ影も薄くなる

寝屋川市 森茜

虫眼鏡見つめしばらく虫になる
ハムスター狙われそうに寝入つてる
廃屋を由緒ありげに飾る蕨
途中から割つた話が咲いている
そしられてどしや降りにあう帰り道

寝屋川市 北岡波留吉

催促はないけど戦友の墓まいり
戦犯の汚名に泣いた暗い青春
銃を手に二度と行くまい大陸へ
戦友の骨泣いて拾った暗い青春
ジャングルで祖国を偲ぶ丸い月

寝屋川市 平松かすみ

遺伝子に感謝クイズが解けました
公園のベンチに居ない王子様
お互いにうっかり夫婦笑い合い
スーパで今日もポパイのほうれん草
他人様の愚痴を聞くのもボランティア

寝屋川市 酒井 勇太朗

寝屋川市 柴田 英壬子

さわやかなお色気初夏の中学生
叱ること忘れて国が荒れ狂う

ふれあいと錯覚セクハラ責められる
視聴率政治がトップになる不安

惨劇の小学校に孫二人

寝屋川市 堀江 光子

手狭だが豊かに花の香る部屋

風薫る花は緑の葉に移り

父の樹の傍に私の梅植える

長生きに知らない事が多過ぎる

不況風おみくじ倍も結ばれる

寝屋川市 籠島 恵子

ちよつとそこまでと隣に言つて出る

想いおもいの昼下がりです時計草

まっすぐに進むほかなし立葵

たし算ばかりしているのは外れても

体調のせいですわたしの怠け癖

寝屋川市 富山 ルイ子

言わないで欲しい内緒は言わないで

やすやすと友と不仲になり三とせ

興味あまり持てぬパソコン習い出す

取っ換え引っ換え孫のファッションショー

気を抜かず懸命に役こなす日々

「要支援認定」生きてゆくわたし
読むのも書くのも長時間はにがて

最低のくらしに与えられる票

宍道湖のほとりに住むはまぼろしか

枚方市 森本 節子

葉刈りした檜うつ蒼と五月の庭

野草茶を飲んで効き目をたしかめる

クレイン車の見える港で披露宴（ボーアイホテルで孫の式）

双方の四人の祖母が列席でき

八十二歳パスポート五年更新し

枚方市 宮川 珠笑

別姓を貰き専用墓を買う

よく遊ぶ陰口返ってくる土産

和洋中揃う我が家の台所

棟つなぐ屋根の下では揉めている

事件起こして母と再会

枚方市 安達 忠央

父の日を実のところは気にしてる

六十五 実りのときが始まった

少子化ヘクラス一粒種ばかり

けんかする種つきずして共白髪

遺伝子の操作で実るイモナタネ

枚方市 海老池 洋

薫風へエネルギッシュになるいのち

薫風へ腹式呼吸するお城

薫風に新芽の伸びる音のする

分刻みバイクで急ぐ盆の僧

生き甲斐に追われ余白のない手帳

守口市 結城君子

わたくしはアリス薔薇園で迷う

かきわけて走ってきた過去懐かしむ

皮肉にも夫の顔からシミが消え

自画自賛そうめんつゆが美味しすぎ

変色の海苔蘇えるお吸物

交野市 森本弘風

飛行機が真夏へ招く六時間（ベナン島へ旅して）

お国振りお寺にもあるベナン島

朝飯は屋台村での支那の麵

値切ったらどんだん下がるスーベニヤ

免税店使い残しの金と呼ぶ

交野市 山川日出子

霧吹きを菖蒲にかけるカメラマン

梅雨入れて日本は五季と外人さん

故郷に母と蓬を摘んだ山

目の玉で愛憎作る人形師

玉緒さん芸のうちだよコマーシャル

八尾市 村上ミツ子

アドバースてんでに好きなことを言う

おなか空いたら今まで通りつまみ食い

しがらみを捨てねば強く生きられぬ

きつく縛った絆なかなか解けない

いなくなってもとうさんだけが頼り

八尾市 宮西弥生

一日を生きた証に今日暮れる

伎芸天奥の奥まで魅せる謎

坂道の真ん中へんで夢と鬱

デパートを一日歩いた夏の冷え

靴のヒモしめると先がよう見える

八尾市 宮崎シマ子

傘をたたみしばらく思い出し笑い

アメアメフレフレ母の蛇の目がなつかしい

明日もまだ雨らし山の宿の冷え

大胆に弾んで母は叱られる

今更に夫に料理仕込めない

八尾市 吉村一風

献血をすましゆっくり新茶のむ

お点前の孫大人びた指をつく

借りた傘まだ居候したまふま

朝のスタート金魚ばくばく送ってる

職のない同士の酒も夢を持ち

八尾市 井 尻 民

恙なく過ぎた六十路の河内弁

五月晴れ雲悠々と充電日

女ひとりネオンの海をくぐり抜け

シュレッダー秘密どうしの顔合せ

風薫る終の住処と決めて八尾

八尾市 長谷川 春 蘭

戦いの角など持たぬかたつむり

老いはれるまでに会いたい人が居る

人妻と判ってからも旅の連れ

ストローが二本ならんでいる絆

すぐそばに読む本あるはしあわせだ

八尾市 高 杉 千 歩

住み馴れた地縁に結る余生なり

自作自演独りのドラマ多事多難

あと十年生きる積りの胸算用

真夏日もネクタイ遺影の鬼遊さん

ばちばちと歩こやないか夏帽子

八尾市 高 橋 夕 花

しぶ皮も絵の具を塗れば春に会う

サン Glas ぐらいで私をごまかせぬ

友だちと笑い転げた菜畑だ

りんりんと呼んでいるのは梅のつぼ

三度プラスおやつしつかり食べている

東大阪市 谷 口 義

旅先で聞くと悲しい盆の唄

病人がいてひっそりと盆支度

ケイタイで星がきれいとかけてくる

男物の時計をはめて風薫る

沸点の違う夫婦で三十年

東大阪市 安 永 春

お留守番電話の声が聞こえます

見応えの家族十人勢ぞろい

ケン玉にからだのリズム乗り移る

郷愁を人形に見る遠い日を

分身を創作生命を育てあげ

羽曳野市 安芸田 泰 子

幸せを探す視線が高すぎる

間違いと気付いたけれど我を通す

持て余す暇があるのに手抜きする

また一つ歳を重ねて梅漬ける

遺言を書く気にさせた救急車

羽曳野市 川 口 信 子

肌のシミ夏の気配が忍びより

影つれて帰るひとりの靴の音

一枚の枯葉つき合う露天風呂

心まで古いぬと揺らすイヤリング

夕焼けの森を知らないビルの鳩

羽曳野市 酒井 一 壺

風薫る若葉の中でにぎりめし

食欲に緑の風へ深呼吸

薫る風体の空気入れ換える

冷凍魚みんな涼しい目で並び

生け作り泳ぐ姿は思わない

羽曳野市 三好 専平

につこりと写真撮られるむずかしさ

簡単に食を減らせと医者と言ひ

シアトルが急に身近になつてきた

冷凍とインスタントの人がふえ

黒門の昼は将棋の野次が埋め

羽曳野市 西村 りつえ

自信みちめりはりついて芽える喉

充電にほどよき梅雨今日は晴

登りつめプラスアルファのいい笑顔

野仏も水を恋うてる炎天下

花火師の恋は夜空に咲かす花

羽曳野市 吉川 寿美

人真似が上手で森へ帰れない

歳月へどうやら揃うた夫婦の歩

堪忍袋握って汗をかく拳

真実が見える眼鏡とかけ替える

玩具箱の中に隠れていた童話

藤井寺市 高田 美代子

いい酒と言われておとなしくしてる

人吐いて吞んで電車もようきばり

口肥えて掛け声ばかりダイエツト

寝て食べて遊びもつたいい余生

貧と富へ神がくださる二十四時

藤井寺市 中島 志洋

夏ばてを知らぬ我が家の食べ盛り

孫五人嬉し忙し夏休み

西瓜割り剣道二段喰われる

金魚すくい子より父親意地になり

大ジョッキあおる娘の白い喉

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

ひかえ目な助言に胸が熱くなる

信頼が不信に変わる待ちぼうけ

香水をふつても変り映えない

珍しくさつと注文したビール

安らげば時計回りで生きられる

河内長野市 井上 喜醉

人間がカエル泳ぎで新記録

釘一本刺され動きが鈍くなる

手探りの介護保険も苦労性

代走にされてたまるか腹の虫

うっかりと口が滑った酒の酔い

大阪狹山市 矢野 梓

仏壇に全部たのんで病院へ
或る日ふと重い真実打ち明ける
誕生日また駆け足でやって来た
年寄りと未だ思えない誕生日
目分量だんだん味が母さん似

和泉市 中川 楓

薔薇園にうつとり溺れ小半日
薔薇園に似合う女の夏帽子
ばら少し首を傾げて艶めかし
薔薇百態つつしみもなく乱れ咲く
定めとは儚きことよ薔薇崩る

和泉市 岡井 やすお

もう総理代えても景気良くならぬ
ITの家内講習 子が講師
政治家は我が不作為を逃げたがり
球児汗観ている親はもつと汗
人間ドック一ときの夏休み

富田林市 藤田 泰子

雨雲が追って来るので逃げている
天体を覗くこの世に飽いたとき
ゆかた着る線香花火が弾け出す
胸ゆたか私が抱くとすぐ眠る
酔眼に電柱までも踊り出す

富田林市 大橋 鐘造

旅人となって一人の空泳ぐ
柔らかな日差しに弾む立ち話
縄のれん素顔の客でよく弾む
神様に選ばれ絵馬はホッとする
招待のお皿に盛った下心

富田林市 中井 アキ

ロマンスを語ると皺が消えてゆく
サルビアの赤がまぶしい負の歩幅
あじさいの心変りが笑えない
恥さらすそんな度胸も身につける
青い瞳に中途半端を嗤われる

泉佐野市 山本 蛙城

虚言癖からから続く風車
絵手紙のぶつきらほうにある余韻
つまされるバツタは夫おんぶして
退屈な話題に猫も膝降りる
借景に閑空というでかい鳥

岸和田市 岩佐 ダン吉

卯の花の看板の路地消えている
核がある限りほんやりできません
陰悪な気配察して猫が出る
五百円拾ったベースアップ分
流される砂風紋にある主張

岸和田市 藪野 けい子

介護する母さんに言うまた日曜

あまりにも本音即座に白けたり

お若いと言われ背筋をピンとさす

姑の仕打ちわすれて看護する

美人だと背筋もほめるレントゲン

岸和田市 宮野 みつ江

サッカーが判らないのに熱くなり

皆ナイター私ゆつくりバスタイム

ときめきが恋へと変る髪艶

自転車に期待をかける体脂肪

捨て猫を抱き上げ連れて来た母性

堺市 山本 半 銭

師の受ける木杯祝すあかい酒

月下美人 今咲きかかる白い香よ

ときめきと不安 ないませ旅支度

踊り浴衣歳を忘れた汗となり

さながらに仁王となれり貴乃花

堺市 黒田 真 砂

梅雨もまた楽し静かにティールーム

発作時に往診の医師神に見え

ご近所の温み沁々牡丹咲く

波の音遙かな過去を連れてくる

母の日に娘がくれたカーディガン

堺市 柿花 紀美女

四捨五入して中流のつもりなり

そつと乗っても情容赦ない秤

目線下げて打開策を考える

火の玉となつて不況に立ち向かう

騒がしい宇宙の隅に生きている

堺市 宮本 かりん

融通の利かぬ背中にある自信

よく切れる言葉でハート真つ二つ

冗談と笑った胸に何かある

拭き掃除今日はからだの鍛錬日

ひと言の多さ気まずい間が出来る

堺市 齋藤 さくら

近道の知らぬ夫を送り出し

目はいつも大事な家族見つめてる

親送り足かせ取れて気が抜けた

当て付けの為に命が奪われた

娘がくれただけで嬉しい赤いシャツ

堺市 神原 文

一日を消しゴム掃除だけで終え

女ひとり枝打つ姿梅雨晴間

情熱はあるのに先ずは物忘れ

約束を忘れないようにと必死

父いなくなつて父の日意識する

堺市 村上玄也

職業欄一息入れて書く無職
キザっぽく振る舞ってるがシヤイである
爆笑を買ってる習いたてて手品
寄っていた大樹の根っこ朽ちていた
ワンマンの陰で苦勞の女房役

堺市 志田千代

精霊舟センカンヤマトへ流れつく
新世紀なすびの馬で迎え盆
茄子の馬か細きものは母のもの
苺食ういちごは確か白い花
あれもこれも涼しくなつてからやろう

大阪市 西出楓楽

美人姉妹と言つてもらつたことがない
大中小とり混せて飼う腹の虫
口のチャック修理しながら六十路ゆく
万歩計徘徊老になるかもよ
ストレスをつつかい棒にしておこう

大阪市 前 ともつ

木杯叙熱句碑建立に花添える
種もいっしょうまい西瓜を食べている
さて教科書どう教えるか試される
銀杏並木ビルの直線と和らげる
天守閣一回りする朝の贅

大阪市 中澤伽羅

相談はするけど決めるのは私
父さんが笑いとばしてけりをつけ
同情はいいからそつとしておいて
あほやなあと横に座つていてくれる
着いてから別行動の夫婦旅

大阪市 榎本日の出

想像をしている内は華だった
長生きの薬と決めた万歩計
信じない占いだけでよく当り
お金持使わないよう気を遣い
迷彩服町に出てきて目立ち過ぎ

大阪市 榎本舞夢

雨の日は洗濯やめて昼寝する
傘買った私のために雨が降る
友人のミスをこつそり嬉しがり
同情がぬきさしならぬ事となる
決めかねて人の意見になお迷い

大阪市 本間満津子

青信号走らず次を待つ自衛
人の道外れると続く下り坂
相談は自分にしてる独り言
なにも考えないのが利口かも知れぬ
星空に揃いの浴衣桐の下駄

大阪市 神夏磯 典子

予定表自分の歳を忘れてる

外観はそっくり味が違います

小泉さんのテレビへ妻が動かない

高説を聞いてもお腹空いてくる

外来眼科でらいなく夫と手をつなぐ

大阪市 小糸 昭子

壊れもののように赤子を抱かされる

インターネット個人情報駆け巡る

リーダーの条件威しははやらない

水鉄砲小さなロマンズ芽生えて来

一年生未知の世界に憧れる

大阪市 川久保 睦子

女ひとり花の図鑑の中にいる

山盛りの愛といっしょに子を叱る

北向きの部屋のガラスで耐えています

方便の言葉すらすら出てこない

女王蜂だけの戦 別にある

大阪市 板東 倫子

人間に飽きて庭いっぱい花咲かす

すぐキレル医者も教師も役人も

夢残してこの蛇ツチノコと言うことに

マリヤさま悪魔が天使を刺しました

ビビンバとユツケで孫のバースデー

大阪市 安達 はじめ

亡き戦友とアルバムで会う終戦日

骨っぽい意見が光る投書欄

若鮎の姿涼しい夏料理

素足から女が匂う夕涼み

どの恋も嘘でなかった青春記

大阪市 鈴木 トヨ子

したたかな世相に逃げ場探してる

買い溜めに賞味期限が追いかける

流暢なガイド美人で盛り上がり

さんざんに泣かされた過去バネにする

未来託す息子よ横にそれぬよう

大阪市 中田 あい子

忙中閑このほんやりは至福です

宇宙旅行個人で行った二十五億

名工のガラス細工を見に長野

介護法わからぬままにはや一年

なるようにしかなりまへんは亡母のくせ

大阪市 川端 一步

ラブレター一日一本書くと決め

あの日から北条民雄の本探し

歳時記を囲む充電の笑顔なり

明日のため今日寄り道をしておこう

らしからぬ外交官のいい仕事

大阪市 玉置英子

大阪市 杉澤汀

待合所苦手な人になつたりと
南天の赤い実になる白い花
新しい飼主が抱く捨て仔犬
腹八分母の歳まであと五年
わたくしの葬のことなど長男と

大阪市 津村志華子

街道の歴史知つてゐる道祖神
ひとり身に生き甲斐くれる花の種
近況をしらせる母のカナだより
いい夢の続きを見たく二度寝する
棒読みの経にほとけの苦笑い

大阪市 小林周信

領いておくが実のない長話
正直でお世辞の種がすぐ切れる
極楽へ行く手土産は決めてある
親しげに背中叩いて人違い
風薫る乙女の胸は上を向く

大阪市 奥村五月

税務署も一役買つて遺産分け
軽率なその一言が敵つくる
朝市へ故郷のなまりを聞きに行く
点滴で命を落とす医療ミス
ラーメンの屋台を探す千鳥足

泰山木は北米産とは知らなんだ
右巻きにして朝顔に叱られる
鴉なく今日も何かがおこりそう
評論家はや勝馬にのるかまえ
耐え難きことばに哭いた暑い日よ

大阪市 清水利武

学校へ行くと出た児が死の地獄
八人の子が泣いている天国で
亡霊も仲間に入る阿波踊り
先生に貰つたコケシ苦を救う
ボロ儲けしても税務署もつてゆく

大阪市 鶴田遠野

みやげ便毎日届く妻の旅
初と言う夫に言わぬ恋の数
お茶でも声で始めるラブゲーム
妻の留守暴飲暴食思ふまま
三回忌すんで再婚告げる姉

大阪市 辻川慶子

嬉しくて二杯目所望ロゼワイン
少年が走れば風も走り出す
にこにこ握手本心覗かせず
うっかりの言葉待つて敵味方
なくさめてなくさめられて長電話

大阪市 渡部 さと美

サンダルのひも切れないか切れないか
弁当屋いろいろ一軒ようはやり
帰ろうねそれが大変河童の子
親も子も嫁さん達もみなビール
花よ鉢よ元気でいてよ旅の留守

大阪市 松尾 柳右子

休日は翔び出している自営業
テレビでの試食にまずいとも言えず
自然体で生きるに雑音多過ぎる
憧れのハワイで泳ぎ夢みのり
かあさんに虎刈りされた三歳児

大阪市 津守 柳伸

車内でのメーク携帯鳴っている
梅雨晴れ間コロコロ傘の自己主張
キウイ豊作ひっきりなしに友が来る
訃報から破れかぶれのシヨッピン
欲張りの旅で墓参も兼ね備え

大阪市 津守 なぎさ

カラフルな傘せかせかと戎橋
娘の相手フリーターとは気が重い
心機一転折紙習うボランティア
ガーデニング朝の挨拶欠かさない
オゾン吸い心の青春取り戻す

大阪市 川原 章久

脳出血ブラックアウトで丸二日
死神が向こう三軒ICU
靴履くと今だに足が向く会社
厚化粧心の汚れ隠すのに
汚しては神にザンゲの世界地図

大阪府 米澤 俣子

アバウトに過しヒントが生まれない
忘却は神からもう思いやり
一生のお願い妻はまた指輪
肩の骨軋む音する五十肩
ご愛顧に感謝とまたも閉じる店

大阪府 澤田 和重

アリバイが完璧だから信じない
切り札の辞表は軽く受け取られ
丁寧な言葉でクギを刺しにくる
口下手の言い訳だから信じよう
買い被りされて重たい荷を背負う

大阪府 初山 隆盛

つゆしとど雌雄寄り添う二上山
アピールしたくて草が匂い立つ
人工の孵化から染めるトキの色
青春よも一度ビデオ巻き戻す
一瞬をみごと捉えたカメラアイ

尼崎市の場 十四郎

潮どきと悟りきっぱり散る椿
つまずきの小石に気付く曲り角
ゲートボール帽子に重い参加章
五月晴れ老いて帽子がよく似合う

西宮市 刈田泰司

風薫る川面にうつる鯉のぼり
神様の匂い袋か風薫る
満員に袖すり合つて睨まれる
春風がほんわかとして誘いだす

西宮市 井上松煙

得意げにしゃべりまくっている孤独
法要に仏忘れて盛りあがる
雨降れば照る日も来ると信じてる
湯加減を問うこともなくテレビ見る

伊丹市 榎谷郁子

もつれ合う影親子だろひとつたな
樟若葉匂う山路に生かされる
哀れとの言葉もなくて幼児よ(池附小事件 2句)
抱きしめて頬ずりこれが別れかや

神戸市 池田善守

お天氣の挨拶ほどのお付き合ひ
倅せと思う心が道開く
人間はみないつかゆく一人旅
タクトから音の出ているコンサート

三田市 久保田千代

美しく描く老後の青写真
花束に娘の優しさ添えてある
温かい余韻残して友帰る
もういいよ寅さんそろそろ出ておいで

池田市 藤井計光

官僚も右往左往の伏魔殿
それ以上愚痴ると嫁はけつまくる
包囲網迷答弁でくぐり抜け
ハイハイと無愛想なる妻の乱

吹田市 瀬戸まさよ

一望千里終の住処か十五階
引越しのコツ運ぶより捨てること
雨靴は忘れられてる街の梅雨
ベストセラー買わない意地もあつてよい

吹田市 野下之男

仁王さんこの世見る目がなお怖い
あの声で一途な愛を牛蛙
白百合が似ても似つかぬ高軒
喉元の小骨が取れん外務省

枚方市 鈴木政子

上醍醐ホーホケキョに迎えられ(西国三十三ヶ所巡り)
湖上からは饅頭型の竹生島(宝厳寺)
舞鶴湾ジェットボートが袖を引く
自販機はサンプルだけの成相寺

大東市 児玉 蛙

死んでもいい毒でも美味い煙草吸う
独り居の部屋の広さに落ちつかず
歳なのかすんなり言える六十歳
も一人の私を守る影法師

枚方市 二宮 山久

飲むほどに淋しがりやがはしゃぎだす
ほら夏が来てます梅雨の晴れ間から
また飲んで妻の愚痴きくコップ酒
お隣を買い取る息子ローン組む

守口市 井上 桂作

誰よりも平凡に生き長生きし
年老いて背中も人も丸くなり
叱られた孫は上手にベソをかき
真紀子さん負けるな一茶ここにあり

四条畷市 吉岡 修

一万歩大仕事だと思ひ知る
切り札のアイデアじつとぬくめてる
甘えても鏡の答かわらない
一畳もあれば天地を舞う流派

寝屋川市 高田 博泉

一匹になった金魚が強く生き
リストラへ妻が鉢巻き締めなおす
出会い系サイトに主婦が酔うている
母親のハッパ時々胸を突く

東大阪市 指宿 千枝子

小雀の巣立ち促す初夏の風
薫風に新茶たのしむ午後三時
小さな種芽を出す力ためている
散歩道黄のバラ咲いて空家なり

八尾市 神原 まさと

空飛んで見たいと思う池の鯉
まくなぎに好かれて困る宵の道
飛魚の雄姿特攻隊のよう
武蔵丸武士の情けと見ておこう

和泉市 西岡 洛醉

若者と言うファッションの鍵の束
新品の靴に我が家の世紀明け
満足が五臓六腑へ吟醸酒
雲流る妻の秘密を乗せたまま

河内長野市 植村 喜代

歳取って皺がなくなる名女優
雅子様とご一緒と言う出産
見晴らし一番 台風も一番
ざらざらと外は工事の熱い音

岸和田市 井伊 東吉

扇風機出し一年の早さ知る
スリッパのイ草仕様に見る世代
パリポリと噛める煎餅自前の歯
一段と声高くなる墓蛙

岸和田市 池田 寿美子
衣替え捨てるに惜しきものばかり

水無月の晴れ間シャンソン唄おうか
不器用でも何故か愉しい趣味の顔
さわやかな布団に眠る青葉風

岸和田市 木村 正剛
髪型を変えればうるさく聞いてくる
退職し妻を上司に持つ身かな

幻の含み資産が頼りです
喉元で優しい言葉つかえてる

大阪市 寺井 東雲

一回りすると尾鰭が大きくなる
カルテには金欠病と付いてない
ライバルを追って抜く時考える
パラリンピックの車椅子には励まされ

大阪市 清水 絹子

母の日でない日も嫁のお献立
青春を辿ればそこにきのこ雲
急ぎ足の躑躅猫にふり向かれ
商店街いつもどこかで鑿の音

大阪市 大塚 節子

介護保険少ない年金から引かれ
お供えに自分の好きな菓子を買い
かけつけて来たが喪服の出番なし
介護保険 世話になることないように

大阪市 長谷川 会美

出世する人は座もちが上手です
返杯でやつと名前を覚えられ
窓口は枯れない花で四季もない
待合は病気話で花が咲き

鳥取市 西村 黙光

野次馬が独り芝居を盛り上げる
独り芝居年中無休暇がない
独り芝居陰で操る惚けの魔女
独り相撲取って外科医に笑われる

鳥取市 富山 檳榔樹

大文字懺悔の炎揺れて来る
口笛が僕に向かつて木霊する
政治改革批判の苦痛耐えるべし
物忘れ夕餉の肴にされている

鳥取市 近藤 佳子

さわやかな歯みがき匂ういい友よ
服が言う美人に見えるネエ買えよ
あなただけが頼りぴったりよりそって
税還付ちよっぴりだけでもうけた気

鳥取市 田賀 八千代

人間が好きで怖くて輪が抜けぬ
事件簿が低年齢化して怖い
高級なクリーム少し期待する
高級品付けて背伸びの会話する

カモメール初夏の便りはポストから
鳥取市 前田 一枝

一人では翔べぬ群れでならとべる
良い知恵も会場出たら湧いて来る
しめ出され叩く裏木戸こつがある

鳥取市 谷口 次男

お金より水と空気を大切に
時々時間とお金忘れよう
雨音が哀しく何か急き立てる
オギヤーという第一声は神の声

鳥取県 津村 八重子

曾孫の名前を舞とつけたと言う
舞の顔見れば心のうさも消え
あたたかい家族で舞もよく育つ
すすくと舞も早苗もよく育つ

鳥取県 近藤 春恵

ふる里に思い出一ぱい置いてきた
我が城を守る宝の孫生まれ
ごめんねと心で詫びて子を叱る
鍵っ子へごめんねと母書き置きす

米子市 木村 春枝

ゆったりと鹿の匂いと小半日
三十年古い風情の消えた寺
長い坂息整えてまた歩く
牛小屋を我が物顔の耕耘機

走り出す噂を止めるすべがない
あじさい寺で迷った花が咲いている
雷鳴に大事な話ききもらす
ガレージにとられた庭が三坪ある
米子市 門脇 晶子

七十路生きて怖いものがまだ
同窓会病の話で盛りあがる
占いの一こと心で反芻し
笑わせる余裕もでて来た我がガイド
出雲市 富田 蘭水

ちゅうらさんのおばあのように真ん丸に
とうきびがさやさや真夏の夜の風
水羊羹ゆつくり食べる生き残り
保護色が鴉のジェラシー掻き立てる
出雲市 石倉 美佐子

賽銭ははずみ嬉しい娘の安産
野仏へ十指合わせる野良帰り
掛軸もおろしすつきり初夏の床
草萌えて心も燃える旅プラン
出雲市 小白金 房子

靴踏んで踏まれてダンスうまくなり
伸びきった輪ゴム限界ですと切れ
ぼろ着ても札の重みで気は温い
羽広げ蝶しあわせな夢ごち
出雲市 板垣 夢酔

富山市 酒井 輝

正論を張る蓄えのある暮らし
電話魔をありがたく聴く老い独り
生き過ぎて見知らぬ人に勞られ
見え透いた世辞を感謝で聞くも歳

十和田市 小笠原 敏 人

ゴミ燃やす書かれた文字が消えるまま
朝夕の役目に姿勢崩せない
獣道庭に一本猫悠々

玄米茶庭の茶がらに小鳥舞う

弘前市 一 戸 ツ ネ

祭笛ときめきくれる基地になる
地下鉄の吊り輪に揺れる無量心
羅漢さま終着駅の主になる
星屑へ還してやろう子守唄

弘前市 福 士 慕 情

均等法はたらき蜂が騒ぎだし
褒め上手どぶの掃除もさせられる
おもいつきりしたクシャミの爽快感
再婚を進める友の痴話喧嘩

唐津市 樋 口 輝 夫

三者面談親父のネクタイ裏返し
職退いて朝の箒に掃き出され
置き忘れの老眼鏡に睨まれる
父の日が嬉しかったは若い時

京都市 山 海 友 熙

うつかりと花に愚痴言う孤独感
夏痩せの母に林檎を剥いてやり
よい笑顔わたしにくれる花菖蒲
わたくしの喜怒哀楽を知らぬ花

滋賀県 中 宗 明

好きなので裏腹なこと言っている
盗聴器仕掛けて覗く恋仇
老い先をどうしても子に頼る親
糟糠の妻に死なれてしょんぼりと

岡山県 富 坂 志 重

怒ったら子供はきくと嘘をつく
体調を崩し神仏思い出す
低い鼻一番ひどく陽があたる
故里の切れはし拾う写真帖

竹原市 時 広 一 路

剥製の雉に見せたい空の青
のんびりの定義を雲と話そうか
買い替えの効かぬ生命で修理する
迷うのも人間決めるのも人間

第6回「鶴杉」川柳大賞作品募集

8月2日必着 一人2句をA4判に書き、千円を同封

929-1215 石川県河北郡高松町字高松ク40 社会福祉センター宛
問合わせ0726-282-5223 (横井 勘童宅)

白選集

橘 高 薫 風

八 木 千 代

ふさふさと葡萄むらさき母者びと
混沌の澄む果て紫の夜明け
介護する妻は僕より重いのです
風薫る鯛美しく人やさし
死ぬ時に心配のない修業する

黒 川 紫 香

川 島 諷 云 児

人間が良いと笑うて済まされる
それなりの返事でその場済ましとく
目の色が変わって来たな本気だな
嘘ついて帰る夜空に星がない
順不同なのに阪神いつもビリ

波 多 野 五 楽 庵

両 川 洋 々

まだ魅力残ってますかあなたの目
かごめかごめあたたかい手と話し合う
紫陽花忌逢いたい人が一人いる
ほろほろと山鳩の思慕うちあける
愁傷の二字を幾千言ったろう

蛍たんと生めそうな夜がたまにある
ルス電が乱れて夜を振りまわす
薄い息して紫陽花の壺という
梳るように思い出をほぐす
思い出を重ねる丘が柔らかい
八月の海が奏でるレクイエム
過労死の心配はない無位無冠
影法師たった一人の味方かも
物忘れなんにも恥じることはない
一日を大事に笑顔絶やさない
浮き雲に恋した流転かも知れぬ
節くれた十指に忍を言い聞かす
もう少し遊んであの世には行こう
罪つくる指が驚くほどきれい
脱皮できぬお前根腐れしてないか

越智 一水

子の嫁がえびで鯛釣るプレゼント
み仏と向かい心が丸くなり
諍いへ石落ちつけと語りかけ
喋るより聞く耳持てと二つつき
お隣に負けずに叩く干蒲団

小西 雄々

母性愛の丸みの中を抜けだせぬ
愛のヒントをときどき拾う散歩道
幸せを指す手のひら計がこぼれ
無駄花で終りたくない炎の吐息
笑い羅漢が何時でも味方してくれる

野村 太茂津

涙なみだで映画ホタルが舞っている
頑なになんにも言わぬ逃亡記
カラフルな思い出の里眺に
大会へ行けぬ悔しい膝が泣く
居合い抜き試す陰湿断つ為に

木村 あきら

野仏に帽子が欲しい夏日照り
節水の宣伝カーがゆく暑さ
赫々と燃えて墜ちゆく夕陽かな
水蓮の鉢にも月が浮いている
目立たない処で効いてる母の釘

工藤 吟笑

三十三間堂 柳の精は子供産む
白砂青松並木に天女舞い降りる
彩あせぬ間に飛立とう千羽ツル
陽を傘に月を鏡に生きてゆく
口八丁手も八丁で疎外され

野田 素身郎

家族旅行引つ越しほどの荷を持って
ビー玉にまで孫の名前を書いてやる
心がゆれるMという名の頭文字
沢庵を買いに行くにも紅をさし
残照の岬二人の長い影

斉藤 カカ

クレヨンのみどり一度に減る季節
蹠が忘れていないのは土
蕎麦の花一面純白を誇る
洋次郎碑の除幕歌声木霊して
山小屋の笛に魂揺さぶられ

月原 宵明

家計簿は引き算ばかりすればよい
よい事がありスキップでランドセル
鞆持つ男が提げたゴミの朝
星に屑あつて夜空が美しい
老農が拌んで通る野の地蔵

正 本 水 客

正座して聞いた話を思い出す
出ぎらいの人と話して小半日
会釈してむこうもこっちふりかえる
日光浴しようときげんのいい日なり
旅人の心をいつもわすれない

芳 地 狸 村

中世のあかがしみつく石畳（シエナ五句）
どの顔も悪戦苦闘のカンポ坂
スマートなマンジャク塔が美しい
すり鉢のカンポ広場にある誇り
かべ天井煉瓦づくりのレストラン

恒 松 町 紅

人恋し放置自転車無人駅
聞き飽きたとはご本人知ってない
まだ声が耳底にある満中陰
飼犬に噛まれた傷を撫でている
食欲も頑固も生きている力

堀 端 三 男

七癖を知り抜かれてる友が逝く
今更と言うマイナス思考捨てましよう
どの写真見ても斜めを向いている
梅雨晴れ間老いには老いの青写真
流石プロ玉をころがすよう歌う

西 村 早 苗

連れがもう来るコーヒーとお茶置いて
替女の三味耳立て聞いたサスペンス
ウナどんを食おうと誘いは珍しい
こちらからかけねば癖の糸電話
風鈴もいい音とつてもいい話

板 尾 岳 人

夕立へ母と寝ました泣きながら
夕立へ塩昆布煮えている火鉢
天の川あふれて夕立亡母を呼ぶ
夕立へ恋とは知らず蟬時雨
御都合がわるくて逢えぬ俄雨

阿 萬 萬 的

騙されたふりにも歳の功覗く
負け犬に似て僕の影ついて来る
（駒ヶ岳山麓に遊んで 二句）
連山の雪へ朝日は神の色
湧く雲へ恥ずかしそうに覗く嶺

小 林 由 多 香

ていねいな言葉を選ぶ舌もつれ
裏を見てからは疑い深くなり
欲のない男計算にも弱い
生かされて貰うばかりの恩たまる
いい日柄長持歌がよくはずむ

土橋 螢

燕子花しずかに鳥になつてゆく
渾身の力が玉の汗となり
葱坊主今日も日日は好日か
黄が赤に変わる女に魔の時間
悪人正機 偽善者にならんとす

遠山 可住

お化粧へ元の可愛い顔が消え
早口のくらしへ老いのネジを巻き
八十の父にかなわぬ畑仕事
一泊の服選る妻にくたびれる
妻こそその苦言がピンと背なを刺す

河井 庸佑

意地悪な気流に揺られ空の旅
独り言いう留守電の味気なさ
反論を謙虚に聞いている余裕
花一輪殺風景な部屋和む
真の友なればの苦言じつと聞く

舟木 与根一

物干しへ乾され老人疲れます
洋服屋が若いとのせる衣更え
吊り橋の上で男をさらけ出す
売り時を逃してしまふ葱坊主
再生が効かない家の粗大ゴミ

玉置 重人

栗師の遺徳一句が抜けました
車座になると本音がこぼれでる
自転車があればどこでも行く傘寿
屁理屈を一番嫌う作業服
集印帖とても帰依する顔でなし

竹内 紫鏑

恩師みな逝きたる校舎一巡す
西暦を英語教師に仕込まれる（一九三〇年代）
理科系の漢語つぶやく銃手入れ（兵器教育に）
レーズン婆さんと従兄弟が言う年忌
忌み数を背負う外人罍まわる

榎本 吐来

公園の緑の下の母子影
ぶらんこが上手くなったと手を叩く
ニュース種尽きない児童殺害鬼
小泉人氣不況不満に支えられ
真紀子訪米親中の粹ぶら提げて

宮口 笛生

酒という良薬のんでいる元気
酒要らんいうたら俺は終りだろ
当り前のようにパンの耳を捨て
二泊三日晴晴晴の佐渡の旅
こんな字を忘れてしまふ老いている

藤村ノ女

茶柱が立ってさわやか今日の旅
同じ趣味囲めば平和な顔ばかり
輝く月疲れた地球見てござる
灯明に父母のささやき聞く月夜
妙法の灯まぶしい五山の火

森下愛論

一切空愛の昇華の星となる
風流を知らずに背負う今日孕む
四面楚歌風は私を吹き抜ける
駈けつけて俺は何しに此処へ来た
似非笑顔ボタンと仕舞う折り鏡

田口虹汀

音立てて菖蒲が開く午前九時
血の循環に好いとバナナを携けて孫
日にちまで違えず花は咲いて見せ
好い湯だナー洋々閣に立つ煙り
太茂津御大を博多の駅に置いて去に

西田柳宏子

あじさいと小雨に濡れて初夏に入る
軌道チト狂いベソかくブルーメラン
良い噂さえも皮肉とする同居
坐り舐舐母忍従の勲章だ
諸々にチャレンジ傘寿の余命表

八十田洞庵

脱皮した蟬明日の日は思うまい
お下げ髪やつと初恋助走する
汚染する川の悶えが時に荒れ
偏差値に乗ったエリート直ぐ沈む
大慈悲のひたい白豪おやさしい

藤井明朗

母の笑顔に家族の和を包む
妥協点余裕残してまとめる気
病院は多忙過疎を支えてる
人生を丸く生かされ愛される老い
初盆に偲ぶ友への般若経

石川侃流洞

答弁ヘケガをせぬようあいまい語
電子音老いの脳味噌饅えてくる
足裏に月日を生きるツボがある
発展的解消にする行き詰り
馬券買うとなぜか予想が逃げて行く

河内天笑

千光寺山荘に出た丸い月
どうだとはかり尾道は晴れわたり
「酔心」をたつぷり吸った赤御影
どの顔もにこにこ天気はめちぎり
史子ちゃん一氣に美女になりはった



板尾 岳人 選

京都市 清水英旺

横浜市 荒井広和

女房のくじ運に賭けジャンボ買う
宝くじもしやもしやの欲が出る
ふつつかな娘と母は相似形
窓開く薫風蠅を連れてくる
天仰ぎ星の饒舌聴いている

高槻市 執行 稲子

マンネリの夫婦にすこし喝を入れ
満身で世界を蹴ったトト戦法
歴代をつなぐ喜びこのとり
くたびれたシューズに香水しいてやる
親不孝がマンネリになるカーネーション

泉佐野市 稲葉 洋

ひよっとしてひよっとするかな夢の夢
明日がある確と保証の無い身だが
夜が明ける何とはなしの安堵感
ジグソーパズル亡妻のハートが見当らぬ
モザイクをかけて人権罪と罰

まあだだよ叫び死神遠ざける
爪楊枝連れて酒場の梯子する
相槌を打って繕う風見鶏
節くれた指が幸せ教えてる
前歴の自負が無冠の背に透ける

富山市 松見 たえ

ほどほどの嘘を交えてする会話
豊かさの盲点突いた落とし穴
がまん我慢いつまで続く持久力
エリート肩書重く蹴躓く
欲望を抑えドラマを待つピエロ

東京都 清原悦子

夏空に私の夢をかいている
デパートで歩き疲れた目の保養
原点に大事なことが書かれてる
男泣きだから涙を誘われる
失敗も笑顔で少しごまかして

札幌市 三浦 強一

うっかりもよし人生の潤滑油
友と飲む地酒に溶ける国訛り
モノリザに似せて妻描くおべんちゃら
施政方針妻に言わせている平和
浴用剤買つて今夜は草津の湯

河内長野市 大西 文次

しつくりと合わぬ背広で二度の職
ひと安心娘にやつと虫が付く
愛敬がよいと釣書の偽証罪
お前百までと約束してしまう
面倒は死ぬまでみると誓約書

奈良市 乾 春雄

忘れても他人が持っている記憶
靴ずれが痛む左遷の道遠く
傾いた日もある老いの夫婦独楽
恥かいておぼえたことは忘れない
オルガンの校歌に遠い絵がよぎる

町田市 土田 今日子

空腹で寄りデパ地下を買い占める
介護でも福祉でもない外れ籤
よしと言うまでは勝ち目があつたのに
高齢化 冗談じゃない過去の汗
アンケートその他ばかりに丸をつけ

川崎市 塩沢 ひで

逝く予定無いけど墓の草むしり
能無いが扶養控除で役に立ち
捨てようか迷う形見に袖通す
待ちながら花占いで好き嫌い
客の愚痴笑顔で女将酌いでやり

宇部市 高山 清子

何時履こう夫に内緒の赤い靴
レントゲン酒と煙草を止めという
屋上で月まで飲めるいい気分
お日柄にこだわり見舞い行きそびれ
心の傷流す雨ならぬれて行く

京都府 前上 英一

余生いま夫婦の歩幅リズムあう
顔立てるために一日棒に振る
手枷足枷 外れて老いの海の中
恋の火種まだ胸底に消さず抱き
呼び慣れた名前が急に出てこない

兵庫県 安達 厚

村内の噂を聞いて散歩する
か弱いが妻の支えを当てに生き
お互いのどじ笑い合う老いの日日
妻の笑み中味知るまで要注意
やさしいが母を越せない妻でいる

綾部市 藤田芳郎

横浜市 鈴江純子

不器用で苦手 奴と煮転がし
空振りの多いわが家の四番打者
体調の好い日に医者のはしごする
隠し味程度に嘘も混ぜておく
心臓の溜息を聞く聴診器

神戸市 両川無限

横浜市 吉田裕峰

何もかも許す涙は見せられぬ
見栄ばかり張るからいつも冷や御飯
甘口のワインにすっかりだまされる
脳天をプラス思考に切り替える
子の部屋を覗くと積木くずれそう

姫路市 北条てる代

横浜市 芦田鈴美

ぶつかって本音で回る夫婦ごま
噂だけ拾い真実見えてこず
夕焼けがきれいい夢見られそう
亡母の歳越えても母を恋しがる
建て前と本音で編み込む人模様

岡山市 藤原一平

横浜市 川島良子

攻撃の旗がだんだん守備になる
身の程を知らぬ小石が飛んでくる
ネジ巻けばまだまだ走る父の貨車
言葉には出さぬが好きな人がある
鶴全部飛ばして明日は嫁に行く

かすがいいが居て連れ合いと丸く住む
傷心を母の笑顔に癒される
花束で攻めライバルを退ける
思い出も苗と一緒に植えておく
改革の期待が肩に重すぎる
横道にそれて講演褒められる
ラブシーンそつと横目で妻を見る
好物を食うな飲むなと藪が言う
朝イチロー昼小泉で夜中田
道草か拉致されたのか遅すぎる

家事育児こなし頑固な指になり
れんげ畑地球を大の字で背負い
可愛がるもんかと孫を待っている
下駄箱のブーツきちんとおじぎする
少しでも進めて老いの腕時計
猛犬に注意ワタシのことらしい
ダイエット肩甲骨が動き出す
できぬ事できぬと言えばそれで済む
オクターブ上げてアナタをお出迎え
末っ子が頼りにされる歳となる

横浜市 秋 元和 可

腹立てぬ寿命が縮みそうだから
悪戯な風に帽子をからかわれ
方言で話しかけてる下心
結局は歳相応にたどり着く
ゴキブリが居ると夫が叫んでる

香川県 伊 勢 八重子

ふり向かず淋しい顔を置いて来る
お先にと退院する日の軽い靴
結願の門をくぐれば広い空
軽口をたたいて妻の反抗期
幸せを装う孤独を聞かされる

今治市 野 村 清 美

何もかも中途半端で世を渡る
つゆ空の鬱をあじさい消して咲く
美しい年増のような花菖蒲
つゆ晴れ間心のしめり乾かそう
ふる里へ流れる雲に話しかけ

高知市 小 川 てるみ

ポケットの我慢の二字を温める
川柳を初めてからの不眠症
節穴ではないと思う自尊心
幸せの種が芽吹いてくる予感
寡婦の城くらしの彩を覗かれる

愛媛県 花 岡 順 子

有頂天になって梯子を外される
負けている方が気楽な口喧嘩
雲悠悠 今日にはクジラになつて
定年へお暇でしようと役が来る
晩学の夢をゆっくり追いかける

篠山市 谷 田 多美子

こわごわで食べたケーキでまた太る
霧雨に傘が群がる牡丹狩り
診療所もう友だちが出来ました
一言が生きて家族の輪が和む
流行におくれ五月に風邪をひく

鳥取県 河 本 晴 子

火遊びだなどと勝手な申し分
忘れない積もりでガスの火を離れ
反省という名目の食事会
整頓を血相変えるほど嫌う
断りに勇気を出して楽になり

鳥取県 福 西 茶 子

つぎつぎと苦勞の芽だけよく育ち
風向けてライバルの背を撫でてみる
銀婚が過ぎてどっしり根を据える
親不孝 詫びぬまんに父送り
そのままのあなたが好きで来る蝶々

島根県 武 島 ちよえ

主婦と言う現職があり呆けられぬ
方言が行き交う街で気が休む
こだわりの店でこだわる人の列
真夏日をお隣の木に助けられ
遠回しに言えばやっぱり通じない

鳥取県 澤 裕 子

捨てられた過疎の庭にも四季が来る
雑魚なりに夢と希望は持つている
過信した長所に足をすくわれる
血のめぐり悪くてコント通じない
アングルをかえれば長所見えて来る

鳥取県 鳥 羽 直 市

IT時代昔ばなしが嫌われる
あせらずにこれから老いを楽しもう
普段着に着替えいつもの母となる
時どきは子どもに戻り飽める
平凡に笛を吹きふき生きている

鳥取県 吉 田 弘 子

健康の貯金してます万歩計
足して二で割ればほどよい彩になる
報道も政治も三流アピールする
ヘソ出しルック雷さまもそっぽ向く
満ちたりて人の情けに気がつかぬ

鳥取市 田 村 邦 昭

自分史の昔むかしを消していく
衣替え美肌が僕の目をとじる
初対面氣にいったまま妻になり
引き算の人生されど闊歩する
逆点が女の意地を嫉妬する

鳥取市 横 田 春 名

あんなことこんなことあり年紡ぐ
昨日よりちよつと好い朝背を伸ばす
こぼれ出た愚痴に大きな尾鰭つく
歯切れよい政治家支持をしなくなる
小言聞く耳がだんだん固くなり

鳥取市 録 沢 風 花

戦後史の道に落した夢探す
追憶の梨白く咲き春が逝く
振り出しに戻れば見えてくる明日
丸いはずなのにとどきき角が出る
ふる里の梅の古木はまだ元氣

鳥取市 永 原 昌 鼓

相槌を打つても味方とは言えぬ
どうしても噂に尾鰭つけたがり
性ですか好きも嫌いも女です
才能のなさを遺伝のせいにする
許さんと言えばよけいに燃え上がり

米子市 足立 由美子

小踊りの靴が吉報連れてきた
公園に踊り疲れた風の跡
茶柱が立って朝から胸躍る
晩酌の父はとっても饒舌だ
目の奥に亡母は笑顔を置いたまま

島根県 多々納 テル子

生かされて明日へ向かつて行く切符
傷口の深いところで愚痴こぼす
ぶつかると南の風に撫でられる
新緑のしたたる中にいる句箋
古時計 捻子かけながら踊り出す

島根県 福岡 博利

わらび筍爛も上々山暮れる
わらび狩り神様雨が足りません
一合の酒で酒呑童子が夢に出る
汗流す今が幸せコップ酒
好きですとゆかたに風が語りかけ

羽曳野市 山本 たけし

老母の手が揉んだ新茶に詰まる喉
自然との出会い絵にしておえた旅
若者の未来狂わす入試ミス
冷めた目で見てもやっぱり好きな人
国のつけ老いの肩にもずしりと

吹田市 須磨 活恵

人の世にまさかまさかの坂いくつ
森林浴影と光のハーモニ
おにぎりがめっちゃおいしい草むしろ
自画像の胸のあたりを野火が這う
手のひらで女の種火燃えつつけ

和泉市 横山 捷也

無理にとは言わぬが無理を押し通す
ささやかな野心を持って紅を引く
ライバルも居るから誘い断われず
お仕事と言う切り札で義理を欠く
親の背を反面教師にして生きる

八尾市 平川 幸枝

マンネリの男の手紙無口よし
ここからは子でも入れぬ胸の奥
磨かれたキッチン独りにある自由
青空を借りて悪口シャボン玉
お代わりと言ってくれそな御仏飯

八尾市 松葉 君江

雨降って蝶もゆつくり羽休め
三世帯 祖母のタクトが狂いだす
里がえり娘の雑音を受け流す
子を育て娘節約板につき
ラベンダー薫りに鼻を遊ばせる

八尾市 田 中 トシエ

東大阪市 田 中 美弥子

腹だけが西瓜で冷えた熱帯夜
ほめられた花は自由に縛られる
ストレスも一緒にカット美容室
ペランダに余生とやらのミニトマト
納得がいかず曲ったままの釘

大阪市 中 川 千都子

ごめんねと言えど機械の心拍数
父の事故ほんの小さな記事になる
一秒の重さ死にゆく父と居て
定期入れ四つ葉の幸を信じてる
空色のマニキュア塗って雨の街

大阪市 三 浦 千津子

毒舌も涙もたと持った女
のほんと妻の記憶に支えられ
未練あり一つ二つの戻り梅雨
三度名を変えて銀行生き残り
ひと呼吸遅れた人のいい話し

枚方市 二 宮 紫 鳳

さざえさんすっかり地で行く我が家です
三枚目演じて我が家平和です
少子化の命奪った大惨事
あじさいの色あざやかに雨を這う
通学へバステルカラーの傘踊る

君がいて輝いている日日の風
軋みつつ走る夫婦のモノレール
今度こそ幸を夢見るこぼれ花
もう一度燃やしてみたい女の火
かばい合い逆流越える夫婦舟

東大阪市 今 岡 貞 人

一期一会優しい風にある誘い
すべらせた口が大きな荷を背負う
飲み込んだ文句が喉に引っかかり
よく曇る心の窓を拭いておく
ペイオフが老いの余生をおびやかす

和歌山県 中 村 君 枝

ない袖は振らず気楽にいく蜻蛉
ある時払いその後さっぱり顔見せず
軍配が小指に上がり家平和
誘い水つい飲み過ぎて出た本音
欲張りの耳は千里を駈けめぐる

和歌山市 武 本 碧

出遅れたピエロは恋の橋渡し
幸せな出会い見つけた回り道
見渡せば反旗ちらほら立っている
営業の靨笑顔を売り歩く
未来にはきつと花咲く種を播く

北九州市 岡田幸生

打つ手みなずばりと当たる日の怖さ

愉しみを捨てよと論す処方箋

ドック入り五臓六腑に篩かけ

きつとよと言った小指に騙される

唐津市 坂本兵八郎

嫁ぐ娘の空即是色今日の宴

会者定離今朝も女房がいてくれる

風呂場での思索を妻に崩される

妄想も知恵も溶かした般若湯

今治市 塩路よしみ

自分史にどこか抜けてる昼の月

野に咲いて強く生きよと鬼あざみ

凡人で米研ぐあすもあざつても

写経して極楽ゆきと決めている

松山市 高橋宏臣

紛れ込むエゴも正論練ってくる

針穴が糸の自信を通さない

意地通すもつれ続けた平行線

法螺上手よほど政治が好きらしい

愛媛県 安野案山子

銘木を育てる雨に叩かれる

背伸びした庭木へ容赦せぬ鋏

定年の宙ぶらりんへ雨続き

日帰りの県境越えて通り雨

香川県 原賢

ダムの過去 忘れたような碧い水

言い過ぎた言葉に触れず朝の膳

人を差す指と妥協はしない父

右で聞き左へ流す技も研ぐ

南国市 小原圭二

色あせて泳ぎ疲れた鯉のほり

捨て犬が澄んだ瞳でまといつく

無職だが妻のお抱え運転手

街角のうどん屋が取る消費税

高知県 百田幸

津軽三昧 時々糸がもつれそう

足りすぎてストレス溜まる人もいる

豊かさに馴れて心の貧しい子

転ぶ度女は強くなりました

高知県 近森かよ

効きそうだ深層水で飲む薬

時々はお酒も飲んで胃の掃除

耳よりな話は聞かぬことにする

長電話少しエッチなこともいい

高知県 桑名孝雄

女運いまさら向いて来られても

入学式あれから夜叉になったママ

あの誓い小指が記憶しておらぬ

余程いい酒だろ足が浮いている

秋田県 湊 修水

散歩道菜畑に花の私語を聞く
賞味期限いらぬ老婆の隠し味
出る杭が打たれジャジャ馬苦戦する
九十坂旅は急がぬこととする

川口市 原 沢 かね子

一流があてにならない世に生きる
法話聞きふと甦る記憶力
反抗期忘れた頃にくる恐さ
あの世でも縁ほしさに買った墓地

東京都 井 上 つよし

ワープロにひと言本音筆で添え
そこが痒いここが痛い仲の良さ
飄々と汽車は出て行く無人駅（北海道旅行）
居眠りを何遍しても続く路

武蔵野市 亀 井 円 女

見兼ねたら流れに棹を差すことも
たかが八十されどされどと叫んでる
文句言うまい亡母に貰った顔だもの
隠すお金の無い幸せもあるんだよ

横浜市 伊 藤 ふ み

羽ばたいて魔物退治の旅つづく
さよならのチャンスくれた俄雨
葬式の花輪数えて帰る道
スニーカー気に入って脱ハイヒール

横浜市 巖 田 かず枝

肩書きはないが食べるに困らない
垣根なし隣の庭もうちの庭
似てほしくないとこ似てもかわい子
着ていても裸にされる週刊誌

横浜市 福 田 由美子

ちよつとそこ行つてきますと空の旅
無農薬と聞いておいしさ倍になる
質問のボタンが欲しい券売機
妻よりも嫁で背のびをする同居

横浜市 金 森 徳 三

精神はまだ現役の月曜日
浮気ものの腸があちこち癒着する
住宅街さつき縁どるワンパターン
塩じいの爪の垢でも煎じるか

横浜市 三 村 八重子

引き際を桜がさとす椅子の幅
割れていい茶碗は残る食器棚
新婚の時も知ってるフライパン
ありがとう今朝も十指で顔洗い

横浜市 平 達 也

全身をぶつつけ悔いは残らない
予報雨真つ赤に晴れた愉快な日
老いるごと遠い昔が甦り
徘徊じゃないがうろつく万歩計

横浜市 近藤道子

新聞にこわい事件が多すぎる
トラブルが続く運勢見てしま
う
リサイクル私を洗う雨が降る
あじさいへ心変りはしてませ

横浜市 長島亜希子

時効きたからこだけと聞かされる
恋人を募集してます七回忌
シユレッターわたしの過去は粉微塵
パーマ屋で出会い毛染めを笑いあい

横浜市 石原三郎

街なかに残る農家も嫁が来ぬ
老妻がまだあてにする瓶の蓋
杖つかず歩ける老いが日日愉し
女みな美人に見えてまだ達者

野田市 那賀島雅子

雨の唄くちずさみつつ蛇の目傘
婆さんと呼ばれ腹立つ若さ持つ
白粉の下に素顔を押しこめる
辛抱のふた文字すでに死語となり

藤沢市 妹尾安子

いい予感おほろ月まで押してくれ
帰省子に朝から弾む台所
上手でも下手でも受ける安来節
御自慢の子ども案外親を捨て

岐阜市 平野あずま

人間の匂いが染みた狭い路地
ブランドの傘が嬉しい走り梅雨
シャッターが切られた後に出る笑い
転勤の鞆の中に不発弾

倉敷市 撰喜子

残菜の肥料よくききうまい茄子
少年の心踊ったとんぼ釣り
ドレスアップしすぎ観劇睡魔来る
赤い糸もつれたままで一つ屋根

岡山県 国米きくゑ

寄りそうてゆつくり渡る長い橋
しっかりとサビ止めをする長い橋
オイと呼び旧人類の半世紀
手で話すとても静かに盛りあがる

竹原市 正畑半覚

水攻めか塩を送るか影法師
水際で地獄の底を見てしま
う
母と子を守り続けた父の樹よ
水たまりふたりでピョンと跳んでみる

出雲市 伊藤玲子

去った日にくれた薔が今開く
赤い靴欲しがっただけ嘆いてる
歯ブラシも乾いて君を待ってます
献眼を予約私のリサイクル

出雲市 川 島 和歌子

二度の職馴れて仲間も出来ました
梅雨の空茄子も胡瓜も花ざかり
うっかりと口すべらせて悔いている
倅せは家族の愛に触れた時

出雲市 加 藤 スズコ

墓参り仏の好きな花を抱き
タンポポの行方を夢に風に乗る
袋帯母の形見に身がしまる
向かい風世紀の顔で鯉のほり

松江市 福 間 芳 枝

厳しさに負けて流れた自己弁護
出しゃばりを私に似てると過去を追
ここは度胸押売りの目に返事する
新聞のちらし楽しくお茶うまい

松江市 松 浦 登志子

夕焼けの中で涙が滝となる
屋台骨大事に思うネジひとつ
新緑のカーテン開き風になる
決心の手が選んでるすみれ色

松江市 三 島 浜 丘

病む度に人間臭さ枯れてくる
ブランコが独り揺れてる夕餉時
方便に人を導く嘘もある
鬢付けの匂い伝わる亡母の影

益田市 岡 田 竹 夫

古顔となった団地で家と老い
腹が立つたら鮎玉口へ放りこみ
片棒を担いだ足が抜かれな
行く末の夢を心に抱いて生き

島根県 松 本 聖 子

母の日に老母を気遣う嫁がいて
日本晴れ今日もやるぞと深呼吸
肩書きを外した名刺の重味です
こんなとき亡夫が居たらと泣けてくる

島根県 毛 利 幸

川柳が私を変えた新世紀
ナイヤガラ瀑布のしぶき顔洗う(カナダ旅行 3句)
カルガリー大歓声の夢残す
エコノミー症候群に気を遣い

島根県 管 田 かつ子

紫陽花に酔うているのか蝸牛
願望がまだすこしありラブソング
六十路お若いすねと九十歳
脇役を続けて来ました慣れました

島根県 持 田 多輝子

見栄張ったばかりに収拾つかぬ破目
横車押して道理をへこませる
割箸がざらりと割れるグルメ旅
妻というつつかい棒がいて安堵

米子市 森脇麗

死ぬるまで女おんなの火を抱いて

枯れぬよう「愛の讃歌」を夫と聞く

幸せは側に夫が居てくれる

国産のチェリー横目に通り過ぎ

鳥取市 加藤茶人

効いてきたボディーパーローは妻の愚痴

大胆に女が変わる子が五人

若い時買った苦勞を生かす知恵

妻昼寝してても給与振り込まれ

鳥取市 福永ひかり

屁理屈に一对一がもどかしい

夫から借りても返さないお金

ストレスを口実にして食べている

コウノトリ待ちに待ってたご懐妊

鳥取市 岡田信恵

紫陽花よ我が家の庭に初夏の彩

ウインドーにマネキン初夏を呼び入れる

時々は自分をほめて前向きに

暗やみも二人づれなら恐くない

鳥取市 福島庸二

方言が昔ばなしに色付ける

かくし芸フル回転の五本指

草花と会話が弾む庭仕事

追い込まれ揺れる心にネジを巻く

倉吉市 大下智子

風呂あがり寝るのが惜しい蛍狩り

嫁ぐ荷の箆笥の底に母の愛

近づけば近づくほどに情け知る

腹帯を巻いたあの日を忘れない

鳥取県 松川行男

日焼け顔 両手で受ける慈雨もある

君といった たったそれだけ片想い

恐くないみんな老人なんだから

勧められ是非がついたら逃げられぬ

鳥取県 西沖彰雄

居直ってみればなんでもない悩み

万策が尽きて頬杖つき思案

無駄話好きですこれも必需品

一人居で出来る手抜きはして暮す

鳥取県 西垣美知子

赤い陽がもう休みなと野に沈む

愚痴みんな鏡に話し楽になる

荒れた手を母は読みとる里帰り

生きてます喜怒哀楽の輪の中で

鳥取県 下田茂登子

ときどきは水に流してみたい過去

煮え詰った話に水を差しに来る

どうしても払い切れない未練の粉

半世紀過ぎて古傷まだ癒えぬ

鳥羽 玲子

しがらみを離れて旅に満たされる
意外性引き出す煮方考える

マンネリの味へ発想変えてみる
風鈴の鳴るよう風も吹いてくる

鳥取県 山下 節子

許さんと諭した父の目がやさし
どうしても花よりダンゴ好きになる
リストラか椅子がぐらぐら落ち付かず
文化財 菊の御紋に管理され

鳥取県 細田 裕子

子がかじりなるほど細い父の脛
知らぬ間に親よりでかい羽が付き
運命線 先の先まで読めますか
無礼だよ一等田が転作だ

鳥取県 竹森 富久江

あと濁す癖を持つてる鳥の性
おもいやり花の機嫌も損なわず
ゆさぶりに堪えたほどよい根の長さ
彩りになじんで詛り転びたし

鳥取県 山岡 久枝

梅雨空に心和ます紫陽花の
人情に触れて心が熱くなる
詫びてこそ心が通う仲になり
電子療法信じて椅子に腰かける

鳥取県 小谷 孝美

自分だけ信じることにして一人
巻き添えになった命が軽すぎる
もて余す時間ストローかき混ぜる
青空へ恥じない道を選っている

鳥取県 竹信 照彦

腰かけのつもり椅子に正座する
合併の話で揉める過疎に住む
寝ていても命を削る音がする
計画を立てて時間に追われてる

鳥取県 平井 栄翁

戦列を離れて休み知る微風
厚化粧落として妻になるお風呂
肝心な話欠伸が腰を折る
不都合は忘れましたと老い逃げる

鳥取県 奥田 保子

久々に青空覗き気も晴れる
温暖化進む地球は手遅れか
ラッキーだ風が僕等に味方した
夢中でも返事ぐらいはしておくれ

大阪府 内海 綾乃

くじけると母の笑顔が目につかぶ
小泉さん鯉のぼりのよう泳いでね
告知されでもパソコンはやると言う
似顔絵のあの日の二人額に入れ

大阪市 尾崎 黄紅

神は知っても私は知らぬ事ばかり
役付の辞令もらってからの厄
困ったら来いと言うだけ言うておく
騙されてあげるわたしの勝ちとなる

大阪市 星野 きらり

春を抱き煩惱の数減りもせず
人さまにどう言われよと鮭茶漬
へソ曲がりの胡瓜買うてるへソ曲がり
勧誘の電話只今お留守です

大阪市 中井 正秀

ボケられん満期が近い保険金
古時計いつのまにやら進み出す
福は内妻の分まで丸かじり
走らねば掴まりそうで唯走る

大阪市 熊代 菜月

雨蛙あした天気か娘が嫁ぐ
星空に亡母は引越したまんま
捨てられぬ思い出つめた紙風船
カシミ草脇役のまま歳をとり

大阪市 中村 叡子

旅の宿 食後みんなが薬のむ
はるばると利尻礼文よ よく晴れて
あああれが国後島が目の前に
他人事と思えず涙 老いました

大阪市 岩崎 公誠

ガン保険人気が入らない
逃げ足が特技と書いて職がない
ビル並ぶ谷間に町家凜と建つ
父がいる満天の星青の果て

大阪市 浦田 綏子

猫じゃらし毀譽褒貶の外にいて
黒い霧幕にとかけのしつぽ切り
切りすぎていまは孤高の人となる
割り引いてハローワークの列の中

大阪市 伴 洋子

悔しさを碎いて明日のバネにする
冗談で片付けられた刀傷
円周率 月はいびつなまま眠る
愛と憎 背中合せの夢芝居

寝屋川市 岡本 勲

押売りに妻の勇気が前に出る
花よりもダンゴの父も花に酔い
お互いに無視してるから平和です
文明の毒素で地球傷に哭く

豊中市 源田 啓生

お見事と今は言っとく小泉流
耐えている盲導犬の優しい眼
危機感を背にして今日も揺れる橋
狙う的少し外して生きている

岸和田市 不破 仁 緑

どくだみの白さ疑い晴れました
聞き上手にうっかり乗っていた不覚
失恋をしたのか猫が家に居る
踏まれたら謝る事にして置こう

羽曳野市 福田 悦子

風鈴と別れを告げてからの秋
かつぼう着思い出させた亡母の顔
もう少し若くありたい白毛染
入浴剤今日は草津の湯にしよう

河内長野市 木太久 正一

かかりつけ医師に二食を注意され
格好より人に優しい靴が好き
歩き方たしかめながら急ぐ駅
長生きの予感手相を確かめる

河内長野市 柏本 靖子

里帰り甘える母が居てくれる
石畳歩けばロマン生まれそう
かぶと虫追いかけているわらべ唄
プロ野球敵と味方になる夫婦

河内長野市 村上 直樹

絵葉書のすきまも埋めて元気です
遺伝子に福耳だけは残してる
一刀両断もつれたわけは聞かぬまま
決心を岩の硬さに問うてみる

藤井寺市 吉田 喜代子

母の日に期待の舟は届かない
御懷妊笑顔待ちましょお静かに
亡き友の道案内か蝶が行く
見るだけで買った気がするシヨツピング

柏原市 永浜 加津子

独り言だった積りが突っ込まれ
この人をひとり残せぬ雨の音
このへんで写真一枚準備する
ひよっこりと夢に出て来て胸騒ぎ

富田林市 山原 昭水

金魚鉢ながめてちよつと涼をとる
淋しいとき五百羅漢に会いに行く
空見あげ人間なんて小さいな
風鈴に一句つるして茶漬けする

高槻市 乙倉 武史

まぐれでも実力の内と持ち上げる
逆上がり出来た一年生の夏
残照に燃える女の厚化粧
欲だけは忘れず達者老いの日々

堺市 荻野 像山

倒すなら倒せ大きくするパンク
世話焼いてくれた白衣にわく情け
リハビリへ通う元気な長寿の輪
治らない悩みを歳の所為にされ

吹田市 後藤 志津香

貴乃花鬼の表情奮い立つ

幸せは昨日も旬の豆ごはん

梅干しを食べて命をたくわえる

和まれる似た者夫婦六十路坂

吹田市 木下 敏子

もう一ぺん若返りたい水着買う

若返る夢を拾った水の中

風の中蝶慌てずにする脱皮

飛んでゆく力を借りる風に会う

吹田市 太田 昭

吹き抜ける風を茶飲みに呼び止める

悲しみを思い出させる梅雨が来る

正義感もう通じない夜の道

悲しみを抜けず仏の慈悲に会う

神戸市 木村 忠義

遠景を眺めて心楽にする

給油所で車がお乳飲んでる

食事中テレビを消して嫌われる

バリウムが僕の調子を狂わせる

篠山市 円増 純子

老いらくの恋という手もある余生

藍染の濃淡にある深い味

お開きになって本音を吐いている

傍線に父の思いが込めである

川西市 井本 清山

子が居ても介護保険の出来た国

ぬるま湯に首まで浸りほぐす凝り

痩せるためお金をつかうお金もち

旅なれば昼の膳にもワンカップ

兵庫県 広瀬 房江

深刻になるのは止そう葱坊主

仲々に癒えない焦り雨の音

カップ麺にサラダを添えてくれて留守

ダーリンと二人ゆっくり午後のお茶

兵庫県 徳平 毬子

秘めごとを知らぬ顔して丸く生き

白々しい嘘と知りつつ茜雲

薫風に路煮届いて友の声

山河越えエメラルド婚初夏の風

生駒市 飛永 ふりこ

スケッチは描かず絶景眺めてる

これからは自問自答で進みます

無理なことしたら身体が悲鳴あげ

損得の目先ききすぎ距離を置く

奈良県 古手川 光

入園で跳び出しそうな児の写真

降ってほしい降らんで欲しい梅雨の入り

当然のことを異例と言う政治

プライドのかけらで阿呆になり切れず

奈良県 江波 正純

この鏡オレの悪口ばかり言う
金ないが持病ぐらいは持つている
お通夜には酒盛りせよと書いておく
夢追って行けと背中を押してやる

京都市 山本 磔

錆の効いた答してから別れよう
迷路では外れることのないように
切札があるのに黙っていてくれる
抵抗はせずに生きては来なければ

京都市 勝山 美千代

あじさいの彩に誘われ遠出する
亡母の忌に明治の気骨目に浮かび
通学路カラフル傘に梅雨やさし
良い知らせポストが嬉し音のする

和歌山市 上地 登美代

カタツムリ少し動いて日が暮れる
トマトより先に転んだ支え棒
不揃いもまた愛おしい夏野菜
見え透いた嘘を赦して遠火花

和歌山市 吉田 比佐子

三十秒渡り切れない青信号
外出日夕餉の膳は駅の地下
家建って風景違う墓参り
自給自足忘れ輸入の食が満ち

和歌山市 土屋 起世子

雨百態生きる哲学抱いている
雨恋しいあじさいお色直しする
現実を見せられ積木崩れだす
頬なでる風にハートが微熱する

和歌山市 今 一歩

道草で種を貰って気を配り
一服の緑茶が会話和やかに
狂うマグマ抱きしめ諭す神はどこ
児童殺傷ニュース心へ吹く嵐

田辺市 大峠 可動

百たき腸にポコポコ肉団子
アガリスクわたしは腸の洗濯に
理想空転 幕は浮世の影が引き
百匹の蟻も五百も闇へ落ち

和歌山県 村中 悦男

道草の好きな小犬にさからわず
耐えている手をたずさえて坂の道
笑わない人が笑うと笑えない
この団地私の田んぼのあったとこ

日高市 根岸 方子

パソコンに錆びた頭を試される
パソコンで変わる師弟の間柄
万歩計並ぶとやはり競い合い
万歩計明日はどこまで足延びる

青森県 福士トキ

夫婦茶碗新婚旅行帰り待つ

きれいな花も何時か散りゆく風に逢う
ドッコイショ寝るまで腰について来る

新潟県 高野不二

顔見では言えない話する電話

賛成の拍手本心裏切って

二次会になつて雑学しゃべり出す

秋田県 秋野 宏

白足袋に白い女の戦満ち

かな文字は日本が誇る美の世界

結納が済むと近所の目が怖い

日立市 加藤 権悟

物交の窮地に耐えて来た筆筒

負け犬の疵を労る道祖神

琴線に触れると溶けて行く意固地

川崎市 小林 久美子

薫風に元気でいると子の便り

正論は花咲くものと信じてる

街の森カラスの群れに宿を貸す

川崎市 浦野 昭志

駆足でお裾分けする能登の海老

最初着たのに決められた試着室

詫び言を先に話が進められ

川崎市 大島 賛詩朗

連れ糸例え話で解けかかる

支持率へ横綱まわし借りられる
柴又はまだ寅さんの声がする

横浜市 布山 嘉信

うさぎ小屋見下し役所聳え立つ

お互いにくたびれたねと靴磨く

我が街に癒しをくれる閑古鳥

横浜市 生坂 サト子

曇天も気を許せない紫外線

世の中の抗菌ブーム問われ出す

馴れぬ街音の洪水に溺れる

横浜市 山梨 雅子

一人居の指差点検で床に就く

相談をする方向また変わわり

バス遅れ同じ思いで通じ合い

横浜市 北沢 街湖

さて何を買うやらメモが雲隠れ

手抜きした夕餉知つて換気扇

横文字が飛び交う会話蚊帳の外

静岡県 増田 扶美

命名の墨凜凜と柿若葉

豆ごはん赤飯うまし母の味

つややかな新じゃが老いの夢かなう

静岡市 中西 雅

カタログの夢また夢とにらめっこ
片仮名のおぼえられない花ことば
迷いから覚めれば朝の澄んだ空

奈良市 田中 賢治

今着いた千里の道を宅急便
休みなし嫁が欲しいと妻の愚痴
逃げ隠れしても税金じつと待ち

生駒市 小西 稔

恋がたき昔の友と語りあう
梅雨晴れは洗濯物もうれしそう
前かがみリユック背おつて若がえり

鳥取市 近藤 秋星

ぬけがらの私に意見など無用
恍惚の人になるには早すぎる
くしゃくしゃの紙幣渡してほつとする

鳥取市 河田 のり代

あぐらかき冬の衣類が晴間待つ
夫の肩家族の苦労皆背負い
金婚よ愛をたしかめ喧嘩した

鳥取市 山口 千代子

家事終えてホッと一息茶のうまさ
老体も色気は少し残したい
一夜の恋か月下美人にある命

鳥取市 谷岡 清子

生きている忘れ上手が支えあい
メロディーが誘う昔のわらべ唄
ばらのとげやんわり持てばやさしなる

鳥取市 山宮 愛恵

羅漢さまおいしい水をありがとう
羅漢さまが勉強をしてござつしやる
羅漢さまの岩屋に寄付をしなくては

鳥取市 宮脇 道子

踊いて転んで知った老試験
包丁で人を切るとは知らなんだ
老いの海五体満足流れ浮き

鳥取県 橋谷 静江

果てしなく夢を追ってる気の若さ
気が付いて口に出したら嫌われる
色々な苦悩に堪えて強くなる

鳥取県 平木 公子

悪いとこいっぱいあるが愛してる
一番のラッキー君に会えました
すべり止め無くてただ今冷戦中

鳥取県 岡嶋 金子

天国がほんまにあるか見たいもの
天国は帰りのみちがないと言う
親の恩気付いた時は黄泉の星

鳥取県 岩崎和子
読書好き読んだあとから飛んで消え

大空に燃えつき夕日どんと落ち
カラオケに命たぎる夫婦あり

鳥取県 岡村孝明

お隣に漬物の味みて貰う

二十一世紀風車に電気もらうだろ

目玉買うつもりで行って荷が増える

鳥取県 小谷はるみ

海底へ埋めておこう恋ひとつ

か弱くて水を濁して生きのびる

清流にまかせた身です欲はない

鳥取県 蔵本悦子

人間だ魅力はやはり金だろう

モノリザが私の顔に住んでます

大空にあなたが好きと書いて見る

米子市 猪森スミエ

鉢巻きで峠へ挑む窓明かり

親離れ出来て小犬はよく走る

ぞろぞと人が渦巻く始発駅

米子市 小塩智加恵

内緒だと言いつつ内緒よく歩く

親子です揉めても明日は笑顔見る

老人に優しい医者がよくはやる

倉吉市 牧田賀寿恵
死ぬ時をめざしてお金遣ってる

梅の木に毛虫一家が住んでいる

泡風呂にアンパンマンが飛んでくる

倉吉市 前田喜美子

減反に影を落して赤トンボ

古希むかえ歩く姿の母に似て

やっかいな鬼が心に棲みついた

倉吉市 西脇日出子

グリーンするまでライバル気にかかる

怠け癖ついて定職手につかず

血糖の維持を目指して匙かげん

出雲市 梅ミツエ

折紙で色とりどりの鯉のぼり

老いの顔いつも豊かに生きている

太陽の光の朝に散歩する

安来市 原煩惱児

減反へ農一徹の米作り

借りた身を忘れていたと今日の罰

相思相愛疲れが見える古希の坂

倉敷市 家守政子

雅子さま明るいニュース日本晴れ

結婚をして産んでください国の為

亡きあとも夫の時計止まらない

岡山市 清水 金太郎

串間市 山内 滝

神まいりも趣味のうちだと手を合せ
ただ歩く好きな人ならそれでよい
マスコミが蛭とんだと騒ぎたて

岡山市 大森 純子

控訴断念永田町にも梅雨晴間
角界に不死鳥ありき貴乃花
胃ぐすりを用意して見るタイガース

府中市 馬場 利子

指先で掴んだ虹が弾んでる
掌の中で今日のドラマを踊らせる
久し振り好みの柄でゆかた買う

府中市 岩本 雅代

過疎の地に花嫁見えて灯をともし
カレンダーに印多くて花盛り
喫茶店透明ドアで恥をかき

宇部市 中田 忠夫

リサイクルすれば使える物ばかり
老いの身に携帯電話などいらぬ
アルバムにこの人だあれと孫が聞く

唐津市 岩崎 實

予感した通りとなった運び役
夕散歩誘う蛭に足のばす
共稼ぎ田植えするのわかれ一人

辣蕒を男が漬ける信じよう
議定書の酸素 炭素で火花散る
親の歳既に越えても親想う

愛媛県 黒田 茂代

蜘蛛の糸じわりじわりと締めつける
痩せぬはずお腹の空いた事がない
雨蛙牡丹に居候を決め

愛媛県 宮本 末子

六月の棚田上から水を溜め
掘上げて夢をかわかすチューリップ
冷飯になつても甘い里の米

今治市 中村 好恵

叱られたように白百合下を向き
茶に添えた水羊羹が涼を呼ぶ
御機嫌がななめ妻からカープ球

今治市 渡邊 伊津志

墨の絵に詩情漂う星が見え
使う美の実践をする料理皿
馬鹿になろう人が教えてくれるから

松山市 山之内 八重美

わだかまりすんなり溶けた日本晴
欲捨ててはっと安堵の空仰ぐ
逃げ水に辿りつけない地平線

香川県 松村輝夫

種見つけ望みを掛ける火吹き竹

失敗をすると忘れぬ塩 砂糖

カツとなる人ほど景気燃えてこず

大阪市 平井露芳

コーヒーと紅茶で脳のいやし合い

活字読む眼鏡取る人かける人

エジプト展金のサンダル氣に入った

大阪市 伊藤博仁

さあ行こう今日も元気でドッコイシヨ

恥じらいを捨てて踊りの輪に入る

振り袖の中に二人のチマチヨゴリ

大阪市 大川道子

エサくれる人は知ってる池の鯉

ブルサーマル私の町は遠慮する

ルールからはみ出した子で頼もしい

大阪市 中村忠敬

目ん玉を出せよ梅雨だよ蝸牛

体重計入れ歯外して乗っている

ダイエット効果があつて面糞れ

大阪市 小泉ひさ乃

栄光もライバルも消す再生紙

もう少し痩せたら着れる好きな服

不安もち介護保険を掛けている

大阪府 前田忠子

飽食に金柑の実も淋しがり

竹馬のけんか今も続いて古希近し

うたたかの夢とふりむく歳でない

大阪府 小栢こずえ

山椒にも好く虫あつて風さやか

新緑も秋に負けじと葉が光る

梅雨晴れをせわしくはげむ草むしり

大阪府 東文江

同窓会老いた今でも男の子

早一年アジサイの花めぐり咲き

故郷は昔のままで夢に見る

大阪府 桑田ゆきの

生きざまをドラマにしたい百の母

ジャンケンも介護方法脳に効く

水飲んでストレス流すつもりして

大阪府 藤井郁代

甥に暑さ忘れて物思い

今日もまた昼にそうめん苦情が出

水ようかん遠い昔の母の味

大阪府 野田栄呼

幕開いたプラン大きな新世紀

学校も危険な場所だ牙迫る

悲痛にも魔手が校舎で宝消す

門真市 矢 阪 英 雄

あやまらぬ垣根立てても老いる枝
おさえられその分しこり固くなる
声を挙げ力支える理屈こね

泉佐野市 大 工 静 子

足腰は弱し電話も留守と言う
若い人見送り九十未だ元氣
あの頁読みこちらを見日を送る

泉佐野市 備 後 三代子

お婆さま頬を叩いて肌手入れ
じゃんけんでかばん持つ子と持たぬ子と
何しても手間どる病後豆御飯

和泉市 小 坂 凡 英

自らの星と悟れよ妻よ子よ
欲の皮透いて見えます厚化粧
蛾のくせに見事な羽の奴がいる

河内長野市 杉 谷 カズエ

思ひ出の遠浅の海澄んでいる
しゃがんだら立てない足に浜の砂
建て替えた家で新たな夢枕

河内長野市 印 藤 智 子

背中だけ丸くて心丸からず
お隣の犬だけ尻尾ふつてくれ
口答えるなの教え守り抜く

八尾市 山 本 宏 至

もう少し二人でいたいまわり道
均等法妻が歩幅を広くする
栗師の句碑守る如く太子像(勝軍寺にて)

八尾市 中 島 春 江

虫食いの野菜喜ぶようになり
鮎釣りのいでたち程に釣れもせず
床料理いちげんさんもおいでやす

八尾市 高 橋 明 子

雨降れば身に沁む空は真つ黒け
ドテラ着てまだまだ残す綿の糸
息かけて拭くガラス戸に雨ガエル

八尾市 與 田 明

意地悪をされて却って知恵がつき
考えて悩んだ末の総入歯
悪口を言って未練を切り捨てる

八尾市 鷺 見 章

音楽を遠くに聞きて安らぎぬ
窓外の景色静かな別世界
天井をにらんで暮らす病むベッド

羽曳野市 永 田 章 司

逃げ口上 上手になつて義理を欠き
ラッシュアワー人目気にする背のリュック
巨悪ほど尻尾を切つて逃げ上手

羽曳野市 森田 四三郎

ロボットに追い出しくって苦い酒

ドア締める音に相手の心読む

置き場所もちよつと間違えボケにされ

岸和田市 亀井 皎月

豊かさに馴れて不況が厳し過ぎ

余命表わかれbaumと太く生く

願ひ出が多過ぎ神を迷わせる

堺市 渡辺 さだを

旧友と会えばどっちも病氣もち

俺が街チンチン電車いばつて

春落葉隠居するには早すぎる

堺市 大橋 錦

紫陽花も蛙も好きな梅雨最中

本音吐く真紀子節ですよくわかる

改革がかすかに見える外務省

藤井寺市 若松 雅枝

驚いた見本通りの海老が出る

荒波を超えた夫婦で仲が良い

会つてみれば噂ほどではない美人

東大阪市 笠井 欣子

人力車重いですよと断つて (嵐山にて)

病人も見舞の客も缶ジュース

騒がしたお礼にくぐる縄のれん

枚方市 大昇 隆広

やじ馬は判決を見て終りなり

三面記事底の見えない街の闇

泣き事を言わぬ男に言葉減る

枚方市 小川 良吉

現役かと言われている古希の春

仏法に背いて古希にあとがない

死票へ民の歯ざしり天仰ぐ

高槻市 大崎 侑子

薫風の行方遮るビルが建ち

初恋が実らず今の幸があり

癪の種漫画原書に辞書が要る

高槻市 生田 義一

薫風に心はずませウオーキング

巣造りの燕せわしい田舎駅

若き日の夢を誘うや初夏の風

高槻市 西谷 治三郎

財産は無いが遺言書いておく

不景気で機密費全部ゼロとなる

膝押さえヨイショと気合い入れて立つ

豊中市 藤井 則彦

星一つ追う関取の肌が燃え

星空に首をかしげる塀の猫

親の背をたまに見る子がよく育つ

吹田市 二宮 栄子

海南省 堂上 泰子

ホット記事欲しいと思う週刊誌
十年日記いくつもドラマ演じてる
棚ぼたの話聞かない事にする

切々と子へ愛綴る更年期
娘に化粧任せレディーに仕立てられ
不況にも耐えて案練る父手酌

和歌山市 芝 あつむ

和歌山県 森下 順子

缶ビールグラスに満たし煽て上げ
ひと言で言えば弱虫お人よし
焼け棒杭火の粉をよんで燃えさかり

髪染めぬ約束をしてクラス会
納屋その他かたづけ下手は親ゆずり
梅雨晴れ間今日婿殿が田を植えに

和歌山市 橋爪 佐一

尼崎市 尾宮 弘治

ワープロや車も無いと自慢する
OB会叙勲と計報ムード変え
貼り薬匂い気になる初夏となり

エプロンが可愛い父のクッキング
美人でもないのに花粉症の妻
福耳と言われて乗ってから誤算

和歌山市 根田 美子

尼崎市 軸丸 勝巳

不眠症夜は長くて短くて
ドラエモン魔法の杖をくれた夢
身罷れど親は心の杖である

極楽を覗く間もなく麻酔とけ(手術 3句)
顔ほどの包帯を手招き猫
腫れが引き喜ばれてる腕の皺

和歌山市 松尾 和香

尼崎市 桑原 東園

夕映えの空に負けないばらの色
風の鳴る木々の熊野路母を恋う
逝く日まで私の資産未公開

逆転に膨らまし割る紙袋
グリーン車に紳士と洒落れて紛れ込む
体重計情け容赦のない目盛り

和歌山市 前岡 健三郎

尼崎市 河津 正治

ハンセン病控訴断念出る拍手
蜜柑山花咲き揃い蜂群れる
I Tの時代に乗れぬ歳悲し

寄り添える肩びつたりの十三夜
読めないが横文字のシャツ着ています
肩書きに似合わぬラフなベレー帽

西宮市 坪井孝一

バリウムが謀反の気配身構える
ありがとう両手に感謝職退く日
左遷の人かこむ仲間に駅がない

神戸市 船津とみ子

車窓より見えた富士山立って見る
かしら右今日も富士山なでて見る
独り居の家で珈琲飲む至福

神戸市 山口光久

居酒屋に明日の元氣を買いに行く
母の日に嫁が氣遣う花ことば
言い勝って心に残る爪の傷

神戸市 森本みはる

ひまわりがゴッホの慕情抱いて咲く
どくだみ茶飲んで心の毒を消す
泣きばくろあるから涙もろくなる

伊丹市 延寿庵野鶴

先頭の息切れを待つ父の靴
ぶつかって火花を散らす反抗期
パソコンに甲賀忍者が見え隠れ

宝塚市 飯西ミサヲ

物忘れ三度までならゆるしあい
泣き上戸慰め会ってまた泣いて
パンフレットたんと集めて旅未定

姫路市 服部一典

腰痛へ自分の歳と掛合って

きつちりと貰った薬余分でき
孫の守遊ばれている余生です

兵庫県 岩本美緒子

初夏の風さわやか緑溶く絵皿

雨の日は一にち無駄を愉しみて
雨三日挿し菊うれしいタイミン

兵庫県 黒崎美紗子

車窓から競って泳ぐ鯉のぼり

雨もらい草も野菜も競い合い
機械化のお陰田植えの早く済む

兵庫県 山本泰子

二三人寄れば木陰に腰おろす
時のたつままに木陰が場所を変え
大声で泣いてみたいな母の膝

愛染帖

波多野五楽庵選

今治市 塩路よしみ

洗いざらい言えば許してくれますか

葱刻む昨日のうつは何だらう

和歌山市 木本 朱夏

菜種梅雨 胎内時計錆たまま

蛭ほどの温みで遠い人を恋う

西宮市 奥田みつ子

踏まれても蹴られてもただ石つころ

ときどきは泣き顔もして深眠り

和歌山市 西山 幸

生流転 貧しい影と喰い合う

この絵にも見え隠れする柵よ

綾部市 藤田 芳郎

完璧を目指す意固地なインク消し

川の字に鬼と仏と私と

出雲市 岡 あきら

妻の吹く笛をひとりで聞いている

梅雨空の素直に明日を待つことに

横浜市 近藤 道子

輪が広くなって造反したくなる

ライバルに押され転がる現在地

横浜市 保田 絹子

スケジュール無事にこなしたあとの洞

行きずりの視線を浴びて待たされる

富田林市 池 森子

絵はがきの薔薇と草書の深い仲

ひまわりの狂言だった雨期の底

横浜市 鈴江 純子

届きそう夢へ爪先立ちをする

営業の顔に歯ざしり隠される

寝屋川市 江口 度

これは見事な糖尿ですと言う主治医

孫の爪きりと砂場が見えてくる

和歌山市 牛尾 緑良

満腹になり欲望を見失う

行列の先頭で待つ羅針盤

和歌山市 川上 大輪

悪友を乗せると狂いだす目盛

逆転を狙っています四コマ目

弘前市 斉藤 晶

母に似た雲が浮いてる水溜まり

みどり児の掌から芽吹いていく童話

弘前市 相馬 銀波

米櫃にヤマセの紙魚を垣間見る

こと酒になると馬脚の井の蛙

米子市 政岡日枝子

咎めれば私の嘘も罪となる

嘘を聞くとびに尖っていく耳よ

大阪市 板東 倫子

喜怒哀楽を経て淋しさが残るだけ

鳥取市 徳田ひろこ

梨の木を倒して父の顔でなし

雨やどりわたしの膝でよかつたら

弘前市 高瀬 霜石

句読点打つ潮時をとり逃がす

弘前市 高橋 岳水

もうちよつと足してみようか縄梯子

弘前市 一戸 ツネ

鬱の字が見えなくなった虫めがね

松原市 玉置 重人

二つ目の坂の向こうは晴かしら

岡山県 山本 玉恵

たくさん羊に眠り邪魔をされ

横浜市 芦田 鈴美

副作用ほどに薬がきくならば

和歌山県 村中 悦男

モナリザの微笑に貧乏ゆすりする

鳥取県 小西 雄々

崩れゆく花に介錯たのまれる

西宮市 牧淵富喜子

ポケットの数だけ嘘を用意する

吹田市 石原 靖巳

幸せの意味をわたしに聞かないで

池田市 栗田 久子

働かぬ手と手がテープカッターする

和歌山市 青枝 鉄治

ポトリポトリ後悔ばかりする蛇口

和歌山市 古久保和子

枯れてゆく私を飾るものがない

米子市 光井 玲子

富田林市 片岡智恵子

身の程を思うと負い目絡みつく

米子市 野坂 なみ

どの彩で今日の踊りを楽しもう

倉敷市 家守 政子

繕えばまだ持てそうな知恵袋

大和高田市 鍛原 千里

降りつつく雨に微罪がうずき出す

和歌山市 福井 桂香

あの日からさよならが降る雨の街

鳥取県 石谷美恵子

ロゼワインぐらいで本音吐けません

尼崎市 田辺 鹿太

少年の痛みがのこる風の歌

鳥取県 土橋 睦子

戦争を語る蛍が飛んでいる

大阪市 前 たもつ

青い果実へ群がっているヒト科

枚方市 海老池 洋

とは知らずわくわく開いた玉手箱

和歌山市 吉村さち子

甘い言葉に少し揺れたのも事実

高知県 桑名 孝雄

カジユアルな服に挑戦する無役

弘前市 櫻庭 順風

金の卵を産まねばならぬ鶏の性

大阪市 神夏磯典子

青い柿自分の味が分らない

鳥取市 武田 帆雀

みんな留守僕のお茶でも召し上がれ

西宮市 緒方美津子

入道雲立ちたいだろう父がいる

横浜市 田中 笑子

愚痴こぼす場所の灯が消えている

青森市 漆戸凡々子

修身の逆さ歩きが立志伝

尼崎市 長浜 澄子

サポテンと意気投合をして独り

奈良市 渡辺 富子

こつこつと闇魔に渡す銭を貯め

河内長野市 加島 由一

満天の星生きていてよかったね

愛媛県 中居 善信

切れそうで切れぬドラマの中にいる

羽曳野市 吉川 寿美

脱ぎ捨てた無冠の軽ろき帽子かな

倉吉市 淡路ゆり子

一言がこころに詰まる自己嫌悪

大阪市 三浦千津子

古里の川も疲れている痛み

美弥市 安平次弘道

濾過してもしても消えない傷がある

和歌山市 桜井 千秀

冷静なあなたは視野に入れてない

米子市 木村富美子

やすらぎは亡夫に一番近い席

愛知県 早川 盛夫

ぐつぐつと不満が煮える男鍋

岡山市 藤原 一平

妻の描く海が深く潜れない

鳥取県 田村きみ子

思い出を話すと赤い血が出そう

弘前市 福士 慕情

亡父影かなり似てきた僕の影

竹原市 正畑 半覚

青色は天のいのちに違いない

岡山県 小林 妻子

痩せ我慢のまま次の世へ行くだろう

尼崎市 春城 年代

こぼれ種約束をしたわけでない

三田市 北野 哲男

近すぎて大きな愛に気がつかぬ

茨木市 藤井 正雄

種蒔きが終わり湯舟に種一つ

出雲市 石倉美佐子

奴唄こは天下と思ひ込む

豊中市 田中 正坊

八十は開きなおっていい歳だ

鳥取県 岩崎みさ江

この壺を揺すると思慕の音がする

海南市 谷口 義男

匿名の投書ずばりと本音吐く

横浜市 川島 良子

感情論はなしが前へ進まない

尼崎市 春城武庫坊

名前より先に歳見る計報記事

唐津市 田口 虹汀

この世では会えない友の夢を見る

唐津市 仁部 四郎

六十五歳敬老会を待たされる

河内長野市 水谷 正子
数字には弱いがお金貯めてはる

米子市 小塩智加恵
子が居ても無くても老いが二人住む

香川県 松村 輝夫
俄か雨噂の半分流される

鳥取市 美田 旋風
約束は逃げ道できてからにする

大和郡山市 坊農 柳弘
手袋に五指がすっぽり入る幸

高槻市 乙倉 武史
意に叶う伴侶を選ぶむつかしさ

伊丹市 櫻谷 郁子
自分史へまた問いかける古い疵

和歌山市 上地登美代
進化して時どき騙す茄子の花

吹田市 山本希久子
別れたし別れたくなし風の駅

倉吉市 山中 康子
さしもの私も軋む風あたり

黒石市 相馬 一花
美しい鎖骨を誇るモデル群

吹田市 早川 棲世
胸薄い女性の多い本売場

寝屋川市 森 茜
網目から記憶ぼつぼつ抜け落ちる

西宮市 井上 松煙
ほどほどの暮らしの中に満たされる

鳥取市 近藤 秋星
生かされている身文句は言うまいぞ

大阪市 渡部さと美
べったんこで降る雨粒と知らなんだ

弘前市 岡本 花匠
ユニークな噂広がる竹の花

今治市 月原 宵明
お守りがいっぱい吊ってある事故車

香川県 木村あきら
出目金の視野は参百六拾度

海南市 三宅 保州
眼鏡持つともっともらしくなる

岡山市 藤原 一平
つまずいてばかりで前に進めない

松原市 小池しげお
有名になるかも知れぬさくらんぼ

松江市 津川 紫晃
非常ベル押す訓練はまだしない

今治市 越智 一水
一心二葉新茶の味ほめ菓子をほめ

四条畷市 吉岡 修
叩かれる度に覚えてゆく木魚

日立市 加藤 権悟
善人のあかし消しゴム真ん丸い

藤井寺市 中島 志洋
始めから計算された落とし穴

唐津市 宗 水笑
お荷物になってきましたよつこらしょ

富田林市 中井 アキ
削除キー押してしまった恋心

和歌山県 森下 順子
老いひとり風の便りを聞いている

倉吉市 松本よしえ
遅刻して最前列に席がある

奈良市 米田 恭昌
羽毛布団添い寝の母が居るような

寝屋川市 平松かすみ
こっそりとピンク着てみる試着室

岡山県 矢内寿恵子
切りすてたはずの尻尾がまだ動く

大阪府 澤田 和重
堅物のジョークが皆に受けている

横浜市 石原 三郎
気がつけば定年過ぎた両隣

八尾市 高橋 夕花
一歩から私の過去が始まりぬ

米子市 澤田 千春
地図にない雑木林で逢うトトロ

鳥取県 さえきやえ
花の名を聞かれて脳が動き出す

和歌山県 中後 清史
今までのように叱れぬ声変わわり

岸和田市 池田寿美子
どこまでも追いかけて行く満足感

京都市 都倉 求芽
銚子一本ここらが極楽出張所

和泉市 西岡 洛醉
一桁の昭和は過去を語らない

東大阪市 安水 春
じいちゃんのリズム狂わぬ支那の夜

鳥取県 林 露杖
死にたくもないが長生したくない

北

勝美

(故) 東野 大八

北勝美は三つちがいの兄さんだった。

軍隊でも三年経てば古兵殿で、神棚に収まり、威張っている大先輩だった。

若い頃から絵筆が好きで、よく年賀状に面白いスケッチを描き、こりやどうじゃあ」と笑っている。少々男前は落ちるが、いい男の軽口として、みんな戦友達から可愛がられた。

平成12年11月3日に九十歳で天国へ行ったのだが、生年月日は明治44年（一九一）5月22日生れで、橋高薫風さんより地力は上で爽やかな薫風子だった、とイバっていた。

若い頃から軍隊が長くて、ユツクリ川柳もやっておられなかったらしい。古い川雑を繰

つても彼の句はほとんど見当らない。軍隊もどうやら独立守備隊員で、北満の星を終夜飽きずに眺めて暮らしていた兵隊らしい。

落伍したみじめさの上飛んできたピンタ直立の姿勢のままで嘘をつき 勝美
などの句から、ひょうきんな勝美のとはけぶりとその軍隊生活からも読みとれる。

笛・太鼓森に残った敗戦記 勝美

万感に迫る涙はめめしいか 〃
奥歯噛みしめピンタ待つ日の懐しき 〃
などは彼の作句上の秀作の口らしいが、どこかマが抜けているところがこの人らしい。

「花の季節になると鼻の筋がムズムズする

のは、花粉アレルギーの仕業らしい。とにかく花のシーズンには、私にとつては大の鬼門であるのは、この花のイタズラからきているらしい。

花の季節が訪れるたびに、いつか暮らした中国のあの旅、あのコースだ。

麓からみた山容とちがつて、登ってみると思いもつかない平地あり、谷ありで時にはギョツとなつて足がすくんでしまつたりする。

軍隊の行軍は、楽なようでまことにシンドイのである。むかし、しゃれたバンガロー風の山荘を眺めて、これが蒋介石の持ち家だと聞かされたこともある。こういう家には、かならずブルがついていて、それも何千坪という広さには聞かされたこつちが仰天する。

第二次大戦に入つてそれらの家々は私たちの兵隊仲間と適当に処理してしまふが、夏期に入つて揚子江の「落葉の暑」の季節となると、私達は家族達を連れて「私たちの休暇」の季節となり、大喜びしてその準備に入る」以上は彼の「ある日ある時の想い出」の雑文（兵要地誌班発行のプリント随筆集）だが何を書いているのかよくわからないところが

ある。それもまた彼らしいところだろう。

「何ヶ月か日本軍の攻撃に耐えて抵抗した跡は、その山頂のどこにもなかった。

この山頂付近を取り巻くグリーンンの鋸の刃の様なものが嶺々にあったので、ここを通過する日本軍を敵はネライ射ちにしてたらしいが、その犠牲者の中に岡部隊長もある。

何ヶ月もどーん、どーんという砲声を耳にしていると、山頂での戦いの無益さと切なさを測々と感得することができる。この廬山の山容は忘れられるものではない」

何を訴え、何を描こうとしているのか、眼にする当方にはサッパリ判らない。それは軍隊という大きなトバリの中に閉ざされた軍隊方式を地ゆく手口かもしれないが、北はそれをうまく利用して各誌に手応えのない風景に仕上げていく。その巧みさはわれわれのような凡人には及びもつかないのである。

北勝美の正体は、以上の如きものである。

「透明な朝の涼気をふるわせて、クラシックの上手なドイツ人かイタリア人のピアノの練習音もひびいてくる」

などになると当方も支離滅裂で、その文法の

不可解さにウンザリしてしまうのである。

年賀状に書き散らす彼の奇妙な文体のナゾは一体どこにあるのか、そのうちスツキリさくってみることにしよう。

戦国無頼の徒に等しい一兵卒の感慨が、なべて勝美の掌の中では妖しく揺曳していくのだが、その人柄はさぐればさぐる程面白い。

「洋風化したとは言え、日本家屋には床の間が存在するし、ここにはシュールリアリズムの洋画とは似合わない。やはり昔ながらの書画の場が存在する」

また始まったーと彼の文体を眺めるしかてはないのである。

「山家に育ってきた子供の頃、ふすまや掛軸の南面にとり囲まれて育った私であるが、日本の山の姿にない峨々たる岩山と溪流を配した南面の世界は、掛軸にするための一つのもの作り」とみる他はなく、中国風の渡来の物マネで、ありもしない風景を描いているのだと思っていた。

昭和13年頃から敗戦まで中国で暮したが、南面の世界が作り出されたものでなく、実存する風景であったわけだ」

この辺になると、彼の頭もマトモに澄んできたものとみえ、ややわかりやすい。

とにかく北勝美の人柄のとりとめもなさはその官能によるものと判断できるが、とにかくわかりにくさの中の、わかりやすさが、この人物を仕上げているかのように思える。

わけのわからないことを沢山書いたが、軍隊の一兵卒としての人間性のわかりにくさが、いつかこういう方向づけになつてしまうものらしい。

北勝美の川柳を沢山載せたいと考える一方で、こんな風な彼をみると誰しも戸惑つてしまうのは致し方のない事かもしれない。

九十歳で彼が昇天した今、？つづきの彼の姿を見る想いで今もそれを書いている。

理詰めの句は、鑑賞していても面白くないが、彼のような雑文の仕上げ方も面白い。

むらさきの山少年は老い易し 大八
という私の句があるが、これは正直に言えば勝美流をデモなくなぞつたものとしておく。

筆者急逝のため、この欄は本号をもって終了します。

編集部

誹風柳多留二四篇研究 32

小栗 清 吾・粕谷 長生
橋本 秀 信・山田 昭夫
伊 吹 和 男・大野 秀二

清 博 美・佐 藤 要 人

250 あわれむべしす豊分にて雪にあい

251 いい男身の毛もよだつ文が来る

252 鍵ひねくってけんぎやうにじり寄り

小栗 検校が鍵をひねくりながらにじり寄るのは、貸し金返済を強要しているのだらう。この鍵が何の鍵かについては、九篇所載の同句につき八木先生が「何の鍵かちよつとはつきりしないが、鍵をたくさん持つて威圧しているようでもある。」としておられる。よくわからぬが、検校と言えば「蔵の鍵」か。

おそろしさしゆもくを持てはたる也

橋本 賛。検校の蔵については左のような例句がある。

けんぎやうの蔵へのこ切り捨てにげ 七二

ほへるぞとけんぎやう蔵をみせに遣り 一〇

けんぎやうハねかねる蔵をたてる也 二二

粕谷 礎のようなことか。

証文を取つて検校かきのぞき 安四信 3

清 蔵の鍵であらう。用心のため肌身離さず常に携帯しており、それをひねくりながらにじり寄るのである。八木氏の「鍵をたくさん持つて威圧」の表現には少々疑問。携帯しているのは二・三の鍵であり、威圧するため

小栗 素一分はなにしろ一分こつきりしか持つていないわけだから、揚げ代を払つてしまえば、すつからかん。そんなときに雪が降つてくれれば、これを口実に居続けをすることなど言うに及ばず、襦袢で帰ることすら出来ない。誠に憐れむべき状況に陥るのである。「憐れむべし」は漢籍などに出てくる常套語。で承ぶ降すと素豊分がこまつて居 二五
降てきいたに素一分ぞつとする 五三
橋本 賛。「可憐」はいろいろな意味に使われるが、主題句と同義には「可憐王孫泣二路隅」(杜甫「哀王孫」)などがある。清・佐藤 賛

小栗 ここで「いい男」は、吉原でもてている(と思つている)男であらう。「いい男」とやに下がっていると、突然、身の毛もよだつような無心の文が届くのである。「身の毛もよだつ」は、ぞつとすること。例句から見て、特に狐が化かすときに関係ありそうな気もするが、よくわからず。
化す文身の毛もよだつやうに書キ 七二
古狐身の毛もよだつ文を書キ 七三
橋本 賛。後半の部分「身の毛もよだつ」は、一般的な成句で、特に狐とは関係なさそう。例句は狐↓けもの縁語として使つてゐるだけと思つ。
清・佐藤 賛

の小道具ではない。

佐藤 同右。

253 中将覺えて居るが相手なし

小栗 「中将」は、古将棋の一種「中将棋」のことである。古将棋には、小將棋、中將棋、大將棋、大々將棋、摩訶大々將棋、泰將棋があつたとされる（『川柳江戸の遊び』柏谷宏紀「將棋」）。小將棋が縦横各九目、駒数四六枚、大將棋が縦横各一五目、駒数一三〇枚であつたのに対し、中將棋は縦横各一二目、駒数九二枚である。古くは大將棋が行われていたが、室町時代には中將棋が盛んとなり、やがて戦国時代を経て小將棋にとつて代わられたのである。江戸時代には小將棋が全盛で、中將棋は一部の好事家の間で伝えられてゐるのに過ぎないものとなつたため、覚えても相手がなくて対局ができない、というのが主題句の意味である。

柏谷 中將棋については、『世界大百科事典』に「中將棋は江戸時代の初期まで最も遊ばれ、第2次世界大戦前まで愛好家によつて細々と遊び継がれた将棋である。云々」とある。

清・佐藤 賛。

254 そろばんを出して三度目止メにする

小栗 川柳で「三度目」はいろいろあるが、ここでは吉原の「三合目」のこととしておく。初会、裏、と夢中で通つたが、さて三合目となると祝儀に多額の出費となる。それだけ支払つてどれだけのことがしてもらへるかと思へると、どうも出費に見合いそうもない。算盤ずくで考へて三合目はやめにするといふのである。色街遊びは、費用対効果で計ればこんなばかばかしいものはない。

三度目で御座ると通り手くし上ヶ

安四礼3

橋本 賛。賢明？な男。

清・佐藤 賛。

255 鬼子母神などを賣ルのハやすいやつ

小栗 「売る」はかこつけること。同じかこつけの悪所通いでも、鬼子母神を売つて音羽の岡場所へ行くようなやつは取るに足らぬつまらないやつだといふのである。もちろん、浅草観音を売つて吉原へ行くのがあるべき姿だといふわけ。

音羽のこぢよく風車取てにげ

風車わるく廻ると泊りがけ

二〇一〇

五五12

清・佐藤 賛。

256 雪ことばそバにまじく敵役く

小栗 誉め言葉Ⅱ近世、歌舞伎で上演中に、見物人が席から立ち上がつて役者をほめることばを述べる（中略）特に歌舞伎では儀式化されて、見物人の代表（多く芸者や仲間）が花道に並び芝居掛りのことばで役者をほめた。（『日国』）

主題句は、芝居を中断して主役の人気役者に誉め言葉が述べられている間、その側で敵役の役者が所在なくじつと待つていふという光景。

ゆうれいもきへかねているほめ言葉

四五36

ほめことばやく者ひやくもて居ル

寛元桜1

橋本 賛。「顔見せ、二の替りなどに、狂言半二て見物の中より眞眞の役者をよびかけ、棧敷状へ挨拶の言葉終りて、花やかなる文句をつらぬるなり。是によつて役者は礼をのべ、次の狂言にかかる」（『考証江戸歌舞伎』）

柏谷 今もあるのでしょうか。

伊吹 賛。現代では見たことがありません。

清・佐藤 賛。

荀香のむ

西出楓楽選

こつこつと言葉の貯金しています
エネルギー不足だ欲に欠けている
成り行きで歳の自慢もしてしまう
玄関でロボット犬がごあいさつ

古日記小さな風の跡がある

不協和音小さな溝が川になる

花咲いて人に優しい道になる

かぐや姫のその後たずねるEメール

しやらしやらと造花の色の虚言癖

七色の音符 紫陽花から零れ

二度寝してハッピーエンドの夢にする

プラス思考コンマ以下など気にしない

鍋やかん光らせている梅雨渦中

花のいのちと私の命だぶらせる

紫陽花の青を溶かして書く手紙

日めくりの速度が日毎速くなる

美しい爪まで売っている時世

まだ話ありそう紅茶入れましょう

謝られかえって腹が立つてくる

大阪市 神夏磯典子

箕面市 出口セツ子

和歌山市 桜井 千秀

交野市 山川日出子

岡山県 福原 悦子

島根県 伊藤 寿美

川崎市 小林久美子

和歌山市 福井 桂香

弘前市 一戸 ツネ

和歌山市 榎原 公子

和歌山市 古久保和子

尼崎市 長浜 澄子

西宮市 牧渕富喜子

八尾市 高橋 夕花

和歌山市 木本 朱夏

米子市 足立由美子

西宮市 西口いわゑ

藤井寺市 鴨谷瑠美子

大和高田市 鍛原 千里

一斉に電話掛けてる旅の主婦
学ぶ事両手に余り黄昏れる

一年の息災祝い梅を漬け

組の鯉だいつでも跳ねてやる

ひとり旅 思い出ばかり抱きしめて

ブライドは指環を嵌めぬ指である

わたくしの弱さをライバルと見なす

再会を待ちわびている花時計

発つまでを楽しんでいる旅支度

影武者がほしい私の台所

子育ての遠い日思う五月晴

花の季が終り友情持ち歩く

花鍬 花の主張は聞き入れず

結んで開いてひらいた時にさつと逃げ

遠い日がそのまま駆けて来る花野

どれほどの余生か花に水をやる

人生の余白ゆっくり流れよう

方向音痴おまけにバスに酔う始末

ささやかな幸せがある冷蔵庫

真に受けた話で転びそうになる

疲れたか梅雨も一服する晴れ間

悪置いてきたよな顔で風呂を出る

カーテンを簾に替える夏の陣

家族史をなぞる末子の披露宴

不器用を教えたように受け継いだ

掃除機でやぶ蚊吸い込む梅雨晴れ間

横浜市 秋元 和可

倉吉市 淡路ゆり子

横浜 三村八重子

高知市 小川てるみ

岡山県 山本 玉恵

寝屋川市 岸野あやめ

富田林市 池 森子

倉敷市 家守 政子

鳥取市 岸本 孝子

寝屋川市 平松かすみ

東大阪市 安永 春

藤井寺市 太田扶美代

堺市 宮本かりん

八尾市 宮崎シマ子

大阪市 三浦千津子

鳥取市 録沢 風花

富田林市 前田 登子

藤井寺市 高田美代子

吹田市 山本希久子

弘前市 宮崎ヒサ子

倉吉市 野口 節子

米子市 政岡日枝子

愛媛県 黒田 茂代

東京都 播本 充子

倉吉市 山中 康子

横浜市 清水 潮華

現実の壁が壊した夢ひとつ

鳳仙花ためらい傷は残さない

夏帽子 今日には淑女で居ましようか

しおれてきた私に砂糖振り掛ける

山小屋で心のみそぎして帰る

螺子を巻き直して明日を疑わぬ

助手席でうるさい妻になり平和

土の手でくれる野菜にある旨み

鍵二つ緊張解けてよく眠り

とうもろこし窮屈そうに自己主張

愛用のキヤラの香りと旅に出る

たしなみと思えるほどの紅の色

子とふたり生きるおいしい飯を炊く

さびしくて高い敷居を低くする

さばを読む歳をカメラに見抜かれる

風鈴は去年の音を呼び戻す

特売へ行く念入りの一張羅

不器用な踊りでこけてばかりいる

そつけない言葉の裏にある情け

フーリングズれたふたりへ雨しとど

繕ってみても心がまだうずく

日の丸がだんだん点になっていく

人当たりいいけど嘘が多過ぎる

水無月の旅は菖蒲もあじさいも

梅らっきよう漬けてまだまだ主婦でいる

すり傷も即座に癒えた母の唾

八尾市 村上ミツ子

富田林市 中井 アキ

出雲市 石倉美佐子

堺市 山本 半銭

鳥取県 さえきやえ

和歌山市 西山 幸

米子市 白根 ふみ

三田市 久保田千代

横浜市 山梨 雅子

西宮市 奥田みつ子

東大阪市 笠井 欣子

寝屋川市 森 茜

鳥取県 西原 艶子

富田林市 藤田 泰子

米子市 驚見 正子

鳥取市 福田 登美

大阪市 津守 柳伸

米子市 青戸 田鶴

今治市 塩路よしみ

奈良県 渡辺 富子

鳥取県 小谷 孝美

横浜市 伊藤 ふみ

和歌山市 田中 みね

大阪市 板東 倫子

横浜市 保田 絹子

大阪府 米澤 淑子

螢火のほのかな明り君想う

別れどき摸索している夕茜

桜よりはかない恋よ沙羅双樹

政治へのアンテナ高く建て替える

糠床を姑が譲らぬ訳がある

つながれた首輪で自由探してる

青春の種は沢山まいておく

独り暮らし些細なことに気を遣う

たっぷりの湯にストレスがあふれ出し

世を憂う百合も菖蒲もあじさいも

薄着して倍は動ける今日の風

愛妻弁当もつともらしく食べている

屈まねば通れぬ道はまだ続き

生駒市 飛永ふりこ

横浜市 鈴江 純子

羽曳野市 西村りつえ

富田林市 片岡智恵子

和歌山市 福本 英子

横浜市 近藤 道子

芦屋市 黒田 能子

八尾市 高杉 千歩

横浜市 芦田 鈴美

寝屋川市 太田とし子

寝屋川市 堀江 光子

倉吉市 米田 幸子

鳥取市 植田 一京

典子さんの句―日常生活で、言葉の持つ重要性は言うまでもない。

ことに日本語には魂が宿る（言霊）と信じられている。いい言葉の貯金が多ければ多いほど、豊かに生きてゆけるに違いない。セツ子さんの句―どんなにきれいなことを言っても、人を動かすエネルギー源は、財・色・飲食・名譽・睡眠の五欲であろう。時にはベールを被せられる五欲だが、こんなにはつきり肯定されると小気味よい。千秀さんの句―歳を自慢するのは「お若く見えます」という返事を期待してではないと思う。「こう見えても私はもう〇歳なのですよ」と、相手を励ましていくシーンだろう。元氣印の作者にエールを送りたい。日出子さんの句―近未来の家庭のありようを見せられた。この飼い主はロボットに介護されているのだろうか。

この欄は一年交替のため、九月号（七月投句分）から宮西弥生選となります。

秀句鑑賞

同人吟 岩佐 ダン吉

17月号から

拭いて磨いて明日の見える窓にする

吉村 さち子

長く友人と思つていても苛立ちや落胆を覚えることも。でも自分の心の窓の曇りに気付いた作者は「拭いて磨いて」……良くしてもらつたこと、励まされた日々を、「明日の見える窓」にする、そんな友人も、自分を見つめ直す作者も素晴らしい。学びたい句・人生。

ふっ切つて前だけ見よと風やさし

門谷 たず子

悩みも迷いもある人生、自分への執着にも苦しんでいたある日「ふっ切つて前だけ見よ」と囁いてくれた風。風を感じることでできたのは、きつと作者の度量の大きな心だろう。そして「風やさし」と言える素直な心にも、人間の持つ希望や強さを感じる清々しい句にうれしくなった。

功労賞たとあげたい母の鑑

長谷川 春蘭

勲章などに縁のない母だが、ふと深い皺を見るとそのひとつひとつに思い出がある。皺の数だけ「功労賞たとあげたい」――作者の思い。私も父の戦死後、働きづめの母を見て「いつ寝てるんだろう」と考えたことも。

「功労賞」に母はきつと「冗談はやめなさい」と台所に立つ……そんな想像もうれしい。

新じゃがは肉の家に成るはせぬ

嵯峨根 保子

参りました。新じゃがさんの心意気。

六月頃から出はじめる新じゃがは、肉が薄くきめ細やかで湯がいてバターや塩でいただくとはこほこ、正に一品独立派の貫禄あり。

でも、えくぼもある愛らしい姿に秘めた

「肉の家に成るはせぬ」の思いに拍手。

女性作家の繊細な観察眼と古風な言いまわしにクスリとさせられる骨太な作品。焼酎党の私も今夜、お手合わせ願おうかな。

人の子も育てる牛よありがとう

光井 玲子

楽しい句。口をもぐもぐ、のっそりの牛

が「人の子も育てる」と作者はあつたかい。

言われるとあの大きな目が、慈愛に満ちているように見えるのが不思議だ。そんな牛さんに素直に「ありがとう」と言う、きつと皆にも優しい人なんだろう。さて比べて「万物の霊長」とうそぶく人間は「わが子」で精いっぱいのご時世、少し牛さんに学ばねば。

人類は居るのだろうか万年後

三宅 保州

核兵器の存在もさることながら、飢餓や環境……「人類は居るのだろうか」と鋭い目。でも「万年後」どころか地球白書は「二千三十年に八十九億人と推定される世界人口を食糧生産は支えきれない」と。雑草の繁茂する減反地が無策の農政を嘆く。警鐘の句とも。

耳をすまして韓中国の声聞こう

春城 武庫坊

あの侵略戦争を美化する歴史教科書には近隣諸国からも批判が。「内政干渉」の反論には「日本の近代史の歪曲は韓国と中国の近代史の歪曲を意味する」(東亜日報)。「耳をすまして聞こう」——従軍経験のある作者の歴史の真実への深い確かな思いをみた。ホームレス カパン大事に持ち歩き

前 たち

「大事に持ち」歩く鞆には何が入っているのだろう。長引く不況でリストラ、倒産：全国で三万ともいわれるホームレス。かつては企業の戦士であり家族の大切な一員、「いつか職にもどりたい」鞆は、そんなやり直しの人生を夢みる男の心意気か、過去への執着か。ホームレスに寄せる作者の目はぬくい。

不況とおもえぬような「ミ」の山

阿部 進

電気製品から未だ使えそうな家財まで「不況とは思えぬような」ゴミ集荷場のさま。リストラ・失業でおびやかされる雇用、ユニクロや百円ショップの賑わいはやっぱり不況。

でも「ゴミの山」には等身大のくらしで生活防衛を図っていつかという庶民の思いがあるのかも。作者の溜息もかすかに聞こえる。

阿呆やなあとつくづく思う時がある

高田 美代子

義侠心かお節介か、また口や手を出して貧乏くじを、「阿呆やなあとつくづく思う時がある」作者の嘆き。でも阿呆な自分がきつと好きなんだ、それでいい。周囲にもそんな作者を愛する人でいっぱい。平易な言葉で「人間ってこんなもんだよ」相槌を打つ楽しい句。

身ひとつの置き場にものが多すぎる

高杉 千歩

衣類から生活雑貨：いつの間にこんなに増えたのか、「身ひとつの置き場」の人生に。シンブルに生きたい作者と現実がユーモラスに対比されている。限りある人生と宇宙の点である自分と思えば、必要な物は何だろうか。「もの」に囲まれた「豊かさ」を誇る社会・人間って身の程を知らぬ生物なのか。

がんばってみんなが同じ事を言う

奥山 美智子

闘病中、見舞いの友人が決まって言う「がんばって」に作者の吐息。誰かひとりぐらい「ごくろうや」つたねえ、ゆつくり養生しいや」の言葉が欲しい。がんばってだけが労り、激励ではない。まして「みんなが同じ事を言う」には、マラソンを走る私も同感、30キロ過ぎの「がんばれば」は辛い。他の言葉は…。

スイッチオン今日も誰かが殺される

福井 桂香

逆巻く怒涛をバックに男が倒れる。サスペンス劇場の「スイッチオン今日も誰かが」殺され定番のストーリー。愛憎や金銭のもつれなど話は展開するが、少し殺人が安直すぎないかと作者の思い。ひとりも殺されないドラマってないだろうか。どうせ死ぬ人間だから。

死ぬ時は一人矢印などいらぬ

安平次 弘道

家族のためやくらしのため、自分の心もあつたらうが、いつも安全第一と言われる矢印の道を歩いてきた。でも「死ぬ時は一人」何も思い悩むことはない。自分の信じる道をまっすぐに歩いていこう、もう「矢印などいらぬ」。死を人生の中に思い浮かべた時に作者は新しく生きる。志高い道を歩き始める。

数字には出ないあなたのいいところ

加島 由一

思いやりか、優しさか：人間の「いいところ」を計る物差って何だろう。「数字に出ない」もつと奥のところで「あなた」を見ている作者はすごい。あなたも幸せもんだ。非行をくり返す子を嘆く母親に「息子さんのいいところを三つ教えてください」と教師。話す母親の目が優しくなったとも聞いた。

墓

岩切康子選



遺骨なき墓標平和を語り継ぐ
瓶棺の中で妹水になり
故郷の海が夫のお墓です
名ばかりの墓に一掬の血が眠る
八十路まで生きて墓無い我が人生
朱を入れた墓に安堵の八十路坂
逆恨みして墓穴掘る古狸
ご無沙汰の墓にやつぱり願いごと
墓掃除待つてたように草が生え
いい時に死んでましたと墓の私語
墓洗う子供に背中見せながら
宿題の家紋調べに墓参り
墓寄せのお知らせ市報に出ています
孫達の涙も埋めた犬の墓
墓参り庭の小花を供えます
墓の背に生きた証の句を刻む
よく穢さよく散じきて派手な墓
過去総て丸く納めた墓の守り
予定には無いが立ち寄る母の墓
こだわりのひとつを墓に告げて来る
除籍簿の糸をほどいて墓の事
国道のバイパス墓を走らせる

俊路 高明 ミツ子 政良 利武 凡々子 一花 照子 典子 慕子 慕情 泰竜 四郎 宵草 こずえ ツネ 棲世 登美 たえ 檳榔樹 志重 照彦

立派な墓あわてて入る馬鹿も無い (松) 輝夫
傾いた墓は何かを言いたげに
墓は留守亡妻は外出好きだから
香よりも煙草燻べてあるお墓
墓建てる日を待っている白い壺
赴任地へ根付くつもりのお墓を買う
IT化進みお墓もビルの中
墓浄め先祖と会話させる盆
まだ死なぬつもりローンで墓を買う
すれ違う会釈に墓地のぬくい風
手続きをしないと墓に入れない
経をあげ区劃整理の墓処
別姓だけ墓はひとつにするつもり
供物置く事を禁じた彼岸墓地
新築の寺お堂の地下に墓がある
佳
霊園でクルスと南無が同居して
墓地造成寺の持ち山消えて行く
官軍墓地敵も味方もない浄土
人徳が偲ばれる墓花絶えず
散骨もいがお墓が眠れそう
人
骨粗鬆墓は小さい方でよい
散り散りの家族を墓が呼び集め
天
墓碑銘が語る生きざま胸をうつ
道拡張移転の墓に運不運
軸
清水 英旺
大輪 時弘 和枝 鉄治 清也 玄山 尚士 よしみ さち子 実 弘一 伊津志 東雲
さだを 喜子 俊子 凡々子 智加恵 勝巳 満秋

ドラマ

石倉美佐子選



古ばけた夏の帽子に見るドラマ
花嫁は私ドラマの主人公
ドラマにもされずに散った若核
夫婦劇妻に主役を奪われる
分れ道そこからドラマ音を変え
劇的な出会いが好きで創る神
千秋楽にドラマがあつた五月場所
妻以外主演女優がないドラマ
背景が変わるとドラマ変り出す
過去現在バックミラーにあるドラマ
サスペンスチャンネル権は放さない
百歳の人生ドラマ悔いが無し
終着の見えぬドラマに祈る幸
月見草昨夜のドラマまだ続く
赤い糸強さ確かめ幕開ける
自作自演喝采のないドラマです
数々のドラマ子育で奮闘記
腹の虫おさまるまでの無言劇
失恋をドラマチックに言うおんな
終焉のシナリオはつばつ目に浮かぶ
脇役のAに徹して生きている
山動くドラマの後に固唾のむ

春雄 玲子 喬水 孝雄 紫見 隆盛 (大) 純子 弘一 徹子 勝巳 凡子 絹子 (保) 純子 (鈴) 純子 悦男 あずき 笑子 充子 浜丘 尚士 勝視

一寸先どんなでん返し待つドラマ
ドラマより今のわたしがおもしろい
定年後主役は妻と書き替える
紅唇のひとり芝居に魅せられる
入道雲 今日ドラマは羅生門
ロングランのドラマだったな金婚譜

典子
扶美代
今日子
時弘
花匠

南北のドラマ三十八度線
それぞれの指にドラマの役どころ
そつと見守る舞い降りたコウノトリ
大会に出てからドラマが始まった
シャボン玉飛んでドラマが一つ浮く
雪解けの水が阿修羅となるドラマ
紅ばらのドラマ見ている落椿
悠久のドラマ卑弥呼の謎を解く

ちかし
大輪
順風
圭一郎
愛論
善信
慕情
俊子
鐘造

佳
幸せはドラマにならぬような日
九十九折女のドラマ険し過ぎ
人生もドラマも佳境第二章
よく聞けば悲しいドラマ秘め
地平線 男のドラマ眠らせる

満秋
多賀子
寿美
雄々
しげお

人
功罪を迷彩色にするドラマ
地
鱗一枚捨てたわたくしのドラマ
天
百の窓百のドラマの影が舞う
軸
泣いて笑ってドラマの私見しています

清史
日枝子
高橋
岳水

街

内海幸生選



老人の街で派手目のシャツを買う
朝刊の足走り出す街平和
恋びとがうまれた街は蟹気楼
ドーナツになった街から灯が消える
寝に帰るだけの街だが籍を置き
資源のない国に過ぎたる街明かり
バブル期は不夜城だったネオン街
金魚売りもロバのバン屋も来ない街
私が泳げるあたたい街だ
悲話を持つ地蔵が街の隅にいる
酸欠の街でケイタイ鳴りつづけ
地下街の鉢の木月を見たからに
地下街の女性に不要の美白剤
街ぐるみ踊った街を忘れへん
温泉街少し離れた宿にいる
公衆デンワ僕の街からまた消える
ホテル街意外な二人肩を寄せ
自転車で行けば違う街が見え
自販機が無くな街をつくりだす
何事もなかったように暮れる街
淋しくてさまよう街のなほ淋し
豊かさの街の隅にホームレス

充久
章久
一花
棲世
像山
柳弘
保州
重人
シマ子
道子
哲男
東吉
一風
玄也
英子
志洋
彰雄
鉄治
ますみ
朝子
洞庵

無記名の顔で泳げる街に出る
たまに出る街はいつでも工事中
開閉店日替りメニューの如くあり
いつまでも街に馴染めぬ国訛り
一歩出れば街は他人の顔をする
まだ下が居そうな街へ腰を据え
あこがれて来た大阪の黒い雨
村おこし策街の広告社に頼む
菌こぼれが進むがたしものこの街も
この街の明るさが好き人が好き
地下街に方向音痴押し出され
公園に子供のない街砂漠
横顔に他人と書いた町に棲む
雑踏の中を歩いて人恋し
喧噪の街で孤独死聞いている
佳
街の地図ビルの高さは書いてない
逢えぬ日の街は素早く暮れていく
花好きのばあさんがいる街の角
場違いなお遍路街の風と逢う
酸欠の街だがタンポポ根付いてる
人
この街が好きで壊れた棟に住む
街角の手配写真は色あせて
天
背の高い順に墨絵の街が明け
軸
川上 大輪

四郎
タミ
幸夫
寿美
たもつ
満秋
しげお
弘一
霜石
扶美代
絹子
松煙
雄々
由一
あずき
伊津志
度
愛論
千里
時弘
英旺

初歩教室

題 一 困る

吐田公 一

初歩教室は三句の投句が前提となつてゐるが、三句の投句に三句だけを作つて終いといふのは勉強にならない。川柳をなさる方はどなたでもそうであるが、三句に對して六十一句を作るのが常識とされている。

そこで多く作つた句のそれぞれの内容を比較し、その着想を相互に組合わせてみて、また新しい句に仕上げる、これを私は仮に合成法と呼んでいるが、これまでのご投句の中でこのようにして推敲し、ご披露申し上げたこともあるが、意外に効果の上がることもある。次回に例示して解説する。

添削句

○芥を燃す悪臭我が家に南風

三郎

○芥を出す出し方読まぬ若い者

三郎

三句のうち二句を芥で詠むのは着想が乏しい。世相を訴えるように詠むなら

▽ゴミ不法投棄豊島の繰り返し

○妻旅行されど困らず独宴会

清

下五の表現に難。上八だが句意を汲むと、
▽单身赴任で馴れて困らぬ妻の留守

○注釈も時勢で変わる解釈も

三喜夫

注釈解釈など類似語を並べるより

▽政治家が読めば九条コロコロと

○低金利困る困ると旅が好き

賢治

内容に訴求力がない。中八だが

▽低金利老後の設計狂い出し

○飼主も注意して散歩道

謙次

説明句といえる。折角いい句を作るように

なられたのに。頑張つて下さい。

▽飼い主のマナー問われる散歩道

○老夫婦長寿の母に困り顔

好勝

▽老夫婦長寿の母を持て余し

○一つしか無い地球でよく汚す

輝夫

無駄な表現。一つしか無い地球、通常の社

会表現ではこれもいいが、省略の文学である

川柳では冗句は省くこと。句意は異なるが、

▽大国の勝手で大気汚染され

てる代

○困つたな陽気な友いる通夜の席

上下を入れ替えてみると

▽通夜の席陽気な友に困らされ

栄翁

○頼まれて困ると老いは嬉しそう

「老いは」は冗長では—

▽頼まれて困る困ると嬉しそう

○困るふり男心を誘つてゐる (俳) 洋子

原句もいと思ふが、上六になるが

▽男心誘う手管の困る振り

○孫が今親に反抗困らして

綾乃

説明句に近い。今様に詠むとすれば

▽反抗の十七歳が手に余る

○困るのよデフレで目べりする貯金 さだを

理屈では、デフレは物価が下落するので、

目減りとは反対現象。

▽老い先へ低利で目減りする貯金

○煙草止めそれから知恵が鈍り出し 恒雄

原句では煙草を止めてからずつとの意にと

れる。思考力の鈍りは一週間ほど

▽ニコチンが切れると思考力鈍り

文江

○里帰り抱きぐせついて困ります

表現の順序を入れ替えてみると

▽抱き癖がついて困つた里帰り

○駄々こねて新米ママの半泣きに

ゆきの

新米以下の表現が不味い

▽駄々こねる児に困つてゐる若い母

栄子

○毎日をなんでなんに責められる

下五の語意を変えてみると

▽次々と孫のなんに答えかね

和香

○人生の困つた道も通り過ぎ

添削句はやや固いかも知れないが

▽難題も切り抜けてきた人生譜

○茶の間にラブシーン困り顔の親 宏子
見付けはいい。困り顔の親で説明句にして
しまったよう

▽ラブシーン茶の間直撃するテレビ

○急用に電波届かぬ場所にいる みはる

○相手を読み込んだ方がいいと思う。

▽急用へ電波届かぬ子の所在

○ブルサーマル尻尾が犬を振り回し つよし

▽間接表現であることは分るが

○ブルサーマル田舎と都会の意見ずれ

○採血に血管見えぬと言われても 妙子

○説明句。採血の見付けはいい

▽採血に新米ナース二度三度

○困っても席を詰めてと言えぬ世に 比佐子

○よくある情景を詠んでみては

▽優先席眠るふりする若い人

○ラブレター困る私は人妻よ 孝美

○困るを詠み込んで説明句に陥った

▽人妻の私にくれたラブレター

○目のやり場困ってちらと盗み見る 英旺

○川柳にも句品(句の品格)が問われる。添

削句ぐらいなら許される範囲では

▽チューしてる場へばつたりと目のやり場

○余りにも期待かけすぎ困られる 更紗

▽期待かけられて重たいランドセル

○親の世話困らせた子が思かえす 孝明
ご投句の三句共同想句の多い句だった。同
想句のままで添削すると

▽困らせた子が一番の親しい

○アンコール困るよ電車に乗り遅れ 勝久

○説明句。表現の違いで

▽アンコール時間が迫る終電車

○年金の暮らしに欲しい窓明り 照彦

○言わんとするところは分る気がするが

▽年金の暮らしへ銭のいる話

○えらい事起き小学校の困る門 敏子

○小学校のいたましい事件を詠んだ時事吟だ

が、上七を大事件とすれば五音字に

▽学校の門閉じさせる大事件

○相席に睡眠時間削られる ふみ

○相席ではなくて同宿では?

▽同宿のいびきで始終目が覚める たえ

○騒ぐだけ騒いだ父が酔いつぶれ

てにをを添削

▽騒ぐだけ騒いで父は酔いつぶれ

○困つたらジャンケンで決めケセラセラ (木美代子)

下五を上へもつてきて、

▽ケ・セラセラ困る話は聞き流し よしこ

○参観日親のおしゃべり困りもの

中七を上五と中四に分けて、

▽親達のおしゃべり困る参観日

○困らせる孫だが個性強そうだ 円女
中七の表現が弱い。自己中(じこちゅう)中心

▽自己中の孫が出世する素質

○長電話愚痴を聞かされ芋こげる 菜月

下五の表現に一考を

▽煮炊きものしてる最中の長電話

佳句

○三輪車キヤッチボールに追い出され (山雅子)

ホルインワン嬉しいが保険切れ 裕峰

ゴミ漁るクラス対策悩む都民 四三郎

先生も親も手を焼く反抗期 たえ

約束の駅の出口が二つある 章司

安いから買って毎回膳に乗り 鈴美

厳肅な席で空腹音を出し 侑子

困つたら困つた顔になる弱さ (鳥玲子)

世渡りが下手で困ると妻の愚痴 (三美恵子)

困つた顔を見たことのない石地蔵 半覚

俄雨デパート困らす白い靴 喜代子

困るほど財産無いとよく眠る 智加恵

(全く同感)

飛び乗ればわが町通過する電車 サト子

(ユーモアのある句)

万策が尽きて頼杖ついている 彰雄

(川柳らしい)

私句

十七というと特異な目で見られ

—水煙抄

秀句鑑賞

—7月号から

瀬戸 まさよ

母が手を振っているから振り向かぬ

藤田 芳郎

年老いた母である。年と共に弱っていく母を見るのは子として辛い。次に会うときはひよっとして—という不安がよぎる。打ち消したものの、切ない思いは反って反対の行動になってしまふやりにきれなさ。こころはあつさり古川柳でふつくるより仕方がない。

いつまでもあると思うな親と金

この空を飛ぶケイタイの無駄話

軸丸 勝巳

爆発的な加速度で増え続けているケイタイ。歩いてみると、突然の人声にギョッとさせられるときは、ケイタイで喋っている人が傍を通るときだ。「車内では使用されないようご協力を!」の放送も無視してメールを打ち続ける若者たち。眉をひそめるのは高齢者。空を飛ぶ発想と無駄話との対比が面白い。

地図にない街へ行きたい青春譜

星野 きらり

勿論、ひとり旅である。癒しの旅か、青春を謳歌する旅か。地図にない街は無限の想像力をかき立てる。思い出したのは左記の句。

一歩出すれば吾れ旅人となる心 西尾 葉

メルヘンの味付けしたい子の会話

大昇 隆広

子供たちの言葉を集大成して最初に世界へ発信したのは、ロシアの作家コルネイ・チェコスキーである。これを真似て朝日新聞が金曜版に「あのね」を連載している。幼い子たちが親に語りかける珠玉のつぶやきが可愛くて、なる程と頷かせる言葉で心を豊かにしてくれる。子供の話に耳を傾ける作者のお人柄が偲ばれる句である。

メモを張り輪ゴムも掛けた冷蔵庫

吉田 比佐子

主婦の忙しさが端的に表現されている。あれも、これも、あつ、もうこんな時間!

職人の釘が妥協を許さない

加藤 権悟

六月に上映された「みんなのいえ」に出てくる田中邦衛扮する大工さんを思い出した。責任とプライドと情熱をもった職人さん、仕事で機械に代わられても職人氣質は変わらない。

文庫本バッグにいつも住んでいる

鳥羽 玲子

車内でも人待つときでもバッグから文庫本を出して読む私。時間を活用している現代人。バッグに収まる手頃なサイズと軽さが気に入って文庫本をバッグに住まわせることにしたのよ。口紅や鍵、財布とも仲良くね。

スイッチを入ると部屋が笑い出す

小川 てるみ

玄関の鍵を開け部屋に入ったとたん、荷物もバッグも放り出してテレビのスイッチを入れる。忽ちテレビからの笑い声。ほっとした解放感、暫らくはテレビを観ながら休憩だ。部屋が笑い出すという表現に惹かれる。

各停の駅新緑と握手する

飛永 ふりこ

新緑の中を走るローカル線の電車。客もまばら。無人駅にも止まる。この駅にはこんな木が、こんな花が、心安らぐひととき。新緑と握手に新しい発見を感じた。

ポックリへ羨むように悔やんでる

荻野 像山

高齢になればなるほど周りの人に迷惑をかけたくない、自分も長患いしたくない、ポツクリと逝くことを願う。さりとて余りにも淋しくやるせない心境。ああ一人間とは。

海ゆかば

西山 幸

平成十年十月四日、熱い梅りと涙の中で、父の骨を海に帰した。父が永眠して二十年の歳月が経っていた。海の男として生き抜いた父なので海へ葬ることに迷いはなく、長い間の念願をやっと果たし終えたという安堵で、

海ゆかは

みずく屍

山ゆかは

草むす屍……………をうたい続けた。

私が小学校（国民学校）一年生、六歳下の妹が誕生して九日目の昭和十六年十二月二十八日に父は応召した。当時は何も知らず、部隊の名前など聞いても覚えてはいないが海軍だった。

兵隊さんと言えば子供の私には凜々しく見えたものだ。名譽の出征として日の丸の旗を振って送り出したこと、病弱だった母が出産

後の寢床の中で泣いていたことなどを、かすかに思い出す。

勝利を信じて止まなかった銃後の私達は、ひもじさに耐えて、「もんぺ」に「防空頭巾」で登校し、食糧増産のため、芋、南瓜等を作り、竹槍の稽古に励んだ。空襲、警戒警報のサイレンが鳴ると、防空壕に逃げ込む毎日だったから勉強など出来るはずはなかった。

戦況いよいよ激しく、明日は外地へ赴くという父からの手紙は遺書だった。もう生きて逢えないであろうと書かれた父としての死への決意であった。幾度も母に読んでもらっては父を呼んだ。懐かしい父が生きて帰ってくることはもう望めない遠い夢なのか、と思うにはまだ余りにも幼い私だった。

そして、戦争は敗けて終わった。周囲の誰も彼もが痩せて食べる物を手に入れることにのみ一所懸命だった。田舎に疎開してあった母の着物は、わずかばかりのお米に変わって消え失せた。

やがて復員、引揚げが始まった。父の消息は何の手掛かりもなく、やはり諦めるしかないのかと思いながら、それでも待つて待ち続けた。

最後の引揚船で父はソロモン群島から帰国した。これが父とは信じられない程面変わり

していた。乗船の前日まで大切に隠し持っていたロンジンの懐中時計は、ソロモンの地中に埋めてきたという。持ち帰ったものは、よれよれのリュックの中によれよれの毛布一枚と、肌身離さず持っていた恩賜の煙草一本だけだった。

部隊の皆な食糧がなく、蛇や蜥蜴、ねずみ、ナメケモノ、野草や木の根、皮などで飢えを凌いだが、栄養失調とマラリアで毎日二人、三人と死んで行った。

生き残って乗船に間に合ったのは片手で数えられる程だったそう。

復員後の二年間程は父もマラリアの発作に苦しみ、暮らしはどん底だった。

四海海なる帝国を

守る海軍軍人は

戦時平時の区別なく……

酔えば父の口から出る軍歌だった。

戦地から帰って七十二歳で近く日まで、父は死んだ戦友に「済まぬ済まぬ」と供養の朝夕を過ごした。

父の中で戦争は終わっていないかった。戦争に敗けたということより、その敗けいくさで戦死した友を悼む心を生涯持ち続けた。

帰るゆく父へ手向ける海ゆかば

幸

麻生路郎・葭乃句碑建立記念川柳大会

七月七日 尾道市



式 次 第

除 幕 式 (次第)

と き 2001年(平成13年)7月7日(土)午前11時から
 と ころ 尾道市志賀直哉旧居前文学公園
 除 幕 司 会 川 島 諷云児
 句碑目録贈呈 川柳塔社主幹 河 内 天 笑
 感謝状贈呈 尾 道 市 長 亀 田 良 一 氏
 祝 辞 社全日本川柳協会会長 仲 川 たけし 氏
 謝 辞 西 村 梨 里

川 柳 大 会

と き 同 日 午後1時開会
 と ころ 尾道市役所前公会堂別館
 開 会 の 辞 川柳塔社主幹 河 内 天 笑
 挨拶 尾 道 市 長 亀 田 良 一 氏
 川柳塔社名誉主幹 橘 高 薫 風 氏
 祝 辞 社全日本川柳協会会長 仲 川 たけし 氏
 西 村 実 夫 氏
 謝 辞 弓 削 川 柳 社 濱 野 奇 童
 お は な し
 入選句発表 午後2時～3時30分

「踊 る」(事前投句) 河 内 天 笑 選
 「晩 酌」 西 出 楓 楽 選
 「似 る」 木 下 草 風 選
 「道 」 小 林 由 多 香 選
 「海 」 八 島 白 龍 選
 「情 熱」 石 原 伯 峯 選
 閉会の辞 川柳塔社理事長 板 尾 岳 人

除 幕 式

句碑除幕式は午後十一時から文学公園（志賀直哉旧居下）で行われた。昨日までの天候が嘘のような梅雨の晴れ間の、時々薄日の差す中、地元尾道、広島、岡山、鳥取、関西から約八十人が出席した。

句碑の脇には約三メートルの笹が立てられ参加者の短冊が色とりどりに揺れ、今日の佳き日に趣を添えている。



いよいよ除幕 左から畠中さん、亀田市長、梨里さん、薫風名誉主幹

川島諷云児さんの司会により、橘高薫風名誉主幹、ご遺族の西村梨里さん、亀田良一尾道市長、文化財保護委員の畠中美恵子さんの四人の手で句碑が除幕された。

続いて河内天笑主幹から「市制百年のお祝い」として句碑建立目録が尾道市長へ贈呈され、それを受けて亀田尾道市長からは天笑主幹へ感謝状が贈られた。

引き続き仲川たけし日川協会会長が祝辞を述べられ、また句碑作成に尽力された（株）東洋石材工芸社川田社長に天笑主幹から感謝状が贈られた。

続いて麻生路郎・葭乃両先生のご息女、西村梨里さんが「母に※浴槽へずり立ちつたは皆わが子」という句がありますが、子沢山だった兄弟も、今は兄と弟と私の三人になりました。今回の句碑建立は、縁というものは不思議なもので、田辺聖子先生が著書の中で父の句を取り上げてくださり、その句が元市会議員の島本様のお目にとまり、わざわざ遺族を探して下さったことに始まります。父は一歳三月で母親と死別し、向島へ里子に出されました。こんもりとした木立の合間に見え隠れする屋根、屋根、そんな風土を母のふところとして、孤独に育った父が文学好きになったことと無関係だとは思えません。文化の



句碑建立目録贈呈

左・亀田市長 右・天笑主幹

高いこの地に句碑が建てられたことは、とても嬉しいですよ。」と感謝の言葉を述べられた。句碑は高さ一三一センチ、幅一三七センチ、厚さ三八センチの万成（まんなり）という、お目出度い名前の花崗岩で、「おれに似よ俺に似るなと子を思ひ」「飲んで欲し止めてもほしい酒をつぎ」の句がそれぞれ直筆で刻まれている。

お酒と煙草をお供えし、天笑主幹が句碑にお酒を注がれると、句碑はほんのり薄紅色に染まった。

麻生路郎先生が里子に出された向島が指呼の距離に見える、小高い見晴らしの良い公園に建てられた比翼の句碑は、私たち川柳人を初め、文学を愛する者に「人間陶冶の詩」を問いかけているようであった。

川柳大会

川柳大会は三歳の時に清水白柳句碑建立に父小島蘭幸に連れられたという弱冠十九歳の小島史子さんの司会で午後一時から始まった。

会場の尾道市役所前公会堂別館は百八十名の出席者の熱気でむせ返るようであった。参加者に薫風名譽主幹から路郎先生のエッセイ集「妻を語る」、川柳塔社から句碑の二句を染めた日本手拭が配られた。

まず河内天笑主幹が「バンザイ、バンザイ、バンザイ。雷さんも雨雲も大阪へ行ってくれて、良いお天気で今日を迎えることができ嬉しい。」と挨拶した。

続いて尾道市長代理・若住久吾助役が挨拶。引き続き橘高薫風名譽主幹の挨拶は「句碑が産湯を使っているようにお酒をかけてもらって……」と路郎師の思い出を語り、「川柳の質向上を目指したい」と結んだ。

また仲川たけし日川協会長から「川柳は哲学である。川柳のなかに人間が流れている。全国に柳社四百社、三十万人の川柳人がいる。私は八十五歳です。努力して、良い心の句を作りたい。」とご祝辞を戴いた。



司会の小島史子さん

続いてこの度の句碑建立に奔走、多大の尽力をされた元尾道市市会議員の島本実夫氏のご挨拶があった。

「比翼塚の句は柔かく、しなやかに心にしみる。昔とは母のいませし頃を云い 路郎の句を田辺聖子の『川柳でんでん太鼓』で読み、麻生路郎は尾道出身の文字が目飛び込んで、麻生路郎を掘り起こそうと努力した。

人間は心によって栄え、ものによって滅びる」というギリシャの哲学者セネカの言葉があるがこれは「人間陶冶の詩である」の精神である」と含蓄のあるお話をされた。

西村梨里さんは「父は人間の考え方を大切にした。また有形のものはつまらない。無形のものが増えこそすれ無くなることはない。と教えられた。」とお礼の言葉を述べた。

濱野奇童さんのお話は、「路郎句碑は個人を記念するだけではなく、川柳を知らない人にも川柳を知ってもらえる。句碑の建立は一

つの文化運動であります。弓削の川柳公園、川柳の小道の土地の半分は個人の土地であった。その個人から提供された土地に二百四十五人、二百三十四基の句碑が建っています。句碑も建てつ放しということではなく、弓削駅前に川柳ポストを設置したり、五年毎に路郎句碑の前で樽酒を割り、先生の句碑をいつまでも大切にしています。弓削の小学校の校長室にも、教育長室にも路郎先生の句が飾られています。」と弓削の町を挙げて川柳に取り組んでいるようすの内容であった。

なお、除幕式・川柳大会への竹原川柳会のご協力にお礼申し上げます。



来賓の方々

川柳大会入選作品

踊る（事前投句）

河内 天笑選



阿波踊り嫁の嗜みまず習い
銀輪が躍るロマンの島の道
青い目も揃いの浴衣盆踊り
呱呱の声あげる手足が踊ってる
娘の進む踊りの列を母は追い
夏の夜を無欲に踊る傘の波
美容体操兼ねて稽古の阿波踊り
カーテンが踊るみどりの風はらみ
新仏祭って地区の盆踊り
見る阿呆いつの間にやら輪の中に
盆踊り赤い鼻緒が一丁前
だんじりの屋根で踊って男見せ
手踊りへ尻をからけて仲間入り
めおと独楽踊り明かそう盆の月
鬼さんの宴踊りは夜明けまで

小川 注湖
村上 和輝
山川日出子
山口 勝子
越智 一水
福田 登美
山本ヒサヨ
西口いわゑ
野村 賢悟
内海三津子
余頃 正志
藤村 メ女
黒川 紫香
録沢 風花
行吉 照路

夏祭り踊るゆかたに一目ぼれ
阿波おどり見てる体が浮いてくる
客席の母も小さく踊ってる
熟年の胸踊らせる初デート
国会が踊ってみえる視聴率
不景気を飛ばす踊りの神頼み
改革の笛に官僚踊らない
多国籍ハッピーそろえて踊りの輪
マスコミの操り糸に踊らされ
ひとしきり踊っただけの町おこし
踊り子の汗も飛び散るフラメンコ
魚売り声が跳ねてる踊ってる
ちゅらさんが踊る茶の間に風光る
ライندگانスすかつと白い脚揃い
スポーツ面こは活字が踊ってる
ばあちゃんの太鼓に踊る村祭り
ITに踊りつかれた老いの指
パラパラを真似てぎっくり腰になる
手つきよく千手観音踊るよう
踊りたい人と組むのはむずかしい
リストラになるまで踊り続けよう
曼珠沙華ライندگانスの続く土手
胸躍る彼女と参る千光寺
踊りの輪カップも混じる村まつり
足腰を鍛えてラストダンスまで

平元 和夫
有沢せつ子
渡辺 哲
河原 千寿
木曾 一徳
金澤 節生
宮谷 弘
高垣 俊雄
山田 福世
田中 正坊
徳田 正義
池田 苔石
賀藤 智喜
渡辺さだを
仁部 四郎
指宿千枝子
岩田 明子
中田たつお
古今堂蕉子
藤岡ビデオ
大藪 布袋
桑田 宏子
竹林 寿夫
前 たもつ
岸本 孝子

奔放に踊って妻の掌で眠り、

踊りの輪アリランになる泣けてくる

記念日の酒がワルツを躍らせる

踊り食い南無阿弥陀仏あうまい

踊り疲れてまんまるい月と居る

アマテラス以来踊りの好きな国

無我の境太鼓打つ手も踊り出す

バートナー替えずに踊り抜く余生

不器用に踊るあなたについて行く

連れ舞いを踊る夫をたてながら

お開きは河内音頭で盛りあがり

佳

絵手紙はいつでも踊りながら来る

爽やかな風と踊っている柳

阿波の血は鐘のひとつに浮くかかと

手ぶりでよく笠をかぶればみな美人

柔順な妻に上手に踊らされ

人

フィナーレはお膳跨いで踊りの輪

地

せつなくて踊る阿呆になりきろう

天

踊ってる妻はわたしを忘れてる

軸

強かなお婆の踊り見て育ち

藤川 幻詩

岡本 泰子

藤田 泰子

吉岡 修

森井 菁居

八木 千代

米田 恭昌

山本希久子

板谷 恵子

政岡日枝子

中澤 伽羅

西出 楓楽

楨田 英詩

籠島 恵子

山川 旭

石田 正気

北野 哲男

宮崎シマ子

國實 力

河内 天笑

晩 酌

西 出 楓 楽 選



晩酌の肴は故郷の一夜干し
留守番の晩酌豆腐冷えている
空腹にして晩酌に期待する

夕食のリズム狂わす休肝日

晩酌の手元が狂うホームラン

晩酌の追加は妻の寝息以後

一日の錆を落としているお酒

晩酌で僕のリズムを整える

晩酌の猪口へ主役の月が出る

晩酌へ父のことが懐かしい

晩酌を妻にも奨める下心

晩酌もあつて一日恙なし

晩酌をやめろと言われたら死のう

勝ち負けによらず晩酌量が増え

お医者には晩酌少なめに答え

晩酌がうまい今夜は給料日

栗田ひそむ

福本 英子

林 瑞枝

小林 妻子

藤井 正雄

貞岡信太郎

木本 朱夏

氏林 洋敏

高谷 一人

前 たもつ

山田 止水

表 吟子

新家 完司

宮谷 弘

藤川 幻詩

笠井奈那美

晩酌を基準に父の二十四時
 晩酌に修羅場の汗を拭いとる
 忙しいあした待つてる晩酌だ
 大きめの銚子一本カーブ勝つ
 地ビールを鼻眞に妻と夏の宵
 晩酌で夜毎洗うてやる命
 晩酌が自問自答のバロメーター
 晩酌をすすめる妻に抱く不安
 晩酌の一本医者のお墨付き
 今日いやすとりとろりと酔っている
 晩酌も続け病と共生だ
 言いすぎた日の銘柄は鬼ごろし
 晩酌の頃には治る偏頭痛
 晩酌で打つ一日の句読点
 晩酌が妻を美人にしてくれる
 宮仕え下戸も飲みたい夜がある
 晩酌は飲み放題の妻の留守
 海ゆかば父の晩酌始まりぬ
 晩酌が生き甲斐ですと鉄を振る
 晩酌の量で男を値踏みする
 晩酌で今日受けた傷縫い合わす
 晩酌もジョッキがふたつ均等法
 晩酌はひとりシャンソン聞いている
 晩酌へ妻が可愛いことを言う
 晩酌に酒豪寂しく歳を知る

八木 千代
 和田 宏
 宮西 弥生
 野村 賢悟
 宮崎シマ子
 石原 靖巳
 金沢 節生
 古谷 節夫
 高津 幸雄
 久保 青花
 青戸 田鶴
 藤田 泰子
 川島諷云児
 田中 正坊
 桑田 宏子
 米田 恭昌
 渡辺さだを
 板尾 岳人
 藤岡ヒデコ
 石田 正気
 澤田 千春
 岸本 孝子
 安藤寿美子
 西口いわゑ
 藤村 メ女

水戸黄門が始まる晩酌の時間
 晩酌で幸せそうな愚痴こぼす
 晩酌に追加がほしい妻の酌
 晩酌の適量妻が指図する
 晩酌の肴のかわり座らされ
 晩酌を猫とたのしむ老いひとり
 止め役のいぬ晩酌はせいがない
 雪月花晩酌だけは律義なり
 日々好日時々妻に酌をする
 晩酌はお預け妻が正座する
 晩酌を無口にさせて娘が嫁ぐ

佳

晩酌を抜いて男の曲り角
 晩酌のおまけに紐がつけてある
 反省をする晩酌が胃に残る
 お疲れさんビールの泡が喉でいう
 晩酌のときは天狗にしてあげる
 人
 晩酌のおかげで命更新中
 地
 晩酌二合大地に水が染む如く
 天
 晩酌は先ず一杯を妻に注ぐ
 軸
 晩酌を禁じる医者はヤブだろう

木下 草風
 山口 勝子
 八島 白龍
 岸本 宏章
 榎本日の出
 中田たつお
 西内 朋月
 山本 義子
 山本希久子
 岩田 明子
 渡部さかえ
 森井 菁居
 田中 杏人
 天野 弘士
 嵯峨根保子
 月原つくし
 大井 芳郎
 金澤 入道
 戸田さだお
 西出 楓楽

似る

木下草風選



似通った境遇だから助け合い
妻に似た人と出合った紙の橋
手配書にそっくり高くなる鼓動
金に縁うすいところも似た親子
笑い方まで似てきたぞくされ縁
亡母に似た座り地蔵の肩の線
犬も猫も僕に似てくるから不思議
奥さんの死角で俺に似て美人
母に似たひとで甘えてばかりいる
うたた寝の父はお釈迦さまに似る
片べりの靴の癖まで似る親子
お隣も似たりよったり目刺し焼く
ゴーギャンの女に似てる僕の妻
アメリカを真似ようとする銃身
苦行僧に似て炎天を歩くなり
恍惚の父が仏の顔に似る

光井 玲子
板尾 岳人
大森 昭恵
岡野すむ
河内 天笑
小坂 双弓
小島 蘭幸
金澤 入道
吉兼 幸舟
榎田 英詩
川島諷云児
米田 恭昌
高田 星子
田中 道博
木本 朱夏
灰原 泰子

電話の声はとても騙せぬ親子です
僕に似た孫を少うし最良する
キムタクに似てると思うことがある
どうせならとことん俺に似るがよし
似ていないとこそ探している双生児
父親にそっくりもらった短い手
似たような夢ばかり見る初夏の鬱
考えが似ているなと聴いている
親に似た鼻を娘が気に入らぬ
似てますねカネを返さぬところまで
気の強さ似てる娘をもてあまし
似たような土産どれもが日本一
存在感のない僕に似た昼の月
父母のどちらに似せる影法師
病名も親にそっくり貰い受け
本物と空巢も信じ込むヴィトン
哀しいほど亡夫そっくりの子の電話
父似ですいや母似です三面鏡
父に似た羅漢に逢えて旅終る
そっくりの孫で睨めっこが勝てぬ
わたくしに似た子がどじを踏むこわさ
足音も夫に似てきた息子を見上げ
余りにも似すぎ師匠を越えられぬ
何もかも似てきた娘に意見され
鼻毛抜く癖まで僕に似た息子

小林 妻子
中澤 伽羅
加島 由一
山川 旭
岩本 笑子
大藪 布袋
青戸 田鶴
鹿島 蘭
石田 正氣
戸田さだお
藤川 幻詩
神谷 國臣
新家 完司
大井 芳郎
榎本日の出
中田たつお
河原 千寿
緒方美津子
森井 蒼居
時広 一路
村上 曜子
古田比呂子
久保 青花
中村 天馬
阿萬 萬的

似顔絵の皺まで画いて叱られる
 笑いじわ母そっくりになりました
 寅さんに似てる息子をもて余す
 アルバムの母に似てきた背のあたり
 夫婦合作少しは俺に似てくれよ
 似すぎてる親を憎んだこともある
 似て非なるものへ遺伝子が挑む
 これが血か妻に似てきた小言聞く
 妻に似て帽子の似合う娘に育ち
 輝いていれば似顔絵まで光る
 ふれあえば皆似たような傷をもち

佳

モノリザにすこうし似せて妻を描く
 母に似た人を探してまだ独り
 長女羽化亡妻の幽霊かも知れぬ
 そっくりがとて悲しい造花です
 父さんも僕も残しているバセリ
 人
 似た過去を持つ私には笑えない
 地

私に似てる人ならいい人だ

天

父に似ることがそんなに悲しいか

軸

相似形置き換え銚先を躬す

福本 英子

藤田 泰子

石原 靖巳

嵯峨根保子

貞岡信太郎

西出 楓楽

田中 杏人

北野 哲男

戸田眞佐子

岸本 宏章

政岡日枝子

寺川 弘一

岩田 明子

平山 三鶴

安平次弘道

藤解 静風

藤井 正雄

氏林 洋敏

定本 広文

木下 草風

道

小林 由多香 選



道標残しておこう子が歩く

旅ひとつ終える私の句読点

道連れがあつて渡れる長い橋

道草の中で拾った処世術

座りだこだけが知ってる芸の道

旧道をゆったり走る耕運機

父がいそうな一本道で休めない

道の駅小さな夢がてんこ盛り

わが道をゆく少年の太い眉

つまりいた道ゆつくりとあと戻り

街道を行くと歴史の風に遭う

花の種まいて歩こう帰り道

花野への小道明るい風と逢う

お月さんと目線を合わす田舎道

近道をすればつまり老いの坂

真っ直ぐな道を転んでばかりいる

村上 曜子

松尾 和香

渡部さかえ

宮崎シマ子

久保 青花

大野 年子

小島 蘭幸

坂田和歌子

小坂 双弓

青戸 田鶴

氏林 洋敏

岸本 孝子

時広 一路

植田 英詩

賀藤 智喜

木本 朱夏

もう別の道へ進んだ入試ミス
 仁王立ち男の道に悔いがない
 平坦な道に油断をしてしまう
 迷ったら道を変えてもいいのです
 坂道に生活が匂う港町
 子に渡す道しつかりと舗装する
 出向という花道へ追いやられ
 ふるさとの道まだ青い草がある
 宅配の荷物も休む坂の道
 新発見したくて散歩道を変え
 薄倖の道で騙さればかりする
 どの道を行っても三角点に出る
 近道をおぼえてからの怠けぐせ
 道二つ険しい方が好きになる
 満月の道でも母は不安がる
 近道をすれば火の乱風の乱
 出来た道歩いてばかり怪我はない
 歩きたい道が夫婦でくいちがい
 それぞれに行く道がある分岐点
 急ごうか道がだんだん細くなる
 行き詰まる道でパズルを一つ解く
 遠回りした道にも悔いは残さない
 まっすぐな道でないからおもしろい
 抜け道があるからこの世面白
 神様がわたしにくれた回り道

中田たつお
 熊谷 操子
 長浜 澄子
 西口いわゑ
 黒川 紫香
 藤井 正雄
 山口 勝子
 山本 義子
 岸本 宏章
 林 瑞枝
 山根 里香
 森井 菁居
 岡野すすむ
 福西 茶子
 政岡日枝子
 八島 白龍
 中村 天馬
 西原 艶子
 大森 昭恵
 木下 草風
 定本 広文
 小林 妻子
 小島 史子
 安平次弘道
 榎本日の出

おもしろい人生だった回り道
 プラス思考で曲がりくねった道を行く
 土砂降りの道に足跡残らない
 いつからか影が添うてはくれぬ道
 地図にない道を選んだ日の若さ
 道を聞くおまわりさんは話好き
 自我を通せば道幅せまくなるばかり
 出たついで寄り道ばかりしておんな
 くねくねとした道だからよく覚え
 真っ直ぐな道を子供へ敷いておく
 抜け道が一本もない父の地図
 住
 回り道どこかで時計鳴っている
 土の無い道から民話消えてゆく
 老人の道 老人と手をつなぐ
 ランドセルひとつ道しはまだ知らず
 この道を鼻歌で行く人もある
 人
 まわり道なさけの深い花に会う
 地
 つまずいた道で一つの知恵が湧く
 天
 微笑みを返して道を広くする
 軸
 間違えた道ではないが陰しすぎ

岩田 明子
 河原 千寿
 國實 力
 月原つくし
 古谷 節夫
 吉兼 幸舟
 籠島 恵子
 嵯峨根保子
 河内 月子
 福本 英子
 川島諷云児
 岩本 笑子
 平山 三鶴
 八木 千代
 加島 由一
 吉岡 修
 白根 ふみ
 沖浜 正宏
 牧野 芳光
 小林由多香

海

八島白龍選



路郎葭乃の心音をきく海の底
夕陽落つてつかい貨物船に落つ
風よ吹け岬で海の覇氣もらう
人生の海でいろんな詩を釣る
飛び込んでいいよと広い母の海
車窓から海が見えるとおとす
すがりた海より広い母の胸
海鳴りはふるさとを恋う隠れ唄
わあ船も浮いてる広いプールやね
ふるさとの歌を聞かせてくれる海
散骨をすると私の海になる
海の香はむらさき色に漁港暮れ
海鳴りを胎内で聞き父を待つ
負けて勝つ男に深い海がある
蝶になり溺れて舞わん花の海
串刺しの島が世に出る瀬戸の海

小林 妻子
西内 朋月
行吉 照路
有沢 せつ子
貞岡 信太郎
高田 星子
渡辺 さだを
山本 義子
福田 満州
吉岡 修
氏林 洋敏
早川 棲世
北野 哲男
川島 諷云児
大森 昭恵
岸本 宏章

焼魚海の話で皿に乗る
満ち潮へ貴男をボーイと捨てました
人間の彩に染まって海は病む
傷口がまたうずき出す黒い海
海鳴りが男の胸の堰を切る
海風いで少年夢を膨らます
島々を抱いて寝かせる母の海
ふるさとの海は青空まで続く
海の香の昆布が並ぶ浜間屋
人生観少うし変えて海が風ぐ
海鳴りは亡父の怒りか慟哭か
母を恋う海はおずきを鳴らす時
韓国のボーイ捨て流れつく海辺
統編の書き出しを練る海の宿
聞きたくて聞きたくて来た亡母の海
ぐい呑みの海へ男を捨てる夜半
情報の海で自分を見失う
少年の吹く口笛に海がある
海鳴りへ窓ガラス拭く一人旅
ITの海で私は貝になる
情報の海で戸惑う選択肢
我は海の子テトラポットが邪魔をする
あお向けに海の上に寝る空は碧い
海じつと睨んで並ぶ島の墓地
今にして母という名の海を知る

宮脇 道子
坂田和歌子
金澤 入道
月原 つかし
薮 帆子
村上 曜子
正畑 半覚
小島 史子
金沢 節生
森井 善居
石原 靖巳
河原 千寿
福本 英子
中田 たつお
熊谷 操子
高谷 一人
西出 楓葉
山田 止水
長谷川 紫香
平山 三鶴
高津 幸雄
嵯峨根保子
戸田 さだお
阿萬 萬的
笠井 奈美

人間のぞわめき嫌う深海魚

散骨の海は男の貌になる

海釣りで知らない男が酒をくれ

散骨の予約へ海が広すぎる

海からの太陽海を海にする

碑に海が見えたと放浪記

海の癖知って漁師は海に生き

尾鰭骨に海とつながるものがある

竜馬と並び海鳴り聞いている

津軽三味海は厳しい雪の舞

海が盛り上ってサーフボードが現われる

佳

握り拳に鳴っているのは父の海

海に出る噂を聞いてきた手毬

九条の枠外すなと海が吠え

海からの風に昔を喋り出し

美辞麗句いらぬ漁師の海だから

人

街よりも面白そうな海の底

地

しぐれても海は泣かない男の子

天

疲れたらおいでと母の海が待つ

軸

日本のドラマを海が組み立てる

岸本 孝子

田村 邦昭

宮木 一夫

安平次弘道

三宅 不朽

野村 賢悟

宮崎シマ子

政岡日枝子

田中 道博

藤井 正雄

河内 天笑

八木 千代

板尾 岳人

山口 勝子

河内 月子

加島 由一

新家 完司

田中 杏人

岩田 明子

八島 白龍

情熱

石原伯峯選



情熱の人を讃えて句碑を建つ

情熱の終着駅を飾る句碑

情熱のままに行動出来た日よ

情熱で結ばれ金でもう別れ

情熱の行き過ぎもある真紀子ぶし

ギャンブルにかける情熱悲しすぎ

情熱が失せた頃から肥えはじめ

情熱はまだまだ脚も手も動く

情熱が袋叩きにあっている

セールの情熱に負けサインする

箇条書き三日坊主の情熱家

ワイン冷やす仕事の鬼の戻るころ

情熱も中くらいがよい輪が軋む

情熱が高速バスでやって来る

情熱のお方鬼の名奉る

前 たもつ

中田たつお

安藤寿美子

黒川 紫香

阿萬 萬的

吉兼 幸舟

大藪 布袋

河内 月子

加島 蘭

大野 年子

太田とし子

山本 義子

野村 賢悟

藤解 静風

時広 一路

小島 蘭幸

改革に情熱だけが空回り

情熱的なおじいさんにも困る

情熱家は飽き性だと申す

日の丸の赤は情熱だと思ふ

パソコンに挑む米寿に負けられぬ

別々の趣味に情熱持つ夫婦

情熱があつても年には勝てぬ恋

紫陽花の情熱雨もほだされる

パンよりも愛情熱の青春譜

情熱が支えの五体不満足

情熱を持て余してるみじん切り

情熱をはげしく燃やす情熱家

川柳をいのちと読ます僕の辞書

花枯れて少年の情熱渴く

情熱の仲間はずれになりたがる

情熱のエキスを師匠から貰う

情熱を教えてくれた師のまた師

燃えていた純情だった若かった

ついて来いあの情熱に負けました

ロボットもいつか情熱持つだろう

雑草の情熱コンクリだって割る

情熱の殻をかぶった愛メール

情熱の虚空翔び異国まで

子育ての情熱燕に負けている

火と燃えて果敢に散った特攻機

宮谷 弘

嵯峨根保子

北野 哲男

石田 正気

岩田 朋子

福田 満州

栗田ひそむ

徳永 撫生

藤井 正雄

山川日出子

長浜 澄子

日谷 薫香

岸本 宏章

桑田 宏子

西原 艶子

森井 菁居

古田比呂子

田中 正坊

山口 勝子

西出 楓楽

和田 宏

河原 千寿

岡本 泰子

平山 三鶴

大森 昭恵

ひと夏の情熱カモメにからかわれ

情熱を持ってるから父が好き

情熱を少しためてる休火山

情熱的に見つめられたらどうしよう

一日で散るも情熱だろう沙羅双樹

情熱の無い男には影がない

情熱家危なっかしくて魅力的

はんにやしんきよう唱え情熱抑えてる

情熱の再充電をする余生

いつか見返す情熱も風化する

情熱に千の色ありあじさい忌

住

ガリ刷りの情熱みんな若かった

変人の情熱山が動きだし

情熱が干涸びている鷹の爪

透明な紐で情熱引き寄せる

みんなの情熱で除幕式が晴れ

人

情熱がカルテの中で風化する

地

情熱のタクトが音を呼び起こす

天

情熱昇華ただ飄飄と生きている

軸

情熱の芙美子曼陀羅放浪記

八島 白龍

小島 史子

中原比呂志

高田 星子

白根 ふみ

川島諷云児

田中 道博

加島 由一

藤川 幻詩

岡野すすむ

八木 千代

木下 草風

岡崎須恵子

木本 朱夏

大井 芳郎

河内 天笑

貞岡信太郎

定本 広文

政岡日枝子

石原 伯峯

路郎先生を偲ぶ

二枚の短冊

石原 伯峯

(広島県川柳協会会長)

私が広島鉄道局業務部審査課の統計係に就職したのは昭和十三年である。その時の主任が浜田久米雄氏で、ある日、街の中心地にある小料理屋に連れて行かれた。彼はその常連で通された部屋の壁には、ずらりと短冊が並んでいた。私が注目したのは

酒とりとろり大空のころかも 路郎の一句である。

これが川柳であること、作者は心酔している麻生路郎師であること、そもそも川柳とは：と、彼の長広舌を聞く羽目となった。

かくて彼が主宰している鶯（みさこ）吟社に所属することになり、川柳雑誌社の会員になり、地方吟社である広島川柳会の月例会にも出席する川柳生活が始まった。

その翌年、久米雄氏の肝煎りで第二回西日本鉄道川柳大会が尾道市で開催され、私も

員数の一人として出席している。ここで初めて路郎師にお目にかかるのだが、雲の上の人として拝顔したに過ぎない。

さて明ければ昭和十五年、紀元は二千六百年である。その年は、みさこ吟社の創立五周年とかで久米雄氏が音頭を取り近県の川柳人に呼びかけて大会が持たれた。来賓選者は路郎師でトリの兼題「油断」を披露された。

うちの子も三つうっかりはつとけず 伯峯の私の句が天位となり賞として

おれに似よ俺に似るなと子と思ひ 路郎の短冊を頂戴する榮に浴した。これがきつかけになったのか間もなく不朽洞会員にさせていただいた。

ところが大東亜戦争が勃発して私も臨時召集された。川柳雑誌社も退会して中国大陸を転戦することになり、復員したのは昭和二十年の師走であった。私の元の職場は原爆により焼失し久米雄氏も郷里の岡山へ転勤していった。

そんな訳で数年間は戦域の復興に挺身することになり川柳と離れた生活がつづく。

私が結婚したのは昭和二十三年で間もなく長女彰子が誕生した。そのことを昭和二十四年の年賀状で路郎師には書き添えたのである。思いもかけず師から小包便が届いた。短冊



掛けと共に祝吟が短冊に書かれていた。

長女とや梅一輪にたとえんか 路郎の一句である。疎遠であった孫弟子の私を覚えていて下さったことに感涙に咽んだ。

その頃私は戦域で文化関係に携わっていた。その年の秋、文化講演会に川柳を提案し、麻生路郎先生を招聘することになった。場所は宮島に近い地後前職員会館である。同夜は深更に至るまで差しで歓談出来たのは生涯の思い出となった。五年後にも同様の趣旨で山口県の湯田温泉にお招きして私も同行した。今年七月七日、尾道市や川柳塔社のお世話で路郎師ご夫妻の句碑が建立され、その除幕式に私も参列する。前記二枚の師の短冊は、私にとってかけがえのない宝物である。

除幕式に参加して

縁あり絆あり

新家 完司

バスで来られた大阪の皆さんが、すべりこみセーフで到着。会場の庭が人であふれかえったところで、除幕式が始まった。遠慮して後ろにいたので、除幕の瞬間には頭の間から句碑の上の方がチラッと見えただけだった。温かい人肌色の美しい石で、そこだけがポツと明るくなったような気がした。

天佑とも言ふべき快晴の下で、どなたの顔も晴れやか。句碑を中心に、皆がつながっている。献酒のお流れを頂戴しながら、縁というものの、絆というものの不思議を想った。

無事に除幕式が終わって、記念川柳大会の会場へ。ぶらぶら散策しながら十五分程。

どなたのお骨折りは知らないが、記念川柳大会の弁当はうまかった。ゆつくりと頂きながら、ふと、「もう一度句碑を見に行こう」と思った。ごちそうさまをしてから、会場の



七夕笹飾り

公会堂別館を後にした。

JRの線路をくぐってから、尾道は急に尾道らしくなり、急な石段がいきなり現われる。初めて来た街だが、志賀直哉旧居は先ほど来ているので、方角は頭に入っている。汗を拭き拭き石段を登ると、先程の賑わいは夢だったかのように、誰もいない。句碑だけが静かに迎えて下さった。句碑の左に立てられた七夕の笹には、皆さんが吊るした短冊が微風に揺れている。その中で、「もう一度ゆつくり来たい」とばかり、哲男¹が目についた。本当だ、もう一度、いや何度でも来てみよう。尾道は親戚になつてしまったのだから。

汗を拭いて一休みしていると、テレビカメラを担いだ若いカメラマンがやって来て、句碑を撮影し出した。よく見ると、除幕式を撮影していたカメラマンとは別人のようだ。違うテレビ局かもしれない。或いは、雑踏を避

けて再度撮りに来たのかもしれない。

一心にカメラを回している若者を残して坂道を下り、JRの線路まで戻って、句碑の裏を見逃していた事に気がついた。この炎天の下を、あの石段を、もう一度登るのかと思うと気持ちが萎えたが、いま戻らないと後悔すると思い、重い足を引き摺って引き返した。今日半日でこの坂道を登るのは三度目だ。

句碑の前に、先程の若いカメラマンがまだ居た。三脚を半分にまで縮め、膝を地面につけ、テレビカメラを句碑の高さに合わせて格闘していた。その額の汗を見ながら、「プロというのは凄いなものだ」と思った。そして、写してもらっている句碑が、私の父と母とでもあるかのように、誇らしく思った。

さわやかな一日

小島 蘭 幸

おれに似よ俺に似るなと子と思ひ 路 郎
飲んで欲しやめてほしい酒をつぎ 蘭 乃

麻生路郎・葎乃ご夫妻の句碑除幕式は、厳肅且つ実に感動的であった。亀田良一尾道市長と仲川たけし(社)全日本川柳協会会長の力強いお言葉に、出席者の顔は皆晴れ晴れとして



句碑への坂道

いた。そして何よりも橋高薫風名譽主幹と西村梨里氏の笑顔がそこにあった。路郎先生が大好きだったという清酒を、河内天笑主幹が句碑になみなみと注がれると一瞬句碑が笑ったようで、芳醇な清酒の香りとさわやかな拍手に包まれて除幕式は無事終了した。除幕式終了後、一生懸命お手伝いをされていた尾道市役所の若い職員の方が「最高のお天気だった」と呟かれたのがとても印象的で、私の耳底に残った。本当に晴れてよかった…。

第二部の川柳大会には、路郎先生の句碑建立に一番尽力された、元尾道市会議員の島本実夫氏も元氣に出席され、作家田辺聖子氏の

一冊の本との運命的な出会いから句碑建立までの経過をたんと話された。

春の俳代議士などに踏まれるな 路郎
浴槽へすらり立ったは皆わが子 霞乃

濱野奇童弓削川柳社会長のおはなしは、日本一の川柳の町弓削と路郎先生の交流や、弓削駅前建立されている路郎先生の句碑「おれに似よ俺に似るなと子をおもひ」の紹介等だったが、時間的な制約でおはなしの一部を急遽割愛されたのは残念だった。

入選句発表は選者と出席者の皆さんのお陰でスムーズに運ぶことが出来た。心地良い緊張感に川柳大会ならではの。今回も佳句を沢山聞くことが出来た。

さて、今回の大会は広島県尾道市で開催されるということで、竹原川柳会と尾道市観光文化課でお世話をした。会場正面を飾った垂れ幕は森井善居揮毫。司会は私の長女史子、第一受付は若本笑子、披露補助は古田比呂子、会計は時広一路等それぞれ分担した。二日前に尾道市まで出向いた事前準備や当日の裏方の係、最後の後片づけまでも竹原川柳会と休日出動された市役所職員の方々の頑張りがあつたことを特記したい。

沢山の反省すべき点はあつたが、さわやかな一日に感謝する。ありがと！

第34回和歌山県民文化祭参加

第9回 和歌山県川柳大会

日時 平成十三年九月二日(日)十一時開場

会場 JAビル本館五階 大ホール A

JR和歌山駅前

会費 一、五〇〇円(軽食・発表誌呈)

事前投句 ハガキに二句

(締切・八月十五日必着)

『介護』青枝 鉄治選(幸川柳教室)

『句会・懇親宴の出欠を記入して下さい』

投句先 千六四一—〇〇二—

和歌山市紀三井寺一—一—

牛尾 緑 良 宛

(事前投句のみの方で発表誌をご希望の方は、千円をご送付下さい)

宿題(当日出句) 各題二句詠

締切・十二時三十分

『鏡』三河与至子選(おはよう川柳会)

『男』和田 良一選(岩出川柳会)

『女』山根めぐみ選(あしべ川柳会)

『ランク』高木みのる選(日高番川柳会)

『生きる』山田 高夫選(川柳おやま詩社)

《代理出席も可とします》

懇親宴 大会終了後 同所で三、五〇〇円

主催 和歌山県川柳協会

後援 和歌山県・(社)日川協・産経新聞社はか

記念川柳大会参加者

総数 二一四名
順不同・敬称略

(岐 阜) 岩田明子

(天 阪)

板尾岳人

籠島恵子

河内天笑

児玉 蛙

寺川弘一

西村梨里

福田満州

藤村メ女

山本希久子

(兵 庫)

黒川紫香

長浜澄子

(奈 良)

(和歌山)

(鳥 取)

岸本宏章

白根ふみ

田村邦昭

福田登美

光井玲子

(島 根)

(岡 山)

阿萬萬の 石原靖巳 安藤寿美子

氏林洋敏 榎本舞夢 指宿千枝子

加島由一 河内月子 榎本日の出

橘高薫風 熊代菜月 太田とし子

高田星子 田中正坊 川島諷云児

中澤伽羅 西出楓楽 古今堂蕉子

野下之男 早川棲世 中田たつお

藤井正雄 藤田泰子 宮崎シマ子

前たもつ 宮西弥生 山川日出子

吉岡 修 渡辺さだを

井上信子 北野哲男 緒方美津子

中西定雄 中西清子 嵯峨根保子

西内朋月 山本義子 西口いわゑ

中原比呂志 米田恭昌

木本朱夏 福本英子 松尾和香

青戸田鶴 鹿島 蘭 有沢せつ子

岸本孝子 澤田千春 小林由多香

新家完司 鈴木一弘 坂田和歌子

西原艶子 林 瑞枝 政岡日枝子

福西茶子 牧野芳光 八木千代

宮木一夫 宮脇道子 録沢風花

小川注湖

岡 耕作 岡 紀子 貞岡信太郎

河原千寿

田中杏人

灰原泰子

山田止水

(公 島)

池田若石

石原伯峯

岩本笑子

大森昭恵

岡本泰子

勝武夏喜

金澤入道

河崎厚子

久保青花

高谷一人

小島尚美

白神郁代

竹林寿夫

藤解静風

富田汎美

中村義雄

島本節子

藤川幻詩

日谷 寛

木下草風

田中道博

濱野奇童

山田福世

天河義彦

石井石頭

板谷恵子

大井芳郎

大藪布袋

沖浜正宏

賀藤智喜

神谷国臣

木曾一徳

熊谷操子

小坂双弓

小島史子

高垣俊雄

田中栄恵

時広一路

豊田倍男

西岡伸夫

花本健治

古谷節夫

日谷薫香

小林妻子

西江亜記

平山三鶴

山本久子

天野弘士

石田生気

今城脩司

大野年子

岡本孝枝

表 吟子

金沢節生

龜田良一

國實 力 部 帆子

桑田宏子

小島蘭幸

小島千枝

高垣俊雄

高橋泰子

徳田正義

長町市治

野村賢悟

馬場利子

日高敬子

平元和夫

戸田さだお

戸田眞佐子

長谷川紫光

行吉照路

石井恋女房

内海三津子

岡崎須恵子

岡野すすむ

笠井奈那美

栗田ひそむ

小山 稔

定本広文

島本実夫

若年幸子

正畑半寛

高津幸雄

榎上 隆

徳永撫生

中村天馬

島中美恵子

浜本ソルエ

原口美智子

藤岡ヒデコ

板尾岳人

福原智行

榎田英詩

宮宗幸枝

森井菁居

山内房子

山根里香

若住久吾

(山 口)

(愛 媛)

村上曜子

宮尾みのり

(佐 賀)

番傘川柳本社

祝電拜受

御芳志御礼

川柳塔おとり

川柳後楽吟社

古田太虚

定本広文

橘高薫風

和 田 宏

古谷節夫

森井菁居

板尾岳人

福米愛弓

三谷照子

宮谷 弘

森井一枝

山川 旭

山口勝子

前田サキ

三宅不朽

村上和輝

八島白龍

山口勝子

余頃正志

吉兼幸舟

余頃桂子

渡辺 哲

安平次弘道

越智一水

高橋宏臣

月原つくし

仲川たけし

渡部さかえ

岩本笑子

小島蘭幸

島中美恵子

仲川たけし

高垣俊雄

演野奇童

森井一枝

國實 力

時広一路

藤解静風

沖浜正宏

板垣草丘

句碑建立賛助金拝受者

総数 二六八名
順不同・敬称略

西村梨里 山本蛙城 一本勇太 桜井千秀
篠原いつふみ 稲葉冬葉 谷垣幸代 和泉あ
かり 津村八重子 櫻庭順風 小糸昭子
森田文 岩本美緒子 中村ゆきを 大森純子
川柳塔おつばこ吟社 安食友子 西出楓葉
井上昭子 石原靖巳 川上大輪 寺井東雲
安達はじめ 富山ルイ子 門谷たず子 宮本
かりん 平松かすみ 小池しげお 初山隆盛
川柳塔唐津支部 大橋鐘造 植村喜代 寺川
弘一 福永世司朗 安平次弘道 中井アキ
河本照子 三好専平 神原まさこ 玉置英子
和田つづや 鶴田遠野 徳山みつこ 西村り
つえ 蘭田猿香 一戸ツネ 出口セツ子
舟木与根一 玉置当代 吉川寿美 吉川涉
播本充子 川端柳子 福井桂香 木本朱夏
山川日出子 中田たつお 越智一水 藤井正
雄 指宿千枝子 海老池洋 古川喜美子
志田千代 野下之男 井上松煙 北野哲男
古今堂蕉子 大崎侑子 安達忠央 福田満州
緒方美津子 井上信子 江見見清 今愁女
古谷節夫 山内房子 藤解静風 竹内花代子
岸本安章 岸本孝子 三宅不朽 時広一路
森井菁居 岩本笑子 久保田千代 牧瀬富喜

子 山本義子 大川道子 津村志華子 鍛原
千里 小泉ひさ乃 野田素身郎 上田宣子
相馬銀波 石川侃流河 奥田みつ子 西口い
わゑ 山本希久子 渡部さと美 久谷まこと
星野きらり 河井庸佑 前たもつ 米田恭昌
安藤寿美子 亀井皎月 嵯峨根保子 高野宵
草 永田俊子 岩切康子 川柳塔さくらぼく
井上森生 川柳ささやま 榎原公子 工藤甲
吉 羽津川公乃 生嶋ますみ 宮尾みのり
中塚礎石 岡本清水 小西富士子 恒松町紅
清水潮華 菱田満秋 須郷井蛙 広瀬房江
福士慕情 田中みね 武田帆雀 板垣草丘
藤村亜成 天正千梢 小西雄々 安本美喜
山本半銭 春城武庫坊 春城年代 黒田能子
吉岡修 宮口笛生 岸野あやめ 備後辰郎
米澤椒子 宮野みつ江 玉置重人 前田忠子
黒川紫香他 井上次郎 飯尾賢一 村上靖雄
河内天笑 河内月子 吉村一風 藤田泰子
清水利武 宮崎シマ子 安永春 西田柳宏子
森茂美 内海幸生 岸桂子 奥谷彩子 勝山
美千代 松原寿子 辻川慶子 本間満津子
美田旋風 岡本花匠 岡井やすお 中澤伽羅
清水絹子 大内朝子 北川一進 林はつ絵

都倉求芽 北村賢子 小野克枝 近藤佳子
小林周信 山口三千子 出井澄子 結城君子
小島蘭幸 勝武夏喜 沖浜正宏 藤井二三
正畑平寛 山海友熙 八田敏 高須賀金太
櫻谷郁子 籠島恵子 丹下美津子 國實力
島元ふみ 白石春嶺 佐藤治代 阿萬萬の
園山多賀子 服部一典 酒井一壺 岩倉キク
子 長浜澄子 福本英子 堀端三男 田中正
坊 谷口義 高島啓子 小倉藍 高田美代子
敏 金井文秋 西内朋月 山之内八重美 堀良
江 古田太虚 河井啓 西谷大吾 藤原桂子
湯浅馬洗 野村太茂津 吐田公一 石原淑子
神保坊太郎 植田一京 小林由多香 西原艶
子 清川玲子 岩崎みさ江 西岡洛醉 真鍋
訓子 坪田イサ子 仙波八千代 鴨谷瑠美子
一色美穂子 石森利昭 堀江光子 酒井輝
榎本舞夢 近藤豊子 三木秀雄 橘高薫風
西尾美與子 朝日カルチャー川柳教室 吉田
孔美子 中原諷人 板尾岳人 木村貴代子
川端一步 西康之 新家完司 波多野五楽庵
岡本まち 福士トキ 福水ひかり 大塚節子
榎本日の出 熊代菜月 三浦広 石原伯峯
宮西弥生 坊農柳弘 高田博泉 森中恵美子
田中新一 楠昭子 若本芳彦

第13回兵庫のまつり・ふれあいの祭典 川柳祭開催要項

趣 旨 全国から広く川柳を募集し、優秀な作品の発表、表彰、講評、講演などにより、川柳の普及と創作活動の活発化、レベルの向上を図り、文化活動への参加意欲の向上をめざして開催します。

日 時 平成13年12月2日(日)/10:30~16:00

会 場 三木市文化会館 (三木市福井1937 ☎0794-83-3300)

主 催 ふれあいの祭典実行委員会・三木市ふれあいの祭典実行委員会・兵庫県 他

後 援 三木市議会・半どんの会・三木芸術文化会議・ふあうすと川柳社 他

開 場 10時30分 **開 会** 12時

(1)アトラクション (2)事前投句入選発表と表彰式 (3)入賞作品の講評 (4)講演
(5)当日投句入選発表

応募規定

〈一般の部〉~~~~~

題と選者 (5名共選)

「**鉦**(かんな)」泉 比呂史・平山 繁夫・浅雛美智子・大森 一甲・村上 氷筆

「**酒**」小松原爽介・赤井 花城・前川千津子・奥田みつ子・中井 昭子

「**ぶ ど う**」春城武庫坊・福島 直球・ト部 晴美・佐藤 純一・井上あや路

応 募 料 1,000円 (郵便小為替を句稿に同封する) 各題1句 (未発表作品に限る)

応募方法 所定の用紙 (応募用紙)、また400字詰め原稿用紙、及びそれに準ずる用紙を使用し、右半分に作品、左半分に郵便番号・住所・氏名 (ふりがな)・性別・電話番号・大会への出欠を楷書で明記して下さい。

応募締切 平成13年9月7日 (金)

作 品 集 入選作品と各応募者の作品1句を掲載して、応募者全員に配布。

賞 文部科学大臣奨励賞・ふれあいの祭典実行委員会代表会長賞・兵庫県知事賞 他

応 募 先 〒673-0492 兵庫県三木市上の丸町10-30

〈三木市教育委員会、社会教育課〉三木市ふれあいの祭典実行委員会

〈ジュニアの部〉~~~~~

応募資格 原則として兵庫県内の中学校・高等学校に在学する生徒とします。

題と選者 「**馬**」(3名共選) 廣嶋 英子・梶原サナエ・古川 奮水

応 募 料 無料

応募方法 1人2句以内を所定の用紙を使用し、学校を通じて応募して下さい。

賞 文部科学大臣奨励賞はありませんが、それ以外の賞は〈一般の部〉と同じです。

応募締切 平成13年9月7日 (金)

〈当日投句の部〉~~~~~

題と選者 「**川**」藤原 正明 「**道**」小笠原双城 「**壁**」遠山 可住

各題2句以内、出句は大会出席者に限ります。

出 句 料 500円 **出句締切** 12時 **賞** 各題から優秀作品3句を表彰します。

お問い合わせ先

(1) 〒673-0492 三木市上の丸町10-30 三木市教育委員会 社会教育課内

三木市ふれあいの祭典実行委員会 (担当: 財田・松村)

／☎0794-82-2000 FAX 0794-83-3699

(2) 〒673-0532 三木市緑が丘町1-5-8 小笠原 双城 方

三木芸術文化会議議長／☎0794-84-0503

(3) 〒650-0011 神戸市中央区下山手通4丁目16-3 兵庫県民会館内 (勤兵庫県芸術文化協会 文化事業部 事業第1課) ☎078-321-2002 FAX 078-321-2139

路郎忌

本社 七月句会

七月二日(月)午後五時半

アウイーナ大阪

梅雨の晴れ間というより、もう夏が来たよ
うな暑さの中、路郎忌の七月句会は百二十名
の参加を得て開催された。番傘川柳本社から
田中新一氏他十五名のご参加があり、句会を
盛り上げて頂いた。心より感謝申し上げる。
お話は河内天笑主幹。路郎忌に因み、あら
かじめ路郎句集から抽出された句、略歴等が
プリントされ、出席者に配布された。

七月七日除幕式の実行される尾道の句碑には
おれに似よ俺に似るなと子を思ひ 路郎
飲んで欲しやめてほしい酒をつぎ 蔑乃
の二句が刻まれている。

路郎師の代表句、その他四季の名句の鑑賞
に終始し、充実した三十分であった。なお、
題は全て路郎師の句に因んだものである。

初出席に安井英華氏(天理市)を迎える。
月間賞は小西幹奇氏(堺市)に輝く。

(司会)遠野(記名)月子・澄子
(受付)瑠美子・伽羅(清記)尚士

席題「ビール」 藤原一志選

隅っこですねた男の小ジョッキ
ジュース飲む向かいで妻の大ジョッキ
愚痴っぽい人は誘わぬビヤホール
相手見てキリンアサヒと社交術
大ジョッキ干して熟女の高笑い
そろそろと本音出た大ジョッキ
家計簿に誉められてる発泡酒
ビヤガーデン主婦を忘れてる声だ
乾杯の声に栓抜き忙し
ビール飲む父の笑顔は日本一
休肝日やむやにするコーシヤル
ビール券我が家は化ける塩醬油
枝豆は八方美人酒ビール
寝たきりへすこしビールの思いやり
北新地遠く手酌で飲むビール
入院の夫にすまぬ生ビール
五六人女気焰の大ジョッキ
ちびりちびりビール飲むのはよし給え
女今日べラべラ喋るビヤホール
一杯のビールで天下取れる下戸
昼寝する手順にまずは缶ビール
ビールの泡あふれてどこまでが情け
苦勞した汗へだまってビール注ぐ
母さんがビール冷やすの忘れてた
とりあえずのビールに踊るのど仏
貸し借りのない人と飲む缶ビール
ビールならよいかよいかと医者おどす

鹿太 朋月 楓楽 英華 希久子 澄子 遠野 緑 昭子 たもつ いわゑ 舞夢 泰子 幹齊 セツ子 寿美 笛生 萬輪 萬的 セツ子 修 雅文 度 千代 朝子 楓楽 求芽

又とないチャンスビールが邪魔をする
缶ビールぬるくなってる長電話
下戸の節介ビールの栓をみんな抜き
ビールのから酒へと腰が重くなり
玉の汗拭かずにはビールぐつと干す
悔い一つビールの泡で流し込む
湯上がりのおんな今かと待つビール
身構えて飲めばビールに泡がない
善人の顔して冷えたビール飲む
地ビールの泡に反骨心がある
バブル以後ビールの泡も遠慮がち
言い勝った口をビールでよく漱ぐ
痛風がビールの旨さ知っている

軸

発泡酒飲んでエビスは飾つとく

兼題「むぎむぎ」

津守柳伸選

合格を知らずむぎむぎフリーター
上昇気流に子飼いをさらわれる
飢餓知らぬ子がむぎむぎと食べ残す
むぎむぎと煩れあつてなせるものか
無農薬と言われあつてなせるものか
むぎむぎと瑞穂の国の休耕田
むぎむぎの妻の餌食になるベッド
むぎむぎをあらわに出せぬ年の功
欲に眼が眩みむぎむぎみなとられ
殺されるために育てた訳じゃない
ロボットにむぎむぎ職を奪われる
招かれて食べずむぎむぎ引き上げる

照子 充子 泰子 良子 ばつ 眞理子 弘風 冬葉 柳宏子 セツ子 希久子 舞夢 新 一 朱 夏 鹿 太 金 太 比 志 英 華 武庫坊 三男 完次 正一 千里 女

むぎむぎと命をうばう医療過誤
虹追つてむぎむぎ故郷捨てたけど
むぎむぎと一円玉が踏まれてる
無位無冠むぎむぎ生きたわけでない
血税がむぎむぎ機密費に消える
むぎむぎと反古にされるか藁半紙
気おくれで乗りそこなつた玉の輿
むぎむぎと風の噂に裁かれる
丹精の花むぎむぎと千切る鬼
君と組めばむぎむぎ負けることはない
あれ程の夫婦むぎむぎなぜ離婚
怨念の深さで落とし穴を掘る
むぎむぎと死なぬつもりどナーカード
うっかりと味方の弾を背にうける
紙さねになつてしまった投資株
正論をむぎむぎ数で押し切られ
優柔不断むぎむぎ逃がす青い鳥
酒ビール出てはむぎむぎ帰れない
むぎむぎと一万円の化粧水
むぎむぎと第九条は破らせぬ
娘を盗りに来た男にも出す昆布茶
若気とはむぎむぎ黒い髪染める

住

新一 正坊 美女 寿美 セツ子 完次 恭昌 雅文 達子 比ろ志 章久 湖風 真理子 洞庵 美代子 憲太郎 恭昌 伽羅 比義 淳一 千代 賢子 恵美子 笛生 英子 天笑

泣き寝入りしない女の五寸釘
地 天 男一匹むぎむぎ後ろ振り向かぬ
軒賃して主客転倒した無念
兼題「使う」 高田 美代子 選
補助椅子をみんな使つてうれしい日
ルーキーが敗戦処理に起用され
若いねえ年中シャワー使てはる
ドナーカード私の脳でよかつたら
人使い荒い女を憎めない
使うのが惜しい土産のココシヤネル
奥の手を使う機会が逃げていく
気前良く使つて旅の老夫婦
火を使うだけが人間なんですか
使用前使用後買つてみたくなる
人間を使い捨てる裏リスト
無駄使いしましたちよつと千鳥足
小回りが効いて便利に使われる
生きたくて右脳左脳をくき使う
ウルトラCを使う左脳が錆びてくる
足の裏使つて老いと向かい合う
声色を使つて犬を手なずける
七色の紐に使つた残り布
いつ使うつもりかたと貯めてはる

ワンタツチそれで使える人といふ
よく使う言葉が少し摩りきれる
まだ使えそうな男もクビにされ
いじめとは違う呆けないよう使う
使つてはいけない銃を持ちたがる
使つてもまだまだいける綴れ帯
核使うどんな理由がありませんか
生きているうちと母ちゃん無駄使い
上下に挟まれながら使われる
使い捨ててみたらに保険かけられる
奥の手を使うゆとりのある笑顔
古ぼけた使い勝手のよいカバン
住 使いみちまだあるらしい呼びに来る
実印をはじめて使う良い日和
道づれへ使い回しの利く男
使つたのはわたし わたしのお金です
使い方しなくなつて弾が出る
人 一回も使つたことのない勇氣
地 暗転の舞台にあつた使い捨て
天 使い捨てカイロのように愛終る
軸 あと少し上手に使いたいいのち
兼題「欲しい」 田中正坊 選
まず一勝欲しいルーキー流す汗

保子 大輪 天笑 昭子 弘一 舞夢 丹吉 月子 英華 英子 朝子 千里 たもつ 柳伸 保子 義子 利武 扶美代 森子 寿美 庸佑

旦那様いつも料理をして欲しい
マンションと車くださいサユウナラ
駆け込み寺欲しい男が増えてくる
やすらぎが欲しくて辿る花の寺
人並みのくらし欲しくて島を出る
欲しいもの何もないので貯めてます
姉さんが欲しいとねだる一人っ娘
何時までも生きて欲しい母白寿
欲しいもん何でも買えと怖い人
欲しいものちゃんと分っている夫
ゼロひとつふやしてほしいおこづかい
欲しいものは妻の笑顔と子の笑顔
飽食の驕りが無い物ねだりする
ルイビトン買ったらダイヤ欲しくなる
一人でもいいから味方欲しくなる
ミサイルを欲していない空の青
友達もっているから欲しくなる
銀行で欲しがることはやめにする
欲しかったやつと来ましたこのとり
欲しいもの命の次はなんですか
一票が欲しい欲しいという連呼
両親の愛が欲しくてぐれにいる
欲しいものは一つ真つ直ぐな炎
欲しいから裸になって動こう
傷心を癒してくれる風欲しい
欲しいものはほんとの愛の一にぎり
エルメスが欲しいと妻に脅かされ
欲しいものの金と名譽といい女
傘寿過ぎ一番欲しい安楽死

柳右子 充子 湖風 彌生 瑠美子 正一 緑 千里 ばっは 大輪 寿美 新度 新一 惠子 惠美子 昭子 ゲン吉 鹿太 つづや 森子 利武 舞夢 倫子 利昭 公誠 三男

鍵かかる部屋より欲しい親の愛
体力が欲しいと思う八十路坂
ボナナスが欲しい年金暮らしにも
欲しい物揃えてさむい部屋である
代議士になると欲しい裏の金
佳
ヒロシマ忌水をたつぷり供えます
ユニクロでやつぱり欲しいものがない
親の愛ほしい施設の子の瞳
欲しいものみんな与えた子が背く
あれも欲しいこれも欲しいとまだ女
夫婦でも一言欲しいありがとう
人
アリバイが欲しい男と飲んでいる
地
欲しいものまだまだあつて生きられる
天
欲しいものみななくなつて天国へ
軸
兼題「信」 田中新一選

弘風 紫香 笛生 湖風 萬的 千代 千歩 賢子 英子 朱夏 五月 嚴 房子 重人 伽羅 洋 一風 金太 隆盛 朝子

極楽が有ると信じて聞く法話
まだ逢える明日を信じている蜚
わたしの評価ローンの額で決められる
信衆の数が重たい人生譜
父の掌にある樂園を信じよう
五十パーセントオフに信用を吊るす
信じたら鬼が仏になりました
セクハラにならぬ自信で手を握る
信頼をされて雑用ふえてくる
おそ咲きを信じ悔いまいまわり道
左手を信じて火種抱えている
ひたすらに自分信じて橋渡る
信じればみんな味方に見えてくる
背信に落ちる夕陽が大き過ぎ
信念に生きて軍手が破れてる
信用はしても妻の厚化粧
信仰と別に汗拭く奥の院
不信感抱いてリハビリまだ通い
大根の白き信じることにする
この平和信じきれず物を溜め
禁煙の自信たばこのそばに居る
信用度A Aは箆筒だけ
性善説信じつまずきそうになる
渡された薬信じて飲んでます
古いが好きでよいとこだけ信じ
信じてる証拠に駭かいている
ひと言を信じ火の川渡りきる
ホカ弁の味信じてるひとり者
信のかたちに歯ブラシが二本ある

はじめ 朱夏 弘一 湖風 度 惠美子 倫子 洞庵 惠子 弥生 岳人 楓 千里 良子 アキ 靖巳 完次 千里 真理子 しばお 修 重人 利武 千歩 紫香 いわゑ 義子 惠美子

土に生き土を信じて種を蒔く
信用が出来なくなつた水 空気
信すれば友だちがたくましくなる
どん欲な女にさらされた私信
妻だけは信じていると信じた
信じてる方がとっても気楽です

軸

尺八の穴のひとつに信がある

兼題「ゆらぐ」 橋高薫風選

榮転の誘いはゆらぐ北の果て
引退の気がゆれ動く勝ち名乗り
法名をもらい煩惱から醒めぬ
日本が揺らぐ男の細い眉
すげかえた首でゆらいでばかりいる
ときどきはゆらぐ地球に住んでいる
チャペル聞くまでゆらぐ心を見つめあう
足もととはぐらついているが意気盛ん
ゆらいでもあなたの愛から飛び出せぬ

柳 弘 大 輪 螢 充 子 瑠 美 子 伽 羅 照 子 充 子 賢 子 楓 楽 正 坊 柳 伸 天 笑 セツ子

観覧車で愛の告白聞くめまい
遠い日の記憶へゆらく絵蠟燭
ゆらく心軽いジョークで和ませる
揺らいでいる心サタンのに覗かれる
一言で三十年が水の泡
銀行がゆらくあの金どうなるの
上層部ゆるがぬ地位を血で固め
ほかの一票突つ支い棒でございます
大樹にもたれ心のゆらぎ止められぬ
少子化に大屋根瓦ゆらぎ出す
足元がゆらいで散つてゆく家族
子を生んだ数だけ倅せがゆらく
ゆらく日もあつたが無事に古稀近し
パドックで赤鉛筆がゆらぎ出す
見るだけの気持ゆらいだ光る石
ゆらく日も焼く日もありおんなです
暴走のスリル命がゆらく時
胸の灯もゆらいでいます大文字
死と恋にゆらく揺れて行く八十路
理性ゆらく夏の匂いの夕暮れは
男の方がゆらいでいます観覧車
引き金を手をかけてからゆらぎ出す
子子のゆらく生き方したたかな
大夕日 ゆらくわたしを落ちつかす
憎しみがゆらくでつかい海に会つ
路郎忘やゆらくことなき塔ひとつ

佳

ゆらくだけゆらいで風になるはなし
酒に酔いゆらいでいますピーヒャラ

淳一 千歩 三男 玄也 義 遠野 幹 子 寿 子 アキ とし子 アキ 満州 蔵 庸 佑 泰 子 雅 文 鹿 太 真理子 朱 夏 惠美子 千里 高 栄 いわゑ 丹 吉 洋 森 子 瑠 美 子

再会へぐらりとゆらく曼珠沙華
信頼がゆらくと何も残らない
金にゆらく庭石に怒られる
去り際に心ゆるがす事を言う
地 天 絆又ゆらいでつづく凡夫婦
大黒柱がゆらく保険をかけてます 小西幹斉
夢に見てゆらがぬ影は恩師だけ

軸

川柳勉強会「ボエム」10周年記念句会

とき 13年9月9日(日)
ところ ビッグハート出雲 茶のスタジオ

(出雲市駅南口東隣)

開場10時・入切12時・開会13時

(欠席投句拝辞)

句集鑑賞 川本 畔(ボエム合同句集)

兼題(各題2句)と選者 披露 14時

「命」原 章峰・「美」金築雨字

「不」但見石花菜・「袋」近藤ゆかり

「唄」坂田和歌子・「走」川本 畔

「底」松 彬謝選

会費 2000円(昼食・合同句集呈)

連絡先 690 島根県松江市西川津

〒0823 872-11 松 彬宛

Tel 0852-122-7671

主催 川柳勉強会「ボエム」

残暑お見舞申し上げます

カルチャー教室

エイシス東大阪

とき 第三木曜日 1:00~4:00

ところ 近鉄布施駅前ビブレ5F

講師 河内 天笑

生嶋ますみ 坂本ミヨノ

井尻 民 飛永ふりこ

伊藤 博仁 中岡 妙子

内海 綾乃 西川 節子

笠井 欣子 星野きらり

神原まさと 堀 富重

吉川 寿美 町田 達子

熊代 菜月 松岡久留美

国見 蘭香 安永 春

古手川 光 山本 宏至

残暑お見舞申し上げます

とよなか川柳教室

橋高 薫風

安藤 寿美子

井本 清山

宇野 義江

上本 エミ子

江頭 トシ子

榎本 舞夢

小倉 藍

奥村 しずえ

粕屋 都代子

木村 美代子

岸田 知香子

久保田 千代

児玉 蛙

新宮 英子

進藤 千津子

田中 正坊

田中 節子

谷垣 幸代

谷川 勇治

辻川 慶子

中澤 伽羅

中田 朔子

西内 朋月

平井 美智子

福田 満州

星野 きらり

前田 豊子

松岡 久留美

みきわきみ

宮田 緑骨

安永 春

吉川 道子

湯浅 馬洗

残暑お見舞申し上げます

もくせい川柳会

橋高 薫風

安藤 寿美子

相田 博子

石原 靖巳

江見 清

岡本 太郎

河井 庸佑

岸田 知香子

黒川 紫香

小池 しげお

小林 信

小住 周舟

住谷 石坊

田中 正人

田置 重子

辻川 慶子

西田 柳宏子

藤村 柳宏子

古川 喜美子

満仲 喜美子

宮田 緑骨

7月号には誤って物故者を含む古い会員名が掲載されました。

残暑お見舞申し上げます

番傘川柳本社

森 中 恵 美 子

〒566-0046

摂津市別府二一〇一〇一五〇三
TEL 〇六―六三三四〇―七三九五
FAX 〇六―六三三四〇―七三九五

残暑お見舞申し上げます

番傘川柳本社

中 田 た つ お

〒590-0018

堺市今池町六丁四一九一〇二
TEL 〇七二―二二二五二九八
FAX 〇七二―二二二五二九八

残暑御見舞

阿 萬 萬 的

〒565-0874

吹田市古江台三一三三―三―四〇八
電話 〇六―六八三一―二二七三

第53回 西日本川柳大会

- ◎と き 平成13年9月2日(日) 午前9時半から
 ◎と ころ 久米南町文化センター2Fホール・久米南町中央公民館
 岡山県久米郡久米南町下弓削(JR弓削駅北徒歩10分)

◎兼題と選(各題2句吐)

「花道」	時の川柳社(西宮)	小松原 爽 介	選
「オープン」	ふあうすと川柳社(加古川)	泉 比呂史	選
「秘密」	川柳塔社(堺市)	河内 天笑	選
「明日」	鳥取県川柳協会(鳥取)	小林 由多香	選
「歳月」	川柳塾(岡山)	武村 一美	選
「参加」	弓削川柳社(久米南)	山田 止水	選

◎出句締切り 11時半 開会 12時半 被講 13時半

◎特別課題 1題 当日発表

◎おはなし 川柳塔社名誉主幹(大阪) 橘高薫風氏

◎表彰 総合得点で10点まで(投句者の作品は出席者の作品と別に選をして表彰)

◎会費 出席者 2,000円・投句者 1,000円

◎投句先 ☎709-3614 岡山県久米郡久米南町下弓削 弓削川柳社大会係宛

☎・FAX (0867) 28-2531

主催 弓削川柳社

◎前夜祭 平成13年9月1日(土)

15:00 句碑除幕(橘高薫風・西尾 栞氏ほか)

18:00 川柳まつり 公民館南側駐車場 20:00 閉会

◎宿泊 津山市 ホテルアルファ 1

句碑除幕・川柳大会への参加お問合わせは川柳塔本社へ

しまね文芸フェスタ2001

と き 9月9日 受付 9時30分
 ところ 安来市民会館
 開 会 10時
 講 演 10時20分「賢治文学の魅力と謎」
 講師 入沢康夫氏
 (明治大学教授・詩人)

川柳大会 (部門別交流会)

ところ 安来市立中央公民館音楽室
 兼 題 「夜 行」 尼 れいじ選
 「びっくり」 杉原 具人選
 「ワ イン」 当日出席者から
 「ベ ット」 竹内寿美子選
 「不 思 議」 恒松 町紅選

出句メ切 13時30分 各題2句
 会 費 1000円
 欠席投句 1000円 (切手は80円12枚)
 投句締切 8月31日
 〒693-0052 出雲市松寄下町619
 尼 れいじ宛

主 催 島根県文芸協会・島根県ほか

第15回 堺市民芸術祭川柳大会

と き 13年9月16日 (日) 13時開場
 ところ 堺市立梅文化会館3階第一講座室
 堺市桃山台2-2-1 Tel072-296-0015
 (泉北高速鉄道・とが美木多駅3分)

おはなし「近ごろの柳詩・柳論」中田たつお

宿 題 「スイッチ」 藤田 早苗選
 「計 る」 河内 天笑選
 「ロボット」 坂元 一登選
 「魚」 墨 作二郎選
 「め し」 田頭 良子選
 「運 ぶ」 長江 時子選
 「目」 山本希久子選

席 題 なし・各題2句締切 14時
 出句料 1000円 (作品集・参加賞呈)
 賞 各題秀句に呈賞

主催 堺市文化団体連絡協議会
 後援 堺市・堺市文化振興財団

連絡先 堺川柳協会
 〒590-0944 堺市鶴屋町東1-2-2
 梶川雄次郎方 Tel072-222-5298

プレ夢フェスタとっとり

文芸祭川柳大会・第25回鳥取県川柳大会
 第22回川柳塔鹿野みか月川柳大会作品募集要項

趣 旨 平成14年の夢フェスタとっとり(第17回国民文化祭
 とっとり2002)の成功に向けリハサル

日 時 平成13年10月21日(日) 午前10時30分締切

当日投句「峠」 泉比呂史選・「庭」 梶原サナエ選

「走る」 川上大輪選・「夕焼け」 竹治ちかし選

「読む」 山田止水選・「鏡」 八木 千代選

参加料 事前投句者10000円・投句してない方20000円

主 催 鹿野小学校体育館(鹿野町鹿野)

鳥取県・県教育委員会・第17回国民文化祭実行委

員会・鹿野町・県川柳作家協会・みか月他

事前投句応募規定

①各題2句ずつ未発表作品

②応募用紙(請求は事務局へ)に住所、氏名、電話、大会

及び前夜祭への参加の有無明記

③締 切 平成13年8月31日(金) 当日消印有効

④応募料 一般10000円、小、中、高校生無料

振込先口座番号 0133001129645

⑤表 彰 鳥取県川柳作家協会宛

⑥事前投句の題と選者 特選及び入選発表、県知事賞他

「安 心」 橘高 薫風 選

「うれい」 森中恵美子 選

⑦応募先及び問合わせ先

〒689-0405 鳥取県高野町鹿野1517

第17回国民文化祭鹿野町実行委員会事務局

TEL (0857) 841229・08571231170

おどろおどろ

毎月25日締切・30句以内厳守

編集部

岸和田川柳会

長谷川昌万報

待ちぼうけひどい仕打ちと空仰ぐ
温暖化地球の仕打ちとも知らず
塵一つ許さぬ凄塗り塗り師の目
凄腕のシェフの料理に舌鼓
論戦に賭ける女の凄まじさ
ゲーム機が気軽に映す凄事故
素通りは出来ぬすこい人だから
腹立ちをふっさる凄俄か雨
家計簿に妻の凄さを書いてある
背筋シャンソ味に合せて読む太夫
やれ日本背筋右肩ヒンとせよ
負け犬の背筋へささる無言の目
ばあちゃんの背筋を伸ばすダンス靴
もうけ口即座に答はねかえる
迷わずに即座にノーと言う勇氣
誘われて即座にOK縄のれん
ベル鳴って即座に立てぬ老い二人
ポックリ寺すぐに効いても困ります
年金の財布即座に妻が持つ

弘子 蛙城 盛之 仁基 苑子 さよ子 狸村 信博 一脩 鍊太 みつ江 昭二 みよ子 鹿太郎 路子 穰一 けい子

ばあちゃんの体験談に花もたす
失恋の七八回は私にも
体験の学習子供の心打つ
温顔が地獄くぐつてきたと言う
体験に誇張を混ぜた酒談義

高槻川柳サークル卯の花 川島麗云児報

結論はポックリ寺で出すつもり
結論にひとりこだわる天邪鬼
結論が見えぬ人生面白
トネルを真ん中でつなぐ神の技
メールより筆で心をつなきたい
母の日の絆をつなぐ長電話
河川敷有為転変を知りつくす
成金趣味だらうか絨綴敷きつめる
单身赴任敷き放しと言う布団
二人の恋すこしの嘘を下敷きに
さりげなくハンカチ敷いてくれた女
マンネリを破る真紀子の勇み足
逆立ちでマンネリの血を入れ替える
マンネリと誰も言わぬい米の飯
マンネリを倅せそうと言う他人
そっくりな人を見ているみられてる
モンローにそっくりなんて好かんタコ
快晴の富士が絵はがきそっくりに
そっくりの似顔絵だった逮捕劇
雲行きをそっくり見てた母のお茶
控え目なことがそっくり似た親子
まだ時間あるのとわたし帰さない

淑子 松風 東吉 笑司 靖巳 吉之助 義一 治三郎 五月 柳安子 萬一的 孝一 無緑 満寿蔵 石舟 尚士 活恵 節子 澄子 求芽 武史 メ女 泰雄 紫香

花筏へ乗せた女が寝てしまい
寝たきりになるなど靴を母の日に
とまり木はどれにしようか迷う鳥
死角から鬼の視線が飛んでくる
自己主張押すか引くかの風を読む
訴状など書かない妻よありがとう
神様となぐ手だから汚せない
だましやすいい妻だからこそ騙せない

川柳塔みぞくち

小西

雄々報

鉢植えの牡丹の花がこぼれそう
百円の鉢がペランダ楽しませ
母の日へ鉢に愛寄せ宅配に
毛虫でもわたし貴男の蝶になる
懐かしい火鉢に花が生けてある
丹精の小鉢で競う花の精
鉢飾り心も豊か農の初夏
ガーデニング嫁の趣向に心満つ
ガラス鉢涼しき演出してくれる
良い鉢で花の値打ちがぐっと出る
初夏なのに鉢に詰めこむ寒い記事

尼崎いくしま川柳会

春城

年代報

晴美 スミ子 よ志子 秀夫 庸佑 磯 しげお 諷云児 和代 弘子 公美枝 鈴枝 智恵子 正光 久枝 豊枝 静江 康女 雄々 正子 純 十四郎 みち子 武庫坊 吉太郎

ゆきずりの亡夫に似ていた後影

過疎の村私の影に会いに行く

励ましの陽があり濃い影がある

灰皿の中に頑固な影がある

紫の襖紗いそいそ孫の婚

若かつた土産に小さなアメジスト

紫水晶彼女の指のいと細き

鉄線のむらさきというレモンティー

あじさいの似合う女の蛇の目傘

玄関で迎える花の濃紫

花菖蒲紫色が雨に映え

紫の袴なつかし若き日々

老大の眠るが如く旅立ちぬ

話し好き聞き上手になれなくて

青葉の風に染まらんと目目を瞑る

陽炎がふわり野心もふわり浮く

緑に濡れて森の出口が見えて来た

つるばらは八方美人人臭し

感情のあふれる青い日のノート

あじさいにいま特攻のホタル飛ぶ

誰となく声の聞きたき夕暮れは

コスモス揺らり生年月日いつわつて

雲一つないのに橋が渡れない

ジェスチャーが大きくなつていく話

東大阪市川柳同好会

森下 愛論報

人波にひらひら花の通り抜け

ひらひらと風の野心が糸を切る

格好いい別れひらひらグッドバイ

糸子

郁子

しづ子

芳子

弘治

昭三

紫香

和子

満寿蔵

東園

節子

千恵

愛子

幸子

年代

義芳

光穂

比る志

静

孝一

薫

恵子

歌子

久子

愛論報

章久

晋吾

朝子

聞き上手忘れ上手で憎めない

忘れ物届き心に灯がともる

回復期薬飲むのをよく忘れ

旅は鈍行忘れた歌を思い出す

今日もまた妻の小言で幕が開く

忘れねばならぬ迷路が一つある

塩味のきいた小言に鍛えられ

上役の小言屋台に捨てられる

リーダーの決断雲行察知する

引き返す度胸リーダー試される

五月雨の向こうに亡母の蛇の目傘

花あかり妻が美人に見えてくる

リングの唄は幻でない生きている

幻でなかつた椅子を撫でている

色褪せた幻となる母の影

三幸川柳教室

三宅

浅葱色今も記憶に母の声

我が子には浅瀬にレール敷いておく

その先を吞んで埋める浅い溝

胸のうち見抜く絆が浅すぎる

褒め言葉盛るには血が浅すぎる

分別が浅くて迷う蔓の先

一夜漬け底の浅さをさらけ出す

外堀がゆるゆる浅くなる焦り

約束と記録はいつも破られる

約束の歯車合わせ軋みあう

約束を雨が流した花筏

約束の四つ葉は今日も見つからず

雅文

みどり

度

英一

秀夫

湖風

三重子

猪太郎

萬的

緑

美鈴子

賢子

東雲

あや子

愛論

保州報

よし子

起世子

利治

純子

和子

昭枝

嘉平

鉄治

義雄

マリ子

三千子

正一

佳句地十選 (7月号から)

羽津川 公乃

もう少し飲んだら雲に乗れるのに

片足はいつも梓から出してある

下りるしかないといヒロー独り言

水を飲む辞令一枚ふところ

憎い人なのに心を出て行かぬ

桜散るその後は誰も振り向かぬ

あたたい文字だと思ふありがたう

良い町だ子供笑い声がする

同情はするが自分で起きなさい

わが道をただ一筋に尾を振らず

九条はきつと守ってくれますか

突き指のままで約束した小指

指切りができなくなつたEメール

頂上が見えるが鬼も待っている

加減乗除の人生やと乗り越える

年金がやつと届いて旅プラン

長い祝辞やつと終つてお目出度い

やつと今明かせる事が多すぎる

三寒四温暖の氷点やつと消え

よっぽどのことかしらちんから電話

網棚の新聞だけですます人

あのしちんと言われトイレを出られない

しちんが棺で目玉むく花輪

しちんの父がハワイと言ひ出した

しちんの家のお風呂は寝て入る

靖巳

しげお

三重子

蘭幸

悦子

大輪

朝子

知恵子

さと美

玲子

和代

章子

保州

碧

さち子

桂香

正圃

満洲子

栄之進

千秀

美子

伸二

公子

豊太郎

みね

しぶちんの舌を出させるお医者さん
しぶちんの財布の底は返し縫い
ユニセフへ寄付しぶちんの美学です

京都塔の会

都倉

求芽報

寢床から指図トマトの作り方
父の日に電話をくれただけのこと
目も耳も落ちぶれ出した足の冷え
散歩道なかなか建たぬ家がある
合格発表 見に行つてからさくら餅
お構いをしない気遣いだつてある
御池堀川おあがりやして二条城
鯉も仲間に入れてやろうよ手を叩く
今日好日 神泉苑の昼御膳
由緒書の中へ自分を入れてみる
樹齢千年 松は静かな息づかい
一同の批判がましい目が痛い
一同の中で自分を見失う
一同のうしろで頭下けている
母送る野辺あじさいの花ざかり
着まわしを上手に着てる伸びざかり
腕白ざかり蛇も毛虫も面白い
席譲りニキビざかりの目が笑う
盆栽の育ちざかりを矯めている
天敵はいない熟女のパーティー券
天を突く一本杉がある故郷
天敵はみな亡くなりぬ五月闇
酔っぱらい天下国家は俺のもの
天職と惚れてた今日の定休日

町子 登美代 朱夏 春蘭 春蘭 年代 孝一 美穂 柳宏子 メ女 英旺 芳子 寿美子 典子 幸代 澄子 百合子 福子 紫香 求芽 吉之助 高栄

木々に雨 天が授けた贈物
天啓が閃めくメモの一字あり
ボケットの千円天の助けかも
自己崩壊 天も味方をしてくれず
プロジェクト終る日の天澄み渡る
故里で天に唾したのを嘆き

川柳塔唐津支部

久保

正剣報

深呼吸して振じ伏せている怒り
老いてゆく変わる世相に残されて
森光子と同じ歳だと言ふ女房
若葉萌ゆ生物すべて恋盛り
八十路越え痩せも肥満も神まかせ
死んだかと破顔一笑暮の話
ワテンボずれた夫婦を演じ切る
団地妻三人寄ればあの話
立つちしてこまでおいで手を捻げ
父の戯曲は祖母がモデルになっている
電車では席が離れたベアルック
産声が一寸先の闇を突く

川柳塔おっぱい吟社

木村あきら報

噂など軽くないなした太い眉
行話る度に貰つた母の知恵
迷いから覚めてぶつくり髪を切り
灯が消えたようだと妻の旅三日
滝ッポにひっそり咲いた百合一輪
人のため本気になれる妻に負け
この指に止まりたくない人も居る

宏子 啓子 益子 萬的 正坊 薫風 兵八郎 輝夫 實 勝夫 水笑 晴翠 高明 幸夫 虹汀 四郎 正剣 放任

人生の節目ふしめに亡夫偲ぶ
水琴窟優しき音色足を止め
ホテル棲む古里の水いつまでも
必要とされる十指の自己主張
水変えて仏壇の花よみがえる
生きたため無くてはならぬ火と水は
母さんを邪険に帰した迎え傘
筋書きのない人生の散歩道
水臭い言葉呑み込む夕餉すむ

サークル檸檬

小林

一夫報

正解を出してみんなに嫌われる
つじつまを合やすひとことから闇へ
病院に行く人と病人らしくなる
長雨に三年日記湿りがち
梅雨の空アラスカ思考の賭けに出る
ああ言えばこう言う仲の家族です
恋なのか逢う口実を探している
紫陽花と梅雨の足音聞いている
ひとり居に不老の薬だけ欲しい
逆縁へ心が重い梅雨しごと
紫陽花に雨も描きたすクレヨン画
ちよろちよろと尻尾が覗く言葉尻

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

五月晴れ無口の人と居る疲れ
持病一つかかえたままの五月晴れ
五月晴れ団地に鯉も泳ぎだし
鬼平を見てる五月雨聞きながら

くに子 治延 吟笑 ひかり 輝夫 文仙 寿々女 いさむ 貞月 あずき いわゑ 希久子 澄子 智恵子 哲夫 遠野 房子 靖巳 義己 楓楽 喜寿子 能子 会美 弘直

五月の風に靴がふわふわ動きだす
ジェラシーも乗せて噂はひた走る
シャボン玉軽い噂は消えてゆく
独り居は風化する頃暮さく
昇格の噂のままで来た定年
これも供養あれも供養と酒をくむ
野も人も命輝く若みどり

倉吉川柳会

松本よしえ報

さしもの師板をながめて考える
少しだけ効いた気もする薬風呂
計算に弱くてさしもの師は不向き
一等を指す気持を源に
湯治場の弁天さんは隙だらけ
ボチの家妻が立派に組み立てる
梅に驚うまい話は落ちてない
やつと食うそれでいいんだ露天風呂
梅の木に毛虫一家が住んでいる
騒音を抜けてかじりと露天風呂
メーカーが違うさしもの間に合わず
さしもの師神経質で変人だ
長風呂をしても私の灰汁抜けぬ
風呂場には秋田小町のぬか袋
風呂上がりが皆善人の顔になる
入浴剤変えて温泉梯子する
花散って忘れてしまふ梅古木
簪も茶髪に押されりストラに
万病に効きます梅の紋所
鼻ピアスさしもの父もただ啞然

シマ子 欣史子 慶子 香住 あずき 清芳 アキ
瑛子 睦子 きみ子 智子 和歌子 一夫 ゆり子 喜美子 賀寿恵 秋草 蛭 かつみ 芳光 よしえ 前喜美子 和枝 玲子 龍枝 節子 幸子

さしもの私も私も軋む歳になり
絵に歌に旅の同伴にもてる梅
地震後は抽斗が開く古軍笛
釘一つ使わぬ箱の黒光り
呼吸していろおふくろの桐軍笛
おにぎりをチン！梅干も熱くなる
米寿まで目指して登る縄梯子
赤門を目指し果して幸せか
負け犬の傷を癒した露天風呂
青い梅かじって過去がほろ苦い

大原川柳社

矢内寿恵子報

ほころびも傷も縫います母の針
賞味期限パフを叩いて引き伸ばす
後継者不足に傾く過疎の村
針仕事何処へ預けた新世代
足痛の水を取られる注射針
化粧して化かしがきぬ歳になり
こんやくの身にもなつてよ針供養
化粧してみても変わらぬ歳になり
化粧映えせぬが女の身だしなみ
一筋の涙乾いて紅を引く
やんわりと心を包む薄化粧
美しく老いる心に化粧する
化粧には縁ない母の生きた道
検診日母はいそいそ薄化粧
化粧する暇も惜しんだ日もあった
美しい笑顔化粧などいらぬ
風呂上がりが化粧落とせば別の顔

康子 悠子 次男 京子 石花菜 完司 重忠 克枝 雄彦 照彦
はるみ あすなろ 絹子 昭子 静子 しず 巴子 喜美子 こふゆ 敏子 南花 玉恵 さちこ あやこ みずえ 辰江 悦子

化粧落してピエロ泣きたい日もあらう
ひと言を託びて化粧のりがいい
お化粧を落して主婦の顔になる
やさしさと厳しさで行く母の針
亡母に似てきたなと思う朝鏡
化粧映え妻となる日のセレモニー

川柳会梨花

石上 悦子報

泡の中昔むかしの寓話なり
人混みのプラットホーム妻が消え
匂の味にはほど遠い静物画
焦らずと流れ行く雲見ていよう
口紅を拭う未練を振り切つて
どの子にも互角に親を看る権利
大阪弁はんなりかすむ昼の月
紫がはんなり似合い恋してる
くもり硝子のなかではんなり咲いている
寒牡丹はんなり咲いて喪が明ける
はんなりと傘弄ぶ春の雪
熊の相手に大仏さんがまわし締め
インソップの動物どれもよく喋り
耳底に消えぬ寓話の一つある
鰐鰯と兎と神のものがたり
ひもとけば愛と忍との絵巻物
鯛焼きの踊る絵を貼る幼稚園
オカリナを吹くとトトロの絵になった
欲しいのは平凡という絵巻物
春一番吹いて童話は絵になった
曼陀羅の一番下に母を描く

妻子 みさえ たづ子 ひでの はじ芽 寿恵子
和歌子 一夫 求芽 睦子 幸子 高栄 よしえ 美ツ千 忠良 (和) 東雲 美恵子 螢 宏 章久 友真 修 多哥由 芳光

鑑定団絵巻きは紙魚に食われとる
雪の絵にポトリと落ちた花の首
くすりより信じています阿弥陀様
嬉しな弥陀名号と二人づれ
春弥生思い出したり忘れたり

うぶみ川柳会

上田

宣子報

ウフフ君はまだ若いからわかるまい

回線が混乱してる一夜漬

母さんが寝ると家中混乱だ

蝶になるあすへさなきのウフフフ

嘘つきの脳が混乱する四月

花見酒肩腕借りて終列車

難しい字は片仮名で書いてある

上げる旗手足合わなくなってる

ウフフフつくしが土を割っている

眼帯の片目が鋭くなっている

片生りのうちは弛めぬ蝶糸

片笑くは鏡の前で面面相

片肌を脱げば見事な龍躍る

一ぺんに言うな混乱するだけだ

陽を注ぐと紐になったり蛇になったり

北上をする花はしこ酒はしこ

片道を片っ端から塞いでる

混乱をさせて真実遠くなり

想い出し笑い小さくついウフフ

わたくしに片道切符あれば良い

思い出し笑いウフフとこそばゆい

臙夜に女ウフフと薄笑い

蟹郎

きみ子

典子

重忠

幸代

代

子

天

登美枝

良男

羅奈

黙光

也恵

螢

ひかり

汲香

葉士人

ひろこ

華子

静生

ユリ子

美ツ千

諷人

健一

芳江

くにお

睦子

あづま

重忠

肩籠の中で炎えて居たのか片想い
春のうわさこはれる桜の花びらよ
ふくみ笑いつもしている黄信号

ふくべむら川柳

橋本多哥由報

脇役でわさび主人を引き立てる

九い石いろいろ苦労してみたい

故郷のわさび田亡夫の声を聞く

九い目々コロコロ笑う嫁と住む

母さんの背なは丸くて温かい

わさびこそ夫を支える妻の役

丸裸になって人間強くなり

わさびさく妻の料理に涙する

多哥由

竹原川柳会

時弘 一路報

お買物主婦の気持になってみる

鳩の目もやがては攻めてくるだろう

財産も名誉も捨てて鳥になる

朱鷺のこと今年も人は語り合う

上昇気流景気は鳥に聞くがよい

話したいインコ私の口を見る

スランパンへ鳥にもまだ正座する

ケキョケキョの鶯はまた二軍かな

青鷺のポツリ寂しさならわかる

パンゆえに生きねばならぬ人生よ

乾パンで育った私達が丈夫

定年を区切りに朝食パンになり

食事制限哀しやパンを持ち歩く

鮎パンのまるさよ母の顔がない

不

一枝

雄人

宣子

依子

信子

はじめ

寛子

春恵

操子

和甫

多哥由

小寺

花菱報

謙一

きよし

妙子

ヒサ子

てる

隼人

順風

慕情

銀波

ふさ

花匠

雅城

愁女

ツネ

井蛙

千加子

百年の計より今日のパンのこと
新緑へ杖がたよりの山登り
空の青こんな心解き放つ
澄んだ眼を昔はみんな持っていた
古里に何処にも負けぬ澄んだ水
せせらぎに谷間の水は清く澄み
澄みわたる大空さようも頑張るぞ
渡り鳥途中の海は澄んでたか
とき澄まし心の綾を紡ぎこむ
命あるものみな愛し天が澄む
泰然自若水の澄むのを待つとする

川柳塔みちのく

小寺

自画像にフグの笑顔も添えてある

地雷ゴロゴロ民の心を衝く不安

頭から恐いと逃げる河豚料理

悲しみを包み喪服の座に坐る

河豚鍋に先に誰も箸つけず

河豚さしのすきとおる程薄く切り

断られても仏の慈悲に赤い紙

戦場へ有無を言わねぬ赤い紙

ごろごろと木場を外材占拠する

河豚刺しで話がはずお酒の輪

こわごとと念仏となえ河豚の味

君となら死んでもいいさ河豚料理

雷よりもナイフが怖い新世紀

河豚提灯思いの丈の灯が点る

台所嫁は時々河豚になる

何もかも包んであげよう母のしわ

調理師の目が皿になる河豚さばき
河豚鍋に大阪弁と津軽弁
哀しみを喪服で包む日の孤独

川柳塔鹿野みか月 土橋

新世紀何も変らぬ第一步
ドア開けるまで覚えてた物忘れ
片想いショートカットの風になる

合併に希望大きく膨らみます
合併のちからは倍の倍出せる
お隣と合併をして酒満ちる

愛情が満ちて逃げ場のないベット
満ちるほどない脳味噌が萎縮する
水満ちた田は緑濃くすこやかに

満たされて意気揚揚の千鳥足
父の子であると信じて満ちている
太陽を拝んだ古老目の裏に

太陽が笑って花も笑いだす
太陽は燦々職安は暗い列
いつまでもそのまま丸くお月様

そのままで今のニーズに合っている
そのままでいいよ番茶も出花です
うやむやの風そのままに不信感

そのままだと飛躍にされた石
天の譜のリズムへ光る虹となり
譜を知らぬ母の上手な子守唄

人生に譜の序列とか凡夫婦
トンチンカントンチンカンと譜が勇む
わたくしの背骨になっている系譜

五線譜のリズムときどき浮気する
ときめきを編む二千二年の楽譜
命令で死ねるいのちの譜に座る

川柳塔まつえ吟社

弁解はしない射手座の空にいる
つまずいて空の青さに救われる
大空へ瞬く星が詩になる

点と線のないで私の空にする
梅雨の鬱空は妥協をしたがらぬ
大空にストレス放つ鯉のぼり

地図にない場所の時々立っている
風吹いて未完の地図が歩き出す
電子地図見たいところが出てこない

地図の中ボプラが少しずつ伸びる
私の地図大事なこと破れている
杭打ってわたしの地図を守っている

ごま油一滴落として母の味
掴めない胸に焦りえる油汗
泣団扇老いが耐ええる油照り

油菜の花へ蝶々も二人連れ
油揚げ四十九日の喪に服す
油絵の裸婦の胸から乳が出る

大切なひとに大事な嘘をつく
妻はもう信用しない明細書
4Bでしつかり嘘を書いている

恒松 町紅報

睦子 喜与志 ひろ子 かつ乃

久枝 多賀子 久子 紫見

久枝 多賀子 久子 紫見

久枝 多賀子 久子 紫見

久枝 多賀子 久子 紫見

久枝 多賀子 久子 紫見

久枝 多賀子 久子 紫見

久枝 多賀子 久子 紫見

嘘を吐く度に抜け毛が多くなる
美しい嘘ならそっとしておこう
どの嘘にしよう役者の胸の内
大空にドレミの音が響き合う

バイオリンの響き亡夫がひいていた
プロポーズ胸に響いた過去がある
反響が怖くて紐が結べない

大正のラッパはやたら響くだけ
真つ昼間隣で響く工事音
西宮北口川柳会

あじさいにぬれ七色の夢を見る
雨蛙君もあじさい好きなんだ
離れると父母の力が見えてくる

胸に棲む虫一匹が離れない
美しい思い出ばかり遠いひと
遠距離も電話の声はすぐ隣

女房と離れて住むに酒が要り
本心が見えて距離置くおつき合い
離れば互いの心よく見える

離れがたくて夕焼の深くなり
カタカナで言うから距離が少しあく
ときどきは家事を離れて雲にのる

爪はあるく切って妥協の老いの坂
足の爪力仕事は任される
爪に灯をともし溜めたがゼロ金利

にくい人深い爪あとだけ残し
末席でひそかに爪を研いでいる
おべっかの上手な人が爪を研ぐ

哲子報

昌枝 静恵 義良 多喜

多喜 義良 静恵 昌枝

昌枝 静恵 義良 多喜

多喜 義良 静恵 昌枝

昌枝 静恵 義良 多喜

多喜 義良 静恵 昌枝

昌枝 静恵 義良 多喜

すつきりと拘り捨てた朝の靴
腹の全てしゃべつてうまい酒
言い勝つてなぜかすつきりせぬ胃の腑
思い切り泣いてすつきりした顔に
すつきりした男の貌で家を出る
割勘へすつきりしない下戸もいる
梅雨が来てすつきり治る花粉症
ユニクロをすつきりと着て褒められる
晴れわたりあれもこれもと洗濯機
花談議通りがかりも輪に入る
イエローカード出しても妻は休まない
生きている証し顔出すOB会

川柳塔わかやま吟社

牛尾 緑良報

隕石が宇宙の愚痴を喋りだす
宇宙遊泳いつかは亡母の星に会い
竹トンボお前も宙が恋しいか
宙返りして僕を観察してる猿
宙つりになって善意が返される
宇宙旅行へ躊躇していい旅靴
宙ぶらりの気持が風に煽られる
嫌われる宇宙の塵で生き伸びる
過ちに気付き人生宙返り
大いなる宇宙に生きている私
魂が宙を彷徨う未練かも
ポケットに鉛玉がある調教師
かくし玉しばらく夢を眠らせる
玉の汗実る明日を信じよう
玉の肌初夏の陽射しに盗まれる

澄子 武庫坊 石舟 鹿太 比ろ志 周信 富喜子 文 江美 高栄 正坊

城北川柳会

川久保睦子報

玉手箱の中に幸せ飼っている
玉手箱あけてないのに老いがくる
古稀までにきつと乗りたい玉の輿
スーパールの目玉に嵌る浪費癖
玉露より番茶が似合う俺の椅子
親子のキャッチボールに夢がある
アルコールの弱過ぎるのが玉に瑕
心眼を見据えて探る杖の先
行き先々で仏と出会う遍路杖
白い杖なんども温い声に合う
迷いごと母の一言杖となり
金よりも愛が重いと言う世代
回復期秤に自信湧いて来る
天秤をまだ使つてゐる小商い
秤にはとても載らない子への愛

優子 和重 あき子 富美子 健三郎 和香 三男 高夫 輝子 さち子 和 佐代子 正博 保州 公子

川柳高知

川竹

茄子の花だまつて散つてゆくばかり
変人と言われ総理になるお方
バラ色の空想ばかり傘寿の日々
変えたいと思う話に花が咲き
きつちりと町の八百屋は旬を積む
床上げに伸びる早さの爪を切る
脳味噌の減り防止にバスポート
表面がふくれるようにコップ酒
未練との葛藤がある火消壺
いろいろとポーズしてみる春の服
山に盛る砂に鉄入れ地鎮祭
何してるそろそろ父に言うてんか
輪の中に耳を貸さない個人主義
ガラス拭く昨日の不安消すように
夜叉の面ついても夜叉になれぬ性
過労死で逝くのもあろう蟻の列
とんがった日は花の笑顔に会いに行く
静けさがない連休の永平寺

あやめ 倫子 寿美子 道子 求芽 昭子 白峰 史風 典子 トヨ子 高栄 東雲 志華子 ひさ乃 一枝 順三 達公 松風報 愛宏 幸雄 圭二 快風 千鳥 竹萌 悦子 憲一

食文化日曜市の旬を盛り

日曜へ家事を貯めこむ共稼ぎ

日曜大工三日坊主が槌を振る

日曜市売れたか老婆店仕舞い

日曜を丸太のように寝てる父

日曜返上企業努力で生き残り

夫唱婦隨日曜日に変わらない

日曜日パパと約束したボール

急いでいる時信号と気が合わず

川柳塔なら

坊屋

柳弘報

あがいても時が過ぎれば暮となる

いち早く八十八夜の香が届く

幕の内さげて楽しい人と居る

赤タスキ番茶も出花摘む乙女

夫婦げんか何時も私が折れて暮

うつろな目記憶辿っているタバコ

我を折った影が私を主張する

茶の香り甘く流れて里の朝

叙熱より相手が多い佳吟賞

自分史に母の歴史を辿ってる

茶を間にさすまあいい話とんと下手

暮間から流れる夜風冷える通夜

死の海へと辿る有明むつころう

旅帰る茶漬の味が何よりも

鯨幕無情の風にゆれている

一服の緑茶が癒す胸の憂さ

さようなら下手な芝居の幕がおり

青春を辿ればそこにきのこ雲

京子

美々

三郎

功

佳風

和風

典雄

てるみ

圭風

柳弘報

博一

理恵

積子

カズ子

秋泉

敏子

富子

佳子

天狗

節子

美和子

たけし

章久

春蘭

春雄

良一

むつみ

絹子

人脈を辿ると袋小路に行く

今日もまた一幕演じたハブニング

行楽地案内近くにある穴場

お父さん新茶ですよとお仏壇

他人の手を借りて飲んでる大茶盛

ゆつくりと来いと妻待つ峠茶屋

合格の陰に茶断ちをした母

勉強不足で幕は上げられぬ

幸せの贅を楽しむ一番茶

新緑を追う行楽のリフレッシュ

呱呱の声いま人生の幕上がる

深い闇抜けて初心にたどりつく

尼崎尾浜川柳会

田辺

鹿太報

直球のほかは投げない父でした

仲よしになるベランダの雨蛙

食べるだけ食べて秤に乗るスリル

こぬか雨傘は一つでいいですか

神様が嘘を教えた午後雨

玉音を聞いたあの日暑かった

凶悪な事件へうずくちし胸

貴乃花ものすごい形相仁王立ち

ぐい呑みが謀反と雨を連れて来た

今のとこ候補の写真笑ってる

偏差値の土壌の陰にあるスリル

むし暑い一日凍らす学童重

涼しさを今日も運んだ露地の風

金のない財布にスリル詰めておく

ちよつとしたスリルが欲しいジンフイズ

桜竜

とし子

光栄

あやめ

茂雄

卓

隆盛

千梢

笛生

朝子

寿美

真理子

鹿太報

鹿太

その

幸子

江美

求芽

亀与子

イサミ

まさ

孝一

昭三

義芳

弘治

正治

満寿蔵

澄子

旅カバン傘をはなさぬ雨男

言い勝つて心に重い雨が降る

命綱巻いてスリルにはじけてる

菊日和菊の話で座り込み

川柳さざやま

酒井

靖子報

お茶席へ別の私がかしこまる

水道の水質信じ米を研ぐ

誘われてきたのに坂が待っている

サービスの銚子が和む宿の膳

坂越えて来たのに次の坂がある

三分粥生きよと言温い風

悔いひとつ背負うて登る女坂

ひと言が他人の心をもてあそぶ

薔の風時どき誘いに来て困る

あなたからひと言あつて春うらら

何気なく誘った罪の重いこと

春誘うまろやかに溶く絵の具皿

朝市でサービスもらう旅なさい

誘われてことわり切れず行く旅行

医師の顔どうやら坂を越えたらし

誘う目を信じ心の窓あける

恩のある影とゆつくり登る坂

太陽のサービスタ焼けて落ちる

八十の坂少し充電して登る

かわはら川柳会

上田

俊路報

薄霧に朝日が映える梨の花

薄皮で誘う饅頭旅心

十四郎

諷云児

柳宏子

紫香

純子

恵美

多美子

美智子

八重子

とみ子

つや子

かほる

君代

毬子

房江

美緒子

美紗子

泰子

富美

寿子

みはる

可住

靖子

登生

寿子

薄氷を踏んで絆を引き締める
熱かんを酌んで花見の座が長い
気心が合う友達と座る席
ヤレヤレと座ればいつか根がはえる
座りだこ母の歴史を物語る
廃校の庭に少年期が座る

ほたる川柳同好会 田辺 正三郎報

裾さばき此所は花街蛇の目傘
傘さしてじゃぶじゃぶと行く雨の中
百日の傘忍ばせている安堵
傘の花咲かせて巡る菖蒲園
ちびっ子は大人の傘を持ちたがる
合宿の終りと共に恋終る
雨模様蝶よ泊っていきなさい
あきらめともしや半ばの宝くじ
道半ばふと矢印が消えている
傘広げオゾンホールをすぼめている
経半ばは正座の膝も崩御する
新医療功罪半ばは要注意
泊らずに帰る背中にも未練着せ
梅雨入りに早速傘を置き忘れ
何のその傘寿一つの通過点
白寿まで生きる予定の折り返し
万歩計贈られノルマ父の日や
祖父の歌曲の半ばで唱交る
暑い汗試合半ばで負けを知る
俄か雨返し忘れた折りたたみ
番傘に屋号入った古い宿

泰良 一薫 輪多郎 余吏子 悦子 俊路
吉太郎 陽子 春子 須美子 桂子 賢次 幹治 敵子 信男 黒兎 勝 しょうろう 緑骨 祥風 久子 馬洗 いさむ 柳衛 雪子 正安

母の日の母が忘れていった傘
忘れても構わぬ傘を渡される
ドームから半ばで帰るトラファン
父の座が軽くなって世は乱れ
夫婦傘腰に手をやる思いやり
傘貸してまたの逢瀬をこころ待ち
梅雨ですな嵯峨野に似合う傘を買う
娘は帰る孫は泊まると駄駄こねる

わかあゆ川柳会 松本はるみ報

こだわって左は左右は右
こだわりの五右衛門風呂を薪で焚く
老いらくの恋を読んでる老紳士
こだわりが消えたかまると握り飯
これも花終をかざって笹が咲き
こだわって幾多の山を越えた鯨
こだわってこだわり続ける味気なさ
こだわってみたがやっぱり従いていく
残り火をまだ燃やす気が新世紀
人の死へ会長どもが名を売りに

はびきの市民川柳会 徳山みつこ報

喜美子 昭子 保子 柳童 長一 正三郎 直次 千里志
恵美子 好栄 民子 ちよえ はるみ かつ子 聖子 博利 清泉 白汀
生臭い話をとばす青葉の香
丘の風触れてやる気が湧いて来る
吹き抜ける青葉の匂い深呼吸
五月雨へ少し寒そな石仏
つまずきは手抜き料理で喧嘩する
よく喧嘩する夫婦だが仲が良い
同居してトーンの低くなる喧嘩

ケータイが止めに入った口喧嘩
吠えるだけ吠えて尻尾を巻いて逃げ
横からの風に喧嘩が煽られる
広告に惑わされては馬鹿を見る
けちんぼの財布狙っているチラシ
広告の要所要所にある撒き餌
橋筋に広告のカニ生きてます
尋ね人母一行にある思い
広告で私好みの春を追う
ベランダにはためく今日も布おむつ
ベランダで見ている音のない火花
ベランダでけなげに泳ぐ鯉のぼり
ベランダの派手な下着が目につく
ベランダの胡瓜の蔓は天に伸び
ベランダで幸せの風独り占め
ベランダでタバコ吸ってるお父さん

川柳大版 高木 信醇報

借金も芸の内だと世を渡る
ロマン追うロマンは僕の至福なり
合格を知らずの葉書が躍り
ふる里はなんべん来ても胸躍り
惜しまれて散る潮時を知る桜
黒潮の海で育ってきた父だ
てんごしなそれは危ないさわりなや
道草もてんごも好きなランドセル
且さんはチマチマ嫁はん借り上手
借金に来ました顔と書いてあり
躍進を願って燃えるスニーカー
洛醉 柳昌 宏 金太 鉄心 笑風 かよこ 秋雄 柳宏子 美花
かつみ 専平 一知 昭平 吐来 重人 敏 ダン吉 さとみ 久仁子 庸佑 昇 志洋 美喜 満寿蔵 みつこ

楽勝と思う油断の落とし穴

朝子

マンネリのたび墓石を洗つてゐる

弥
生

年金の財布へ義理が無理を言う

利ほん

するな肩叩かれた友の葬

修也

崖つ測無理を承知の頼みごと
ばちばちとツバメ地を翔ぶ梅雨間近
ばちばちと乳齒の抜ける孫の顔
リハビリにばちばち精を出す日課
一升びんばちばち飲めどすぐ終る
どないだすばちばちでんな川柳は
ばちばちと亀に学んだ処世術
目配せがばちばち中座する合図
ばちばちでいいと返渚促され

川柳塔きやらばく

政岡日枝子報

湧き水の美味い珈琲店へ行く
花の話をするとのはせがおさまるの
こころの地図塗りかえながら生きて
七転び八起きで生きた古稀祝う
財産があるわけでなし気楽な身
優秀な人が惚けると惚けたがり
風入れて古いはなしは消している
亡夫がしたように土産は守り札
毎日のニュースの海に溺れてる
来年はお前の歳だすこやかに
風は気まま逆らわないうで身をまかす
ミニトマトまつ赤小庭を飾つて
走りつづけてファン投票が一位
鳩も燕も自分の空を持つている
糸口がつかめぬままの風の乱
柳行李あくびこころしている戸棚
蛙鳴く声 豊穣を期待する
あすなろで終わった指を握りしめ

太一 雅視 雄造 公治 平和 泰作 佳子 慶一 清史
瑞枝 やえ 玲子 初枝 蘭 寿々子 亜弥 なみ 春枝 千秋 麗 日枝子 ふみ 千代 恵子 千春 八重子 富美子

富柳会

池

森子報

悪戯なまなこ少年期を想う
トロロコ列車駅に狸のお出迎え
古代舞うようにひらがな美しい
窓際に座つて知つた人情味
山開き男が燃える登山靴
失つた何かを旅の風に聞く
狭いの尾をふつている金魚鉢
天寿全うひらひらと弥陀の掌に
森の中滴るみどり抱きしめる
ひらひらと我がてのひらの蝶の夢
離婚沙汰妻がひらひら飛んでいる
お見合いの服を選んだのは父で
武者人形亡父の匂いが残つて
ひらひらと流れの中を生きのびる
結び目にたつぷり愛をしたたらす
冬の蛸一匹タコ焼きにしよう
つぶやきが溜まりコップが重くなる
いちご潰して甘い想いを滴らす
信頼の川が近頃濁り出す
失恋の色がコップの底にあり
沐浴の孫に滴り落ちる汗
尿コップ揺らしナースに叱られる
てんこ盛食べて細身の幸不幸
女三人噂話に羽根が生え
転生はあるか一本杉の蟬
てのひらの恋に汝の恋埋む
コップでも茶碗でもよし生一本

ひろこ 東雲 萩乃 宏 高栄 春蘭 満秋 信二 健二 一夫 けい子 光風 昭水 文子 花梢 登子 アキ タ子 紅紫朗 たかし 和代 巳代一 冬虹 淳一 年人 欣之 勇

豊中もくせい川柳会

田中

正坊報

ひらひらと翔んで余生はバラダイス
行く末はあなた任せのひねかぼちゃ
喜怒哀楽の真下に落ちるひとしずく
森子
裏道を歩く男の背が寒い
裏腹な意見を出して探られる
何かあるすぐお隣と比較され
比較して美人の店へ流れ込み
身のほどを知るから比べたりしない
ユニクロとすぐに値段を比較する
あれこれと比較した後ババつかわ
マネキンと比較 試着をあきらめる
伏兵を見抜けなかったへボ将棋
切り口の痛いところから説き伏せる
盃を伏せたがやっぱりもう少し
泣き伏して震える肩を持て余す
伏線に殺し文句が敷いてある
人々の心の奥には鬼が住む
古希すぎて豊かな胸を持て余す
花菖蒲 雨の暗さを吹きこぼす
お接待 両手合わせる遍路旅
横向きがよくて枕を高くする
観光マナー睨む玄関番 仁王
玄関の花 珍客によく香り
消しゴムで消せる嘘なら罪はない
間引かれる運命の種子も芽を伸ばす
宿命と思えば火の粉熱くない
玄関の音でそれぞれにわかる母

和子 誠 森子 正坊 庸佑 柳宏子 紫香 石舟 絹子 慶子 高栄 求芽 寿美子 周信 しげお 吉太郎 つえ子 知香子 英子 萬子 重人 靖巳 見清 諷云 女

川柳ふうもん吟社

杉本

李男報

飢えた子が今日も死ぬとは許されん
人生は道草をして余生生き
運命はどうして僕をもてあそぶ
口元の黒子が要らんこと嘆る
許さんと諭した父の目がやさし
許さんと言われる内は脈がある
どうしても請われて妻になりました
くしゃみしても杉の町角歩きたい
悟りきる事は出来ずに今日も生き
変人が民の人気をさらばえる
コソコソと裏取りきは許さない
太陽はセクハラ服を剥ぎにくる
妬くほどの恋一度だけ溺れたい
さめた愛どうしてなの追いかける
先が見えだす用心深くなる
川柳をばかにする者許さんぞ
倒れたと言うに銀行立っていた
青い鳥どうして僕の手に乗らぬ
どうしてか福の神様居着かない
潮騒にどうして胸が痛むだろ
五度目ではないか仏も許すまい
セクハラをされて残り火自信持つ
慰霊碑に二度と許さん誓いたて
遺産分けどうして知らぬ顔がいる
許さんと自分を正義感が責め
女房が午前さまとは許さんぞ
愛は共犯セクハラなんてウッフのフ

洋々 多哥由 鬼桜 蟹郎 節子 裕子 すなお のり代 一京 昌鼓 美雪 一瑠 益子 春名 健一 圭一郎 孝男 無限 はるみ 金祥 美恵子 忠良 茶人 悦子 良雄 螢

あの脳にどうして嘘を詰めたのか
兄弟でも金の貸し借り許されぬ
恍惚で母の錯覚叱れない

岬川柳会

八十田洞庵報

どことなく心迷わす風の向き
どことなく姉の仕種に浮かぶ母
過疎の村地域ぐるみの大家族
値もかさも丁度手ごろで買う土産
新緑の類撫でる風散歩する
青風外務省は大慌て
波乗りを楽しむ如く難を越え
面差しが似ているこぬか雨の中
どことなく弾んで見えて恋なのか
隠してもどことなく出る遊び癖
どことなく年金だけでしんどおま
どことなく素振りてわかる二人仲
どことなく仕ぐさが似てる三世代
今日も来る家族の声を待つ患者
寂しくて茶飲み友達募集集中
電子メールは現代の相聞歌
プロボーズ家族になる日憧れる
七色の夢がはじけるシャボン玉
どことなく亡母の影似る侍芸天
どことなくひかれる心恋だろか
聞き役が話上手へ味方する

川柳ねやがわ

江口

後家さんが元氣印で氣がもめる

茂登子 宗明 喬水 みやこ 悦子 昌夫 信博 勝 よし子 桜琴 和美 茂平 令子 東雲 里子 富美子 みつこ とみ 勇 ユミ子 孝子 倅子 洞庵 年子 度報 勇太郎

髪鏢と貧乏神と渡り合う
恋人の恋人は私でないらしい
恋人と間違う母の若い声
ええやんかどうせ一緒になる二人
恋人だつたらうるさい猫の髭
五十年恋文眠る帯の中
恋人のはなしがしたい有頂天
無視と言ふこの手の罰は手厳しい
無視続く耐え切れなくて振る尻尾
無視してもいいわと妻の置き手紙
ふんふんと妻の小言を聞いてない
独り善がりは無視されても気がつかぬ
風評を軽くないすも年の功
嫌いだが存在感が無視出来ず
傘もささずに無視された道帰るゆく
うっかりと褒めたらつづく豆ごはん
迂闊にも妻の電話にどちらさん
うっかりと押しに悔いてる重い印
うっかりで左遷をされる羽目になり
うっかりとほんとの年齢を書いちゃった
玉手箱うっかり開けたけん京期
うっかりがいつも火種になる夫婦
座ってからベンキぬりたてどわかり
ゆつくりと暮らす良さ知る共白髪
夫とはときどきうまくいきません
あわてると小銭なかなか出てこない
財産はないが信用あるつもり
終電車同じメークの子ら眠る
こども向けニュースが手頃老い二人

時弘 亜成 かすみ 仁清 とし子 日出子 朝子 一笑 ルイ子 波留吉 一風 光子 冬葉 磯 英子 利昭 庸佑 三郎 修一 博泉 度 忠央 恵子 たもつ あやめ 茜 重三

強かな蜥蜴の尻尾買いに行く

瘡告知五臓六腑が一度にショート

連休に疲れ会社でリラックス

沖合いの大型船は雲の上

沖に出る我が子の無事を祈る母

神様のミスが尻尾のある少年

リラックスする名葉が見つからぬ

沖合いでSOSと鷹が舞う

幸せな沖に大きな虹が出る

帝の母大江神社におわします

沖鰯は煮ても揚げてでも食べてよし

大物が沖にいるとは限らない

僕の尻尾は無類の大きさかも

褒め殺し尻尾びりびり巻いている

沖に出て海の恐さを感じ知る

二十四億あれば宇宙でリラックス

肝臓が嘆く男のリラックス

田畑には五穀豊穡無農薬

私の沖にさまよう船一つ

沖見ればあしたに続く道がある

塀の上野良は尻尾で語りかけ

金貸しよ仏顔して尻尾ふる

リラックスし過ぎた父が帰らない

火の章を読むと尻尾が揺れ動く

尻尾でもよいとガンバル新社員

鯛焼きの尻尾を食べに寺まわり

後五分お待ちください知恵が湧く

森林と沖とは青の一族だ

子や孫が五感に活を入れに来る

さんだ

北野 哲男報

位牌の前話せぬ父に問をする

知恵のない奴の口ぐせ知恵を出せ

何となく気の晴れぬ今日赤を着る

夏野菜しつかり食べでダイエツト

あかんべ言えるまで児に知恵がつき

仏さん御利益欲しさに拝んでる

時々は虫干しもする知恵袋

さむらいの顔した猫を抱いて寝る

落雲雀声をこころして急降下

知恵などがなまじあるから不仕合せ

八起き目のダルマは後を振り向かぬ

父が好き葉つ葉のたいたんあぐら組む

定年後明け暮れ六ツで日を送る

知恵を磨く砥石をもとめ一人旅

生真面目な男が女鎗びさせる

川柳クラブわたの花

吉村 一風報

直線がスウィットと引けた老いの筆

男と男息子の話聞いてやる

意地悪な神があだ名を聞いてくる

風よ風その後風の子知らないか

あだ名から先にでてくる恩師の名

悪口も忠告も聞き感謝する

真つ直ぐに歩いた過去に悔いはない

父さんのさえぬ駄洒落が無視される

出社してタイムカードを打つただけ

一歩ひきお辞儀ばかりを繰り返す

風紋は生きてるように砂丘撫で

直線の夫支える丸い妻

酒二合父は音痴な佐渡おけさ

くだおれ人形笑みていやいやし

マンネリの二人暮らしに孫がきた

引出しの奥に隠してある手紙

おくれの手をなであげ風を追う女

極楽へ行く直線の道がない

マンネリと気付かぬほどのマンネリに

庭の松子らと一緒に枝をはり

マンネリをあくびの虫でもりをする

ストレスが溜まると進む腹時計

春の風全部欲しくて聞く窓

リハビリに直線なぞるマヒの指

五七五なんでもこんなに難しい

岩美川柳会

石谷美恵子報

正直過ぎる長所を少しもて余す

痛いところ庇つてくれる人がいる

貧乏という長所があつて響き合う

三三九度そしてコントの幕があく

弱虫で我慢強さが取柄なり

愛しい女を夕焼けに封じこめ

ボロ車さいごまでののが長所

過信した長所に足をすくわれる

古傷を庇い迷彩服を着る

わが青春は口紅もない化粧箱

体型を庇うブラウス探し当て

百までは生きる夢あり我慢する

トシエ

まさこ

いつみ

春江

知佐子

美代子

民子

明

八寿子

（彌）道子

宏至

ミツ子

（二）道子

君江

宏

忠良

節子

きみ子

一瑤

多哥由

螢

一夫

裕子

季芳

和枝

よしえ

圭一郎

ふる里のコントにいつも星がある
自分史は胸に封じてもつていく
口先で庇い合つてゐる嫁姑
封印の過去がちくちく戸を叩く
封筒も色褪せ何もかも時効
花の咲く日までと思ひ我慢する
庇う手と突き放す手の親ころ
点一つ砂の中から出す長所
車間距離おいて庇つてくれている
つばめの果下つて猫と知恵くらべ
遮断機が下りて追跡封じ込め
笑わせて泣かせてコント幕にする
長所見てお前選んだ目が痛い
捻挫した足庇つたら萎えてきた
イチローは決して自慢などしない

川柳塔おとり

原 みを報

人柄の良さは数字に出て来ない
遠慮なく好意を受ける難しさ
むずかしい話へそつと出るビール
頂点に立つのはとてもむずかしい
難しいことを笑顔で頼まれる
脳組織古代の謎も難しい
むずかしい話は酒の後にする
新しいことは何でも難しい
奈落まで私を誘う火の女
誘われて良かったなあと空の旅
来ないかも知れぬが声を掛けてみる
フェロモンが誘う危ないところでした

雅女 克枝 公乃 美恵子 一京 孝男 和歌子 睦子 重忠 静生 喬水 大漁 蟹郎 完司 庸二 せつ子 紀子 艶子 芳光 風花 孝子 敦子 雄々 幸次郎 由多香 真一

誘われたコーヒー愚痴もまぜて飲む
誘われた嬉しさすこし派手を着る
ちよつとだけ誘ひ手応え確かめる
再三のエンマの誘ひ聞き流す
お誘ひも婦唱夫随のお付き合ひ
居眠りを誘う話も拍手する
憎しみもあるが忘れてこんにちは
カンガルー袋の中でこんにちは
知らぬ地で子供にもらうこんにちは
電話が鳴っている廊下の向こう側
転校をした日の廊下長かった
車椅子廊下の温い血が通う
病室をさがす廊下の長いこと
回廊の香りが夏をつれてくる
鶯が廊下づたいに鳴いてくる
お誘ひの頼りうれしい趣味の会
よく笑うその日暮しが福誘う
渡りきるとドラマが待っている廊下

長柳会

加島

由一報

安すぎる丹精こめたわしの茄子
疲れたら帰つておいで母の海
持て成しは丹精こめた京料理
海峡をひと跨ぎして阿波おどり
肩書がしつくり来ないハイヒール
幸せは水平線のまだむこう
しつくりといかぬ嫁との無言劇
世も変りイルカとたわむ海の中
女房が咲かせた花を踏んじやつた

登美 彰雄 千秋 義弘 伝住 雅通 邦昭 仁子 富貴子 宏章 黙光 野草 和子 一弘 舍人 清子 みさを

横浜おおば川柳会

清水

潮華報

手拍子がしつくり合はぬ三世代
そつとそつと海辺へ戻す恋の傷
海底をゆつくり歩む蟹の旅
海に來て心の憂さを投げすて
少年の夢果てしなく海が好き
丹精な庭にひとときわ花菖蒲
容赦ない世相丹精遠く丸
母の声届け海底えひめ丸
雲に似る丹精こめた五葉松
大海を夢みて泳ぐ熱帯魚
別れの日育てた牛の目に涙
落日の海で絶叫したくなる
しつくりとベレー帽似合い画伯風
逃げて来た二人に海も荒模様
海行かば生き永らえて古稀傘寿
軍神を生んだあの日の真珠湾
恋すると乙女は海が見たくなり

一 潤子 敬二 直樹 英美 芳野 冬虹 武男 靖子 けい子 和子 正子 文次 幸雄 由一

不況下のノルマに重い朝の靴
長電話鍋が悲鳴をあげたした
肩たたき慌て謝る人違い
朝市をメーリンにたてるバスツアー
急行と知らず飛び乗り慌てだす
祝電の披露に順位ついている
安心が揺らぐ生保の満期高
どうしよう家に切符を置いたまま
朝仕事妻の介護も板につき
上寿司でたった一人のバースデー
キャンプ場急な豪雨に孤立する
ステーキが出てから祝辞聞いてない
朝ドラで泣かされてから主婦をする
麻酔から覚めて妻の掌握りしめ
考えた祝辞お先にしてやられ
壇上で固有名詞が出てこない
諍った事は忘れた朝のお茶

いずも川柳会

佐藤

治代報

天ばかり仰ぐ男でだらしがない
大仏を仰ぎうごめく蟻でいる
わたくしがすぎ透るまで空仰ぐ
仰がれて大仏さまは目を閉じる
ふんざりがつかなくなると空仰ぐ
仰ぐ樹が生まれ変わって道になる
父ちゃんの植えた杉からくる花粉
植木鉢に金庫の鍵が埋めてある
植える木に合わせた鉢を用意する
生き様の樹をてのひらに植えている
風が植えたタンポポだったかも

道子 純子 達也 笑子 亜希子 嘉信 八重子 絹子 敏子 省子 雅子 為佐子 裕峰 広和 二郎 潮華 満秋

端だから敵も味方も良う見える
端っこが一番うまいあこ野焼
命の端が危ういいまに生きている
突端へ置く想いの太太陽
目尻からこぼれた毒を見てしまふ
川端の宿で螢と夜を明かす
どんどんとわたしの時間食べている
どんどんと貴方好みに染められて
改革へ女どんどん強くなり
ロボットがどんどん人間去勢する
不器用な私どんどん走るだけ
どんどんと地球の時間食って生き
落ち椿姿崩さぬままに散る
農一途生きる姿を子に残す
夕焼けに姿やさしい人の影
どの風で私の姿包もうか
合掌の姿で母が老いてゆく
残り苗あげたお方のその後聞く
どうしたの後姿にある愁い

翠洋会(吟行)

六吹

尚士報

今日だけは花の香りに酔うている
楊貴妃もクレオパトラも花園に
時代考証ならず羅漢に謎がある
有耶無耶の羅漢五百と白椿
梅雨晴れ間詩人にさせた花の園
友の顔みんな羅漢によく似たり
羅漢寺で枯れて花ぞの欲が出る
母子像の羅漢へそと手を合わす
羅漢みな福耳持たれ無口なり

美佐子 満江 圭詩朗 治代 安子 彬 文子 カツ子 義良 多賀子 玲子 篤子 桂子 房子 昭二 歌子 寿美 草丘 れいじ 志華子 蛙 希久子 千歩 春 日の出 保子 久峰 喜美子

水府忌番傘本社句会

日時 8月6日(月) 締切18時50分

会場

三井アーバンホテル(JR・地下鉄弁天町すぐ)

宿題

「ゲーム」 青木 勇三選

「時事川柳」 柏原幻四郎選

「忍者」 片岡 湖風選

「いつも」 河内 天笑選

「親しい」 磯野いさむ選

席題1題あり 各題2句 会費千円

はるか昔見つめる羅漢口むすぶ
頑張って生きてきました羅漢さま
霧雨の女羅漢に傘さしぬ
晩酌で涅槃に遊ぶ羅漢さま
気が晴れぬ羅漢も梅雨はいやと言う
人間模様描く羅漢の顔と顔
大家族五百羅漢の立ち話
真っ白な心で羅漢と向かい合う
亡父に似た羅漢は矢張り酔っている
父に似た羅漢にそとワンカップ
五百体母の羅漢を探してる
あれこれと羅漢の私語を風と聞く
チャイムが鳴ってステテコが大慌て
これからの考えさせたい友の葬
魔屋のいく年苦勞重ねしや
おばあさんになつてしまつてから長い
はめて欲しけなしても欲し本音です
翠洋会吟行傘は必需品
相合傘半分濡れていてうれし
どん底で結ぶ絆に嘘はない

さと美 志のお 蕉子 尚士 東雲 恭昌 昭 富子 靖巳 正坊 舞夢 正雄 さだを 澄子 千梢 義 千枝子 会美 笛生 周信

柳界展望

龍馬ならどうする二十一
世紀 川上 大輪

▽人事往来△

■6月10日第25回全日本川柳2001年新潟大会に出席のため、薫風名誉主幹、天笑主幹、楓楽副理事長、常任理事、同人数前日9日から新潟行。

■薫風名誉主幹は、第2回文学ルート川柳第二次選者として6月22日尾道市行。

★第2回文学ルート川柳は五市延べ応募者数4055名で締切られ、本社関係の入賞者は次のとおり。
《奨励賞》
お祭りに腕の手入れが二
三日 月原 宵明

《佳作賞》

▼計 報▲

東野大八先生（本社相談役・美濃加茂市）は7月18日前立腺がんのため死去。88歳。告別式は20日可児市清秀苑で行われ、天笑主幹・岳人理事長ほか柳友多数が参列した。

▼計 報▲

■西原 博氏（同人西原艶子さん夫君・鳥取県）は、肺がんのため6月9日逝去。享年69歳。

■大槻ふさえさん（副理事長長西出楓楽さん母堂・京都市）は、老人性肺炎のため6月10日逝去。享年89歳。

■奥田 賢氏（常任理事奥田みつ子さん夫君・西宮市）は、肺がんのため6月30日逝去。享年74歳。

★第一回井笠川柳会笠岡誌

上大会「葉ひこぼさ」課題

「トップ」梶川雄次郎・岡田千茶・西川けんじ共選

「善人」梶川サナエ・八島白龍・小野真備雄共選 応募料千円（発表誌呈）B5

用紙一枚に各題2句（計4句）連記し、下、住所氏名、用紙を明記。締切8月25日

〒714-0081 笠岡市笠岡507-68 井笠川柳会宛 用紙0865-6315858 賞品1一位に句碑建立（2名）

▼訂正とお詫び▲

■同人名簿P21八田 敏氏。5月の3市合併により大宮市にさいたま市

■6月号P100（追悼文）下段6行目、澤紗香信女、釈紗香信女

■7月号P60（水煙抄）14行目、ゲーム→ゲノム

P92（茴香の花）下段7行目、大抵→大抵 表3左上

（茴香の花の選者）西出楓楽・宮西弥生

竹原川柳会創立45周年記念川柳大会

日時 8月26日（日）9時開場

会場 たけはら美術館 文化創造ホール
（竹原市中央五丁目 竹原合同庁舎内）
会費 二千元
（昼食・発表誌・池田コレクション）
宿題と選者
「樹」 岡山市 木下 草 風選
「泳ぐ」 今治市 和田 宏選
「竹」 広島市 定本 広 文選
「鏡」 西宮市 小松原 爽 介選
「宇宙」 豊中市 橘 高 薫 風選
出句締切11時半 各題2句
欠席投句拝辞 席題なし
事前出句
「父」 東広島市 石 原 伯 峯選
ハガキに二句連記。8月10日締切
出句及び連絡先
〒725-0022 竹原市本町一丁目14-3
小 島 蘭 幸 宛
電話・FAX共通0846(22)6626
主 催 竹原川柳会
後 援 竹原市教育委員会

一賞選考規定（要約）

- ① 路郎賞 川柳塔欄の入選句から8句
川柳塔賞 水煙抄欄の入選句から8句
昨年9月号から今年8月号までの一年間の入選句の中から自選し、8月号に刷込みの応募用紙を使用の上、8月15日必着で本社宛郵送する。
- ② 第一次選は名誉主幹・主幹・理事長・副主幹・副理事長・編集長・選考委員で行い、各賞20編ずつ選出し、第二次選者へ郵送する。
- ③ 第二次選者は折り返し、路郎賞、川柳塔賞の各選考結果を本社宛通知する。選考には順位をつけ、第一席（五点）、第二席（四点）、第三席（三点）、第四席（二点）、第五席（一点）の五編の番号を予め本社で用意したハガキに記入のこと。
- ④ 第二次選者
本社関係 名誉主幹・主幹・理事長
地方関係 Ⅱブロック（一）選者数
北海道・東北 関東 北陸（2）
【京都・奈良（1）】【大阪（6）】【兵庫（3）】【和歌山（2）】【鳥取（4）】【島根（3）】【岡山・広島・山口（2）】【四国・九州（2）】

地方関係の選者は、適宜交代制をとり、均衡をはかることにする。

計25名

⑤ 川柳塔欄・水煙抄欄に六ヶ月以上出句した人に応募資格を認める。

川柳塔社各賞選考規定

- ① 川柳塔社には、路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・茴香の花賞・一路賞・各地柳壇賞の六賞があり、毎年十月に表彰する。
- ② 自選集の作者は、すべての賞の対象としない。
- ③ 各賞とも、原則として同一人に同一賞を授賞しない。
- ④ 路郎賞・川柳塔賞については、準優秀作の場合、上位は差し支えないが、同位または下位には授賞しない。
- ⑤ 路郎賞・川柳塔賞の選者は、その任期中は路郎賞の対象としない。また、愛染帖・茴香の花欄の選者も、路郎賞の対象としない。
- ⑥ 路郎賞・川柳塔賞の選考要領については、別途に定める。
- ⑦ 愛染帖賞・茴香の花賞は、それぞれ選者が決定し、主幹の承認を得るものとする。
- ⑧ 一路賞・各地柳壇賞は、それぞれの選者が候補作品を主幹に提出し、授賞句を決定する。

（備考）

この規定は、現行の選考規定を一部改定したもので、常任理事会で承認の上、平成十二年度から実施するものとする。

平成十三年度二賞選考委員

第一次選者（七名）

橘高 薫風・河内 天笑・板尾 岳人・宮口 笛生
前 たもつ・西出 楓楽・石原 靖巳

第二次選者（二十八名）

本社関係 橘高 薫風・河内 天笑・板尾 岳人
地方関係 （二十五名）

（一）内は人数 ブロック内五十音順

【北海道・東北・関東・北陸ブロック（2）】

高瀬 霜石・播本 充子

【京都・奈良ブロック（1）】 坊農 柳弘

【大阪ブロック（6）】

安藤寿美子・江口 度・河内 月子・吉川 寿美

小池しげお・八十田洞庵

【兵庫ブロック（3）】

門谷たず子・長浜 澄子・古川 奮水

【和歌山ブロック（2）】 福井 桂香・松原 寿子

【鳥取ブロック（4）】

新家 完司・鈴木 公弘・中原 諷人・政岡日枝子

【島根ブロック（3）】

板垣 草丘・西村 早苗・原 章峰

【岡山・広島・山形ブロック（2）】

大石あすなろ・森井 菁居

【九州・四国ブロック（2）】 川崎ひかり・久保 正剣

昨年九月から今年八月の間に

誌友から同人になられた方へ

「路郎賞」「川柳塔賞」のいずれか一方を選択して応募して下さい。

ただし、「路郎賞」には川柳塔欄作品から、「川柳塔賞」には水煙抄欄作品からの応募となりますので、間違いないようにお願いします。

平成十三年度各賞選者

愛染帖賞

波多野五楽庵

茴香の花賞

西出 楓楽

一路賞

高田美代子 西口いわゑ

各地柳壇賞

川上 大輪 山本希久子

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
城 北 川 柳 会	18日(土)午後1時から 家・動く・天気・自由吟	中宮老人憩いの家 地下鉄千林大宮駅2号出口徒歩8分 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8 神夏磯典子
川 柳 会 梨 花	18日(土)午後1時から 葉・夕霧・墓・センサー・雑詠	鳥取労務者総合福祉センター(鳥取駅南)1F会議室 〒680-0841 鳥取市吉方温泉4-268-205
岸 和 田 川 柳 会	18日(土)午後1時半から すっきり・せびる・総合 妥協	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0827 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
川 柳 ねやがわ	19日(日)正午から 丸出し・供養・雫・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
岬川柳会	19日(日)午後1時半から 利口・編む・つかむ・自由吟	岬町 美崎苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八田洞庵
もくせい 川 柳 会	20日(月)午後1時から 星座・願う・ひいき・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東歩5分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801 田中正坊
南 大 阪 川 柳 会	22日(水)午後6時から 災害・キャラバン・夢路・目盛	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
高槻川柳 サークル 卵 の 花	23日(木)正午から なんで・浮く・オアシス ばらばら・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1142 高槻市宮田町3-8-8 川島諷云児
川柳クラブ わたの花	24日(金)午前10時から 策・Eメール・日没	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
東大阪市 川 柳 同 好 会	25日(土)午後6時から いのち・情け・切符・火	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
はびきの 市 民 会 川 柳 会	26日(日)午後1時から そわそわ・主・抜く 「コンクール」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川 柳 ふうもん 吟 社	26日(日)午後1時から 名案・サバイバル・どうせなら	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
京 都 塔 の 会	27日(月)午後1時から 盆・……すこす・一望	ハートピア京都 地下鉄九条駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
川 柳 塔 みぞくち	27日(月)午後8時から 仏壇・好き・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757-3 小西雄々

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6629-6914)へご連絡ください。

8 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
堺川柳会	7 月 29 日 (日) 第19回 夜市川柳大会	堺総合福祉会館 5F大研修室 7月号 P.105参照 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
川 柳 塔 な ら	2日(木)午後1時から 奇跡・眉・迷う	船橋フロムワン(船橋商店街内) 近鉄奈良駅西へ7分・JR奈良駅北徒歩5分 〒636-0144 奈良県生駒郡斑鳩町稲葉西2-4-23 中原比呂志
尼 崎 いくしま	3日(金)午後1時から 沼・曲る・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
富 柳 会	4日(土)午後1時から 坂・空間・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩3分 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
倉 吉 川 柳 会	4日(土)午後1時から 骨・復活・増える	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡大栄町由良宿2072-17 谷口次男
川 柳 塔 ま つ え	4日(土)午後1時半から 名物・浴衣・舟	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0859 松江市国屋町381 竹内すみこ
川 柳 塔 みちのく	4日(土)午後4時から 保険・ぐったり・沈む	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ2階「川柳道場」 〒036-8002 弘前市元大工町50-5 波多野五楽庵
川 柳 塔 唐津支部	5日(日)午後1時半から 地図・石・ツァー	唐津市 栄町公民館 〒847-0082 唐津市和多田満町1-2-13 仁部四郎
尼 崎 尾 浜 川 柳 会	7日(火)午後1時半から 地獄・花火・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 阪急武庫之荘北口からバス⑨番尾浜2丁目下車 〒661-0976 尼崎市潮江5-2-47 田辺鹿太
川 柳 塔 打 吹	11日(土)午後1時から くどくど・砕く・肥満	倉吉市上灘町 上灘公民館 〒682-0805 倉吉市南昭和町21 野口節子
川 柳 塔 わかやま	12日(日)午後1時から 二階・抜く・熱帯魚・葉	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
八尾市民 川 柳 会	12日(日)午後1時から 指・大胆・好き・持つ	山本コミュニティセンター内3F学習室(近鉄山本駅) 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
西宮北口 川 柳 会	13日(月)午後1時から 土曜・弱い・まさか・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分 プレラにのみや 〒662-0841 西宮市岡度町2-19-515 山本義子
ほ たる 川 柳 同 好 会	14日(火)午後1時から 秘密・化ける・未練	豊中市立養池公民館 阪急・モノレール養池駅西へ150米 〒561-0864 豊中市夕日丘1-7-5 田辺正三郎

編集後記

☆七月七日の麻生路郎・霞乃先生句碑建立の全ての行事は、皆様のご支援で盛会裡に終えることが出来、厚く御礼申し上げます。

☆今月号には、9月24日の薫風名譽主幹叙勲記念川柳大会用と、10月7日の川柳塔まつり用のハガキ二枚が同封されています。お間違いないようお願いします。

路郎賞・川柳塔賞の応募もお忘れなく！

☆以前に当欄に書いたウォーキングは、その後もずっと続けている。所用のついでに歩く時もあるが、このところ日中は暑すぎるのでパス。我が家は都心部にあるので、早朝の空気の澄んだ時間帯がベストだとは思いますが、早起きが苦手でもパス。たいてい夕方六時

頃から約一時間歩く。その頃の空気は車の排気ガスで汚れているから、果して健康にいいのか疑問だが、歩いたあとは体が軽くなる。

☆街を歩いていると、このところの厳しい時世を目的あたりにする。あちこちのテナントビルに、貸事務所、貸店舗の張紙が目につく。

喫茶店が次々店を閉じているのは、自販機の飲物で間に合わせるからだと聞く。

☆反対に増えているのは、携帯電話の店、酒類の量販店、百元ショップ、コンビニ、レンタルビデオ屋、出来合いの弁当屋、ファーストフード店などである。

☆これらの店々が、情緒のないよそよそしい街にしている、と感じるのは歳のせいだろうか。足と反比例して、些か心重く歩き終える日も無気にしもあらず、である。

臘梅のこと

ひとこと

臘梅と言う花は、陰曆十二月つまり禪家でいう臘月の臘八会の頃に咲く、梅のような香気のある花だから臘梅だと、ずっと思っていた。ところがテレビで蠟細工のような花だからと言うのを二回聞いた。頭にきたから広辞苑を調べると、やはり蠟細工のようだからとある。意地になって古い辞典や、

虚子編の歳時記ありったけの歳時記をひっくり返して見たがやはりおなじであった。そう言えば、昨今は年賀状の添え書きに「旧臘」高配にあずかり」などというのを見かけなくなった。私はもはや石頭の化石世代なんだ！年齢考えようねと、みんなが言う筈である。何をローバイしろんやだとうくそっ！ほつといてくれ！

(安藤寿美子)

★川柳の会にお誘いをいた

でいる次第である。

★来年四月から「和楽器」初「川柳を教科書に」との話を聞いた。そのうち句報

品を中学で」との話が持ち上がった。和楽器と言

郵便局の窓口嬢に口頭で領収書は、「三本ガワにヤナギの会」と言う辞書をひ

ことと情操教育も含むらしい。個々には、三味線、太鼓など若者の目覚ましい活

を渡したが、やおら領収書を書きあげ高らかに「カ

躍もあるが、離れて行くのもまた事実である。

★最近、相撲業界も下火と

今窓口さんとも仲良くし

聞く。地方巡業も減らし立

て直しを図っているとか。

★先日、日川協大会に出席させていただく機会を得て席上、川柳を英語で発表し

ておられる先生のトークを伺った。

★今や、世界を闊歩する日本であるが、守るべき、広めるべき交流は難しい。

★川柳は、鉛筆一本と辞書で勉強でき、ちよつぱりロマンになれる。

(よ)

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

「発表（10月号）」

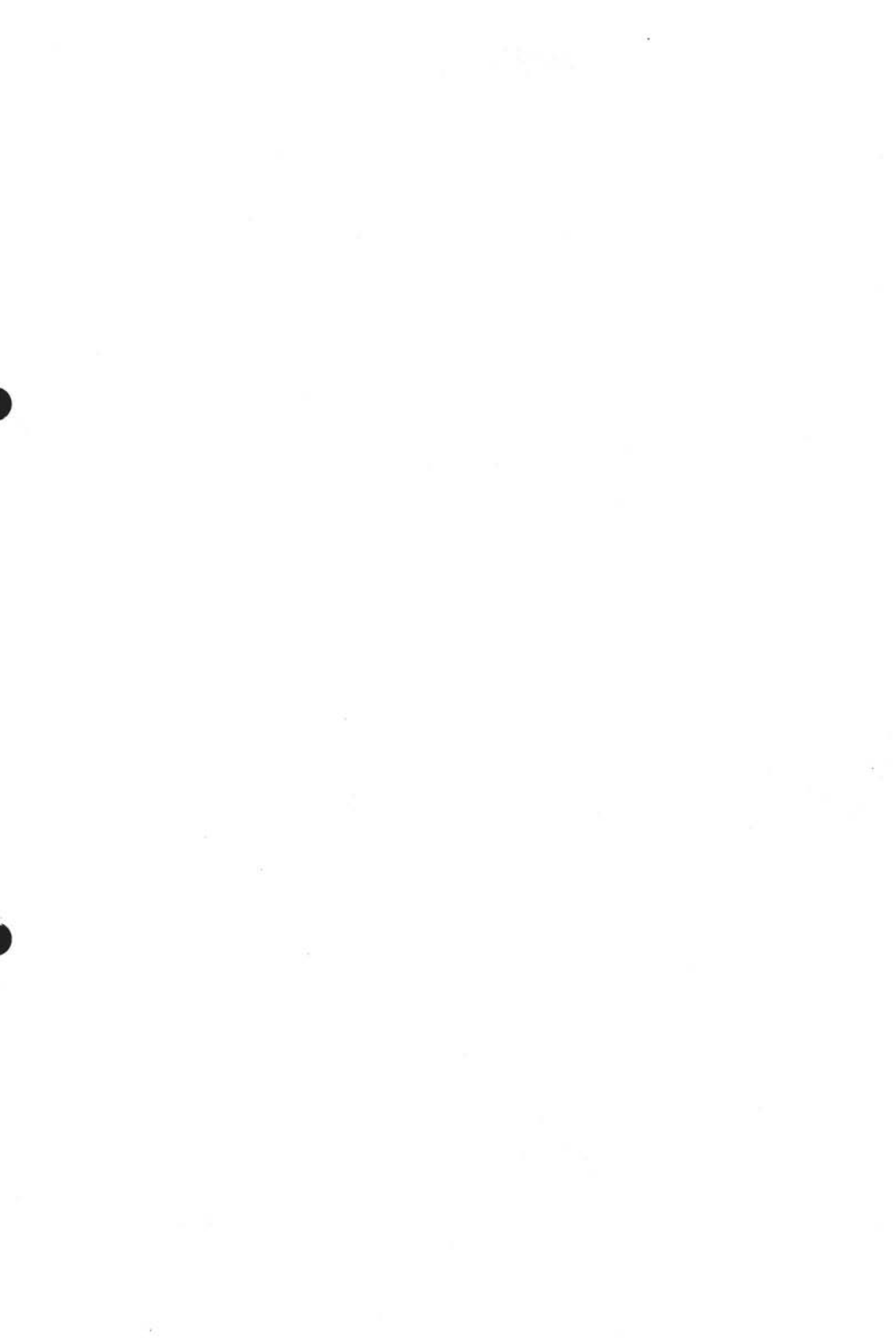
地名

姓・雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようにお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



賞選考
応募用紙

○印を入れてください。

路郎賞（川柳塔欄・同人）

川柳塔賞（水煙抄欄・誌友）

きりとりせん

地名

姓 · 雅号

◎下段に掲載月と掲載頁を記載のこと。
◎裏ページの要項を読んで応募してください。

月	月	月	月	月	月	月	月
頁	頁	頁	頁	頁	頁	頁	頁

応募要項

① 川柳塔欄・水煙抄欄に六カ月以上、出句した人に応募資格を認める。

② 平成12年9月号から平成13年8月号までの自分の入選句から8句を選ぶ

路郎賞——同人は川柳塔欄から応募
川柳塔賞——誌友は水煙抄欄から応募

③ 8句と掲載月、掲載頁を楷書で書き、8月15日必着のこと

④ P 142・P 143を参照して下さい。

作品募集

川柳塔(8句)	河内天笑選
水煙抄(8句)	板尾岳人選
愛染帖(3句)	波多野五楽庵選
茴香の花(3句)	宮西弥生選
吟題(3句)	美田旋風選
課題	吉田あずき選
「地」	玉置当代選
「石」	吐田公一担当
「ツァー」	
初歩教室「席」(3句)	

10月号発表
(8月15日締切)

11月号 課題吟「愚」「戸」
「中年」 初歩教室「ソフト」

本社 8 月句会

とき 8月3日(金) 午後5時半・6時半締切
ところ アウイーナ大阪 4階

兼題「チャンス」 海老池 洋選

席 題	「ふと」	「待つ」	「嘘」	「過去」
会 費	1000円	1000円	1000円	1000円
投 句 料	500円	500円	500円	500円
選 題	長浜澄子選	福本英子選	宮口笛生選	河内天笑選
備 考	1題 当日発表(各題2句以内)			

本社9月句会 9月7日(金)

兼題 「風」「呼ぶ」「杯」
「美しい」「輝く」

夜市川柳募集

第3回「打つ」 新家完司選
ハガキに3句 8月末締切
投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌最終ページの投句用紙を使用してください。
- (2) 愛染帖・茴香の花欄・一路集（課題吟）および初步教室への投句は、同人・誌友に限り、川柳塔柳箋を使用してください。ただし茴香の花欄は女性だけ。
- (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。
- (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

定価 六百元 (送料84円)

半年分	四 千 円 (送料共)
一年分	七千九百円 (同)

二〇〇二年（平成十三年）八月一日発行

編輯兼
司
內
灌
台

印刷所 美研
ア
ー
ト

大坂市阿倍野区三木町二一〇一六

〒545-0005

川柳塔社

電話 (〇六) 六五—六九—四番

振替〇〇九八〇一五二三三六八番

橘高薫風叙勲記念川柳大会

と き 平成13年 9月24日〔月〕振替休日

午前11時30分開場・午後1時開会

ところ リーガロイヤルホテル 3階 光琳の間

〒530-0005 大阪市北区中之島5-3-68 TEL (06) 6448-1121

〈第一部〉お 話

1:40

立命館大学教授 木津川 計氏
作 家 田 辺 聖 子氏

〈第二部〉パネルディスカッション

2:50

司 会 N H K 学 園 大 木 俊 秀氏
札幌川柳社 斎 藤 大 雄氏
川柳公論社 尾 藤 三 柳氏
柳都川柳社 大 野 風太郎氏
番傘川柳本社 森 中 恵美子氏
俳 人 坪 内 稔 典氏

〈第三部〉作品発表（欠席投句拝辞）

4:00

雑 詠（当日投句）川 柳 大 学 時 実 新 子 選

雑 詠（事前投句・8月20日締切）橘 高 薫 風 謝 選

各選者1句 別々の句をお出し下さい

当日投句締切 12時30分

事前投句先 〒545-0005 大阪市阿倍野区三明町2-10-16

ウェムラ第2ビル202号室

川柳塔社 TEL (06)6629-6914

〈第四部〉祝 宴 3階 光琳の間

5:00

会 費 第一部～第三部 2,000円（橘高薫風全句集・別冊川柳塔呈）

第四部 8,000円 各会費は当日集めさせていただきます。

宿 泊 12,000円（朝食付き）

参加申込・事前投句・宿泊は本誌同封のハガキをお願いします。

当日は平服でお越し下さい。お問い合わせは本社事務所へ

主 催 川 柳 塔 社